

四街道市嶋越遺跡(1)

古墳時代以降編

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XVII —

平成26年9月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

よつ かい どう しま こし
四街道市嶋越遺跡(1)

古墳時代以降編

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XVII —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第732集として、独立行政法人都市再生機構の物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市嶋越遺跡の1冊目の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代後期を主体とする多量の土器や奈良・平安時代の集落跡などが検出され、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。本書はそのうち、古墳時代以降の調査成果を報告するものです。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成26年9月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 堀 田 弘 文

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市物井字嶋越 464 ほかにある嶋越遺跡（遺跡コード 228 - 023）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は第 1 章に記載した。
- 5 本書は主任主事 大岩桂子が執筆し、主任上席文化財主事 井上哲朗がとりまとめた。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。
 - 第 1 図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「佐倉」(NI-54-19-14-2) (平成 10 年発行)
 - 第 9 図 国土地理院発行 1/50,000 地形図「佐倉」(NI-54-19-14) (平成 10 年発行)
 - 同 「千葉」(NI-54-19-15) (平成 9 年発行)
- 8 第 2・3・5～8 図は、独立行政法人都市再生機構作成の物井地区現況図を加工して使用
- 9 図版 1 の遺跡周辺航空写真は、京業測量株式会社による昭和 44 年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した座標はすべて日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅳ系）で、図面の方位はすべてその座標北を示す。

遺構



遺物



● 土器

■ 土製品・石製品

★ 金属製品

目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法と調査概要	2
第2節	遺跡の位置と環境	11
1	遺跡周辺の地形	11
2	周辺の遺跡	11
第2章	遺構と遺物	15
第1節	概要	15
第2節	竪穴住居跡	15
1	古墳時代	15
2	奈良・平安時代	17
第3節	その他の遺構と遺物	47
1	掘立柱建物跡	47
2	調査区北半部の遺構	48
3	調査区南半部の遺構	50
4	遺構に伴わない遺物	62
第3章	まとめ	69
第1節	調査成果の概要	69
第2節	灰釉浄瓶および上総型土師器杯について	71
報告書抄録		巻末

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の地形	3	第22図	SI-021及び出土遺物	32
第2図	物井地区遺跡分布図	4	第23図	SI-022・023及び出土遺物	33
第3図	嶋越遺跡年度別調査区域図	5	第24図	SI-024・025及び出土遺物	35
第4図	グリッド設定法	6	第25図	SI-027及び出土遺物	36
第5図	嶋越遺跡トレンチ配置図	7	第26図	SI-028・029・030及び出土遺物	37
第6図	嶋越遺跡遺構検出状況全体図	8	第27図	SI-031・032・034及び出土遺物	39
第7図	遺構検出状況部分図（遺跡北半部）	9	第28図	SI-033及び出土遺物	41
第8図	遺構検出状況部分図（遺跡南半部）	10	第29図	SI-035・036及び出土遺物	43
第9図	周辺の遺跡分布図（奈良時代～中世）	13	第30図	SI-037及び出土遺物（1）	44
第10図	SI-016・017及び出土遺物	16	第31図	SI-037及び出土遺物（2）	45
第11図	SI-008及び出土遺物	18	第32図	SI-038及び出土遺物	46
第12図	SI-009及び出土遺物	19	第33図	SI-039及び出土遺物	47
第13図	SI-010及び出土遺物	21	第34図	その他の遺構（1）	48
第14図	SI-011及び出土遺物	22	第35図	その他の遺構（2）及び出土遺物	49
第15図	SI-012及び出土遺物	23	第36図	その他の遺構（3）及び出土遺物	51
第16図	SI-013及び出土遺物（1）	24	第37図	その他の遺構（4）及び出土遺物	54
第17図	SI-013及び出土遺物（2）	25	第38図	その他の遺構（5）及び出土遺物	56
第18図	SI-014及び出土遺物	26	第39図	その他の遺構（6）及び出土遺物	59
第19図	SI-015及び出土遺物	27	第40図	その他の遺構（7）及び出土遺物	61
第20図	SI-018・019及び出土遺物	28	第41図	遺構外出土遺物	63
第21図	SI-020及び出土遺物	30	第42図	古代集落変遷図	70

表目次

第1表	嶋越遺跡堅穴住居跡一覧表	64	第2表	嶋越遺跡堅穴住居跡出土土器観察表	65
-----	--------------	----	-----	------------------	----

図版目次

- 図版1 遺跡周辺航空写真
- 図版2 調査前遠景, 調査区中央部建物敷地部分, 調査区中央部
- 図版3 SI-008・同カマド・同遺物出土状況, SI-009-017, SI-009カマド, SI-017カマド, SI-010, 同カマド
- 図版4 SI-011・同カマド, SI-012・同カマド, SI-013・同遺物出土状況・同カマド, SI-014
- 図版5 SI-014カマド内遺物出土状況・同カマド, SI-015・同カマド, SI-016, SI-018, SI-019・同カマド
- 図版6 SI-020・同カマド内遺物出土状況・同カマド, SI-021・同遺物出土状況・同カマド, SI-022・同遺物出土状況
- 図版7 SI-022カマド, SI-023カマド・同カマド内遺物出土状況, SI-024・同カマド内遺物出土状況, SI-025・同カマド, SI-027
- 図版8 SI-027遺物出土状況・同カマド, SI-028, SI-029カマド, SI-030・同カマド, SI-031・同カマド
- 図版9 SI-032・同カマド, SI-033・同カマド, SI-034カマド, SI-035・同炭化物出土状況, SI-036
- 図版10 SI-036遺物出土状況・同カマド・同煙道断面, SI-037・同遺物出土状況, SI-038, SI-039, SB-002
- 図版11 SK-001, SK-013遺物出土状況, SD-001, SD-002, SK-004, SK-005, SK-006, SK-011
- 図版12 SK-014, SK-037, SD-007, SD-009, SX-013, SX-010, SK-031, SK-032
- 図版13 SK-033, SK-034・同人骨出土状況, SX-011, SK-021北部・SK-038, SK-038, SK-021・038, SX-012
- 図版14 SK-035, SK-036, SK-020・同遺物出土状況, SK-018・019, SK-050, SK-052, SK-053
- 図版15 住居跡出土遺物(1)
- 図版16 住居跡出土遺物(2)
- 図版17 住居跡出土遺物(3)
- 図版18 住居跡出土遺物(4)
- 図版19 住居跡出土遺物(5), その他の遺構出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過（第1～3図）

四街道市は、県都千葉市に隣接するとともに、東京都と新東京国際空港を結ぶJR総武本線や東関東自動車道などの交通網が整備されたことなど、その利便性から近年人口増加が著しく、宅地の安定的供給が期待されている地域である。

住宅・都市整備公団（現・独立行政法人都市再生機構、以下「公団」という）では、JR総武本線物井駅と既存の「千代田団地」の間に広がる約95.7ヘクタールの地域において物井地区土地区画整理事業を計画した。事業の施行にあたり、区域内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育庁文化課（現・教育振興部文化財課）と公団とのあいだで協議が重ねられた結果、一部について緑地・公園として現状保存するほか、大半の区域についてはやむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、発掘調査は財団法人千葉県文化財センター（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）が受託して実施することとなった。

物井地区の台地上には、ほぼ全面にわたって遺跡が分布している（第1・2図）。記録保存の対象とされたのは、今回報告する嶋越遺跡をはじめとして、小屋ノ内遺跡、稲荷塚遺跡、御山遺跡、新久遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡、棒山・呼戸遺跡、高堀遺跡、館ノ山遺跡、北ノ作遺跡、郷遺跡、中久喜遺跡であり、昭和59年5月に棒山・呼戸遺跡の調査が開始され、以後断続的に発掘調査が実施されている。現状保存される遺跡は古屋城跡と出口遺跡内の古墳群の一部となる。

今回報告する嶋越遺跡の発掘調査は、平成20年度から平成22年度にかけて断続的に実施された。調査対象地の面積は13,602㎡である。各年度の調査範囲は連続しており、北から調査区（1）・（2）・（3）とした（第3図）。

年度ごとの組織、発掘調査期間、担当者などは以下のとおりである。

平成20年度 調査区（1）

調査研究部長 大原正義

北部調査事務所 所長 豊田佳伸

調査期間 平成21年2月16日～平成21年3月25日

調査面積 （規模）1,652㎡（確認調査）上層167㎡／1,652㎡
（本調査）上層260㎡

調査担当者 上席研究員 土屋調一郎

平成21年度 調査区（1）

調査研究部長 及川淳一

北部調査事務所 所長 野口行雄

調査期間 平成21年4月6日～平成22年5月20日

調査面積 （規模）990㎡（本調査）上層990㎡

調査担当者 上席研究員 土屋調一郎

平成 21 年度 調査区 (2)

調査研究部長 及川淳一

北部調査事務所 所長 野口行雄

調査期間 平成 21 年 7 月 1 日～平成 22 年 2 月 26 日

調査面積 (規模) 5,850㎡

(本調査) 上層 3,820㎡

調査担当者 上席研究員 土屋潤一郎・糸川道行・薮 淳一

平成 22 年度 調査区 (3)

調査研究部長 及川淳一

北部調査事務所 所長 野口行雄

調査期間 平成 22 年 7 月 1 日～平成 22 年 7 月 30 日

平成 22 年 8 月 31 日～平成 22 年 12 月 8 日

調査面積 (規模) 6,100㎡ (確認調査) 上層 622㎡ / 6,100㎡・下層 25㎡ / 920㎡

(本調査) 上層 2,490㎡

調査担当者 上席研究員 田井知二

面積については、調査対象面積及び完了面積は 13,602㎡である。上層確認調査面積は 1,407㎡、上層本調査面積は 7,560㎡、下層確認調査面積は 25㎡、下層本調査面積は 0㎡である。確認調査面積及び本調査面積の合計は 8,992㎡である。上層本調査は、主に台地上の攪乱部分と急斜面を除いた範囲である。

鶴越遺跡の遺構は奈良・平安時代の堅穴住居跡が主体であるが、遺物については縄文時代中・後期の土器が主体であり、膨大な量が出土している。そのため整理作業については、縄文時代を主体とする作業と、古墳時代以降を主体とする作業とに分けて実施した。

本書は古墳時代以降を主体とする報告であり、整理作業内容もその分を記述する。

平成 23 年度 調査研究部長 及川淳一

北部調査事務所 所長 野口行雄

整理期間 平成 23 年 9 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

整理内容 水洗・注記～原稿執筆

整理担当者 主任主事 大岩桂子

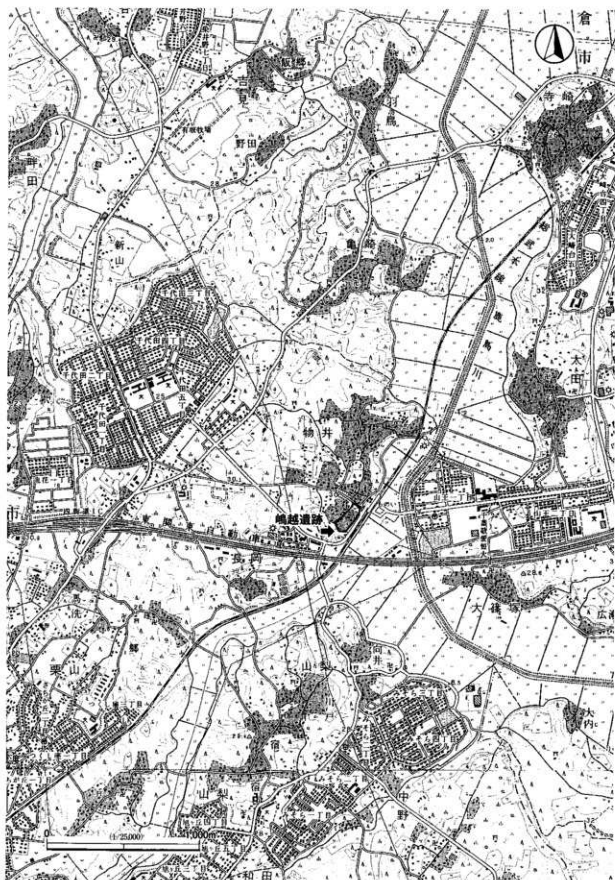
平成 26 年度 調査研究部長 伊藤智樹

整理課長 今泉 潔

整理内容 編集・報告書刊行

2 調査の方法と調査概要 (第 3～8 図)

物井地区では、事業範囲全域を公共座標 (日本測地系・国家標準直角座標第Ⅸ系) に基づく方眼網で覆って調査を行っている。方眼は 50 m × 50 m の区画を大グリッドとし、名称は包含網の北西角を起点にして、東へ 1・2…、南へ A・B…として、31 T のように両者を組み合わせて大グリッドの名称としている。その内部を 100 分割した 5 m × 5 m の区画が小グリッドで、北西隅を 00、南東隅を 99 としている (第 4 図)。00 を起点に東へ 01・02…、南へ 10・20…と振っており、大グリッドと組み合わせて 31U-06 のよう



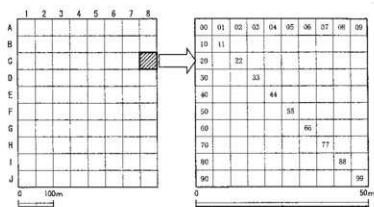
第1図 遺跡の位置と周辺の地形



第2図 物井地区道跡分布図



第3図 鶴越遺跡年別調査区域図



第4図 グリッド設定法

北緯 35° 41' 05.72085", 東経 140° 11' 55.16835"である。

平成 20 年度は、平成 21 年 2 月から 3 月にかけて、1,652㎡を対象に上層の確認調査を実施した。対象範囲は遺跡の最も北側の部分であり、調査区(1)とした。地形は東から西に下る緩斜面である。その結果、遺構については奈良・平安時代を主体とする竪穴住居跡が東西両端部を除いて広範囲に検出された。本調査対象面積は 1,250㎡と決定されたが、平成 20 年度についてはその一部 260㎡についてのみ調査を実施し、奈良・平安時代の竪穴住居跡 1 軒と中世の溝状遺構 1 条が調査された。遺物については、奈良・平安時代の土器も出土しているが、遺物包含層から縄文土器が多量に出土した。なお下層調査については、調査区(1)全域にローム層が遺存しないため、必要なしと判断された(第 3・5～7 図)。

平成 21 年度は、調査区(1)の本調査範囲 1,250㎡の内、残る 990㎡の本調査を実施した。その結果、奈良・平安時代を主体とする竪穴住居跡 18 軒などの遺構が調査された。引き続き、調査区中央部分(調査区(2))の調査を実施した。地形は西側に若干の平坦面があるが、多くは(1)同様、西から東に下る緩斜面である。縄文時代早期から晩期にかけての遺物包含層 600㎡が調査され、多量の縄文土器のほか、土偶・耳飾等の土製品が出土した。また奈良・平安時代の竪穴住居跡 9 軒その他の遺構が調査された。平坦面は地形が改変されて粘土層が露出していたが、中・近世の土坑・井戸等が検出された。なお、下層調査については、調査区(1)同様、全域にローム層が遺存しないため、調査対象から除外された(第 3・5～8 図)。

平成 22 年度の調査対象地は調査区南側部分(調査区(3))である。地形は調査区北側に若干の平坦面があるが、中央から南側にかけては北から南に下る斜面となる。調査の結果、縄文時代の遺物包含層 2 地点、奈良・平安時代の竪穴住居跡 7 軒、中・近世とみられる土坑・ピット数 10 基等が検出された。平坦面の大部分は削平と建物の基礎等による擾乱が激しく、若干の遺構を確認したにとどまった。下層については、確認グリッドでⅢ層から 1 点の石器が出土した。周囲を拡張して調査したが、ほかに石器の出土はなく、本調査は不要と判断された(第 3・5・6・8 図)。

遺構番号は、遺構の種類ごとに 001 から始まる 3 桁の数字を付与し、数字の前に遺構の種類を表す略記号を付けた。略記号は、竪穴住居跡が SI、掘立柱建物跡が SB、土坑・土坑墓・井戸・台地整形区画が SK、溝状遺構・道路状遺構が SD、その他の種別が SX であり、SI-001、SK-001 のように呼称した。整理作業では調査時の名称を継承し、本書でも遺構番号の変更はしていない。

に表記される。遺構・遺物の位置は、この方眼網に基づいて記録した。遺構・遺物の標高は、東京湾平均海面(T.P.)からの海拔高で記録した。

嶋越遺跡の基準点の一つで、調査対象範囲の比較的中央に位置する 31U-02(平成 21 年度調査区内所在点)は、日本測地系座標で X=-35,250.0000, Y=33,360.0000 である。世界測地系は JGD2000 系変換値で、X=-34,894.7809, Y=33,066.2985,

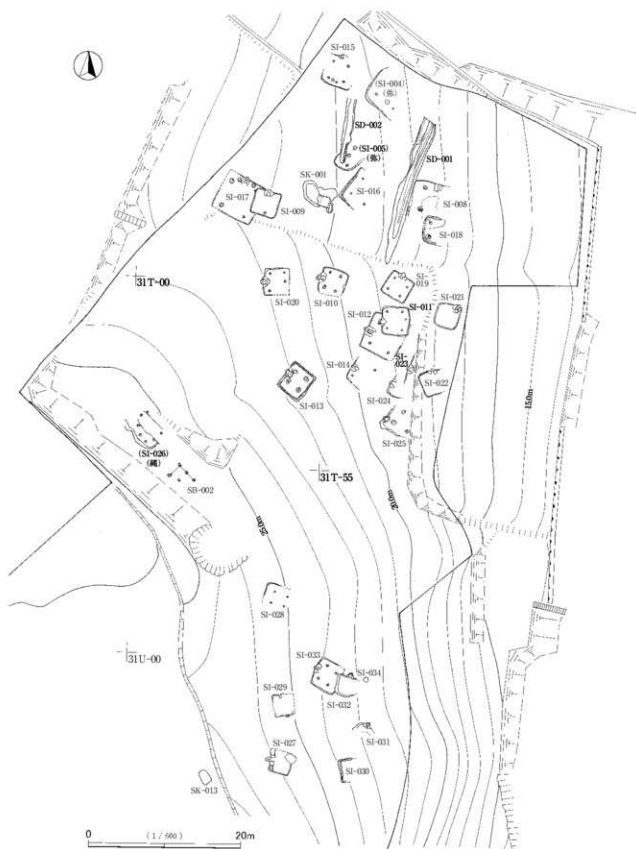


第5図 船越遺跡トレンチ配置図

0 50m (1/1,000)

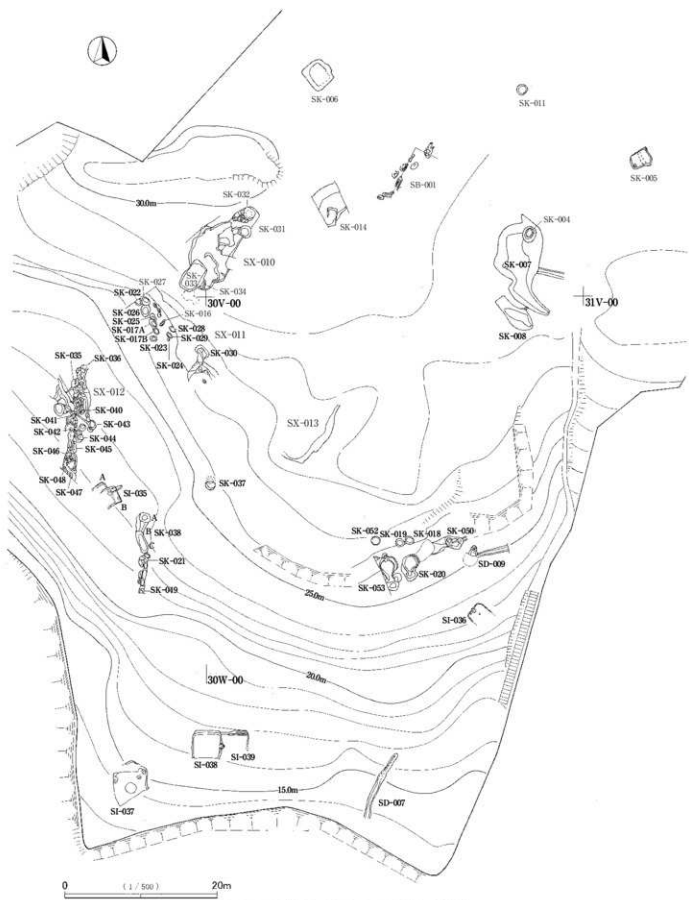


第6图 船越跡踏道構検出状況全体图



第7図 遺構検出状況部分図（遺跡北半部）

() 付遺構は本書では扱わない



第8図 遺構検出状況部分図(遺跡南半部)

本書で扱う遺構および番号は次のとおりである。古墳時代～平安時代竪穴住居跡 32軒 (SI-008～025・027～039 (SI-035はA・B 2軒))・掘立柱建物跡 2棟 (SB-001・002)、中・近世台地整形区画 (土坑群) 6箇所 (SK-007・010～013・020を含む周辺部)・井戸 2基 (SK-004・032)・土坑墓 4基 (SK-018・019・034・052)・土坑 42基 (SK-001・005～008・011・013・014・020・021A～I・031・033AB・035～037、038A～C・039～049・050・053、SD-009に重なる遺構番号なし 2基)・溝状遺構 4条 (SD-001・002・007・009)・ピット約 30基 (SX-011・012内、遺構番号なし)である。抜けた番号は、縄文・弥生時代の遺構或いは調査中に遺構ではないと判断され欠番となったものである。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡周辺の地形 (第1・2図、図版1)

水郷地帯といわれる現在の利根川下流域は、近世初頭まで香取海といわれる内海であった。内海の名残が現在もこの地域に点在する大小の湖沼であり、千葉県においては印旛沼がその最大のものとなる。四街道市は、印旛沼の西半部に流れこむ手繰川と鹿島川 (の支流小名木川) の源流部に位置し、市域の北端部に当たる物井地区の遺跡は両河川の上流部にはさまれた洪積台地上に所在する。台地上は、東西の両河川へ続く小支谷によって浸食され、樹枝状の複雑な地形を示す (第1・2図、図版1)。

嶋越遺跡は、物井地区の南東端部に位置し、遺跡の東から南の半分ほどは、鹿島川が閘折した沖積低地に接する傾斜地となっている。現在の鹿島川からの距離はおよそ350m～400mである。遺跡の西側には、北西方向に延びる小支谷が浸入し、館ノ山遺跡との間を限っている。遺跡の北西方向には平坦な台地が続き、物井の中心集落が存在するが、その起源は平安時代の集落にまで遡るものと推測される。

嶋越遺跡が立地する地形は、中央が平坦部で、標高は28m～29mである。ただし地層の状況から、かなり削平されていることがうかがえ、当初の標高はこれより幾分か高かったとみられる。削平は、近世以降の家屋の建設や近代の開発によるものと思われる。中央の平坦部からその北東及び南西方向の地形は傾斜面となる。北東方向の斜面最下部の標高は12m～25m、南西斜面の標高は12m～28mである。

嶋越遺跡の南側はやや急な斜面であり、一部に段整形がみられる。中世の築城に伴う地形改変の可能性も考えられたが、台地中央部などでその後の地形改変が著しく、中世陶磁器の出土も少ないため、明確なことはいえない。一方、台地平坦部から北東側は緩斜面である。一部に段差がみられるが、中世の台地整形か否か不明である。

2 周辺の遺跡 (第2・3・9図)

印旛沼に四方から流入する諸河川の流域には、旧石器時代から近世まで、各時代の遺跡が多数存在している。鹿島川・手繰川流域も例外ではなく、弥生時代から古墳時代の遺跡としては、鹿島川下流部の寺崎遺跡 (弥生時代集落)・大崎台遺跡 (弥生時代環濠集落)・江原台遺跡 (古墳時代集落)、手繰川下流部の飯塚作遺跡 (古墳群) (以上佐倉市)、四街道市物井地区にも物井古墳群や館ノ山遺跡 (古墳時代集落) などが、後述するように、奈良・平安時代集落や中世城館跡も数多い。物井地区より北側の鹿島川と手繰川にはさまれた台地上にはほぼ全面に、いずれかの時代の遺跡が存在するといつてよい。

本報告書では主に古墳時代終末期から奈良・平安時代の集落を扱うが、この時代の遺跡もきわめて多い。そこで物井地区における同時期の遺跡についてのみ簡単にみておきたい。

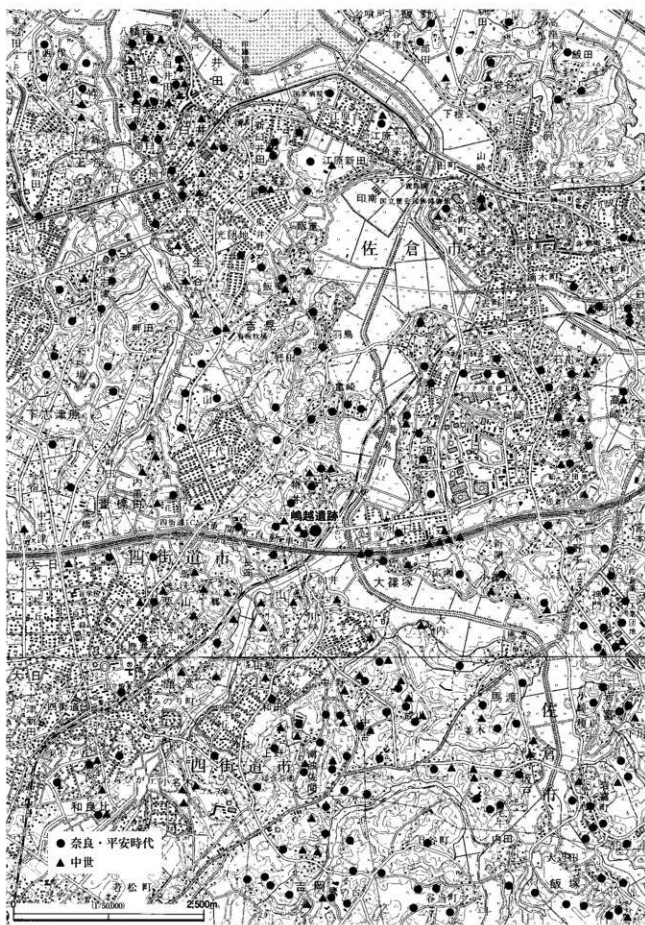
物井地区内の遺跡において、古墳時代以降の集落の立地は、古墳や方形周溝状遺構などの埋葬遺構の立地とは顕著な対照を示す。物井地区北東端部から南西方向に侵入する不動谷と呼ばれる谷があるが、集落遺跡はこの谷の東側の台地上に限られる。不動谷の西側の台地上では、新久遺跡で弥生時代後期の住居跡18軒、中久喜遺跡で古墳時代前期の住居跡5軒が検出されたが、古墳時代後期以降の住居跡は1軒も出土していない。これに対し埋葬関係の遺構は、御山遺跡で古墳時代後期から終末期にかけての古墳11基、奈良・平安時代の方形周溝状遺構23基、これと同時期とみられる有天井土坑15基が検出され、新久遺跡・出口遺跡・清水遺跡・出口鐘塚遺跡では、物井古墳群と総称され、合わせて38基の後・終末期古墳が発掘されている。一方、不動谷の東側に当たる台地上では、小屋ノ内遺跡で円墳4基と小規模な円形周溝状遺構2基、稲荷塚遺跡でも同程度の円形周溝状遺構2基が検出された程度である。

不動谷の東側の遺跡で発掘調査された堅穴住居跡は、小屋ノ内遺跡で古墳時代後期11軒、奈良・平安時代283軒（掘立柱建物跡142棟）、稲荷塚遺跡で古墳時代後期11軒、奈良・平安時代229軒（掘立柱建物跡53棟）、館ノ山遺跡で古墳時代前期2軒、中・後期71軒、奈良・平安時代9軒、郷遺跡で奈良・平安時代12軒、北ノ作遺跡で弥生時代後期～古墳時代前期32軒、古墳時代後期3軒、奈良・平安時代11軒と膨大な数に達する。

古墳時代後期の集落としては館ノ山遺跡が最も大きく、物井古墳群の造営主体であった可能性が高い。古墳時代後期から終末期にかけて、暦年代では6世紀後半から7世紀前半にかけて、集落からかなり離れた土地が埋葬地として選定されたようである。物井古墳群の分布地域は不動谷の谷奥、手繰川水系からも遠い分水嶺上に位置し、水田面からは最も遠く集落立地として適さないことなどから、埋葬の地に定められたのであろう。一旦古墳群が形成されると、不浄の地としての認識が定着したためか、奈良・平安時代になっても集落が営まれることはなく、引き続き埋葬地としての利用が継続された。中世以降の居住の痕跡も確認されず、御山に真言宗の密教道場である金剛寺が営まれた以外は、放牧地などとしての利用にとどまったようである。

奈良・平安時代の遺跡は、各河川を臨む台地縁辺を主体に数多く分布する¹⁾。物井地区での集落遺跡では、小屋ノ内遺跡・稲荷台遺跡が集落規模や小屋ノ内遺跡出土墨書土器などから、「下総国千葉郡物部郷」（『和名類從抄』）の中核集落であったことが推測されている。不動谷東側の小屋ノ内遺跡・稲荷塚遺跡・郷遺跡・館ノ山遺跡の集落遺跡のさらに東側には江戸時代から今日に至る物井集落があって、都市再生機構の開発区域外になっているが、そこにも奈良・平安時代以降の集落が展開していたようである。例えば、鶴越遺跡と郷遺跡の間は直線で500mほどあるが、その間の現集落の位置にも連続していたと考えられる。面積的には、小屋ノ内遺跡と稲荷塚遺跡を合わせたほどの古代集落が現集落下に存在したと想定しても大きな誤りはないだろう。また、約2.5km南方の中台地区の権現堂遺跡では、奈良・平安時代と中世の大規模集落が検出されている²⁾。

中世では、鹿島川流域の両岸に城館が多く存在し、特に臼井地区や山梨地区に多く、台地整形区画などの集落遺跡も中台遺跡群などで検出されている。物井地区の北東端部には北ノ作遺跡と古屋城跡、南東端部には館ノ山遺跡という中世後期の城館跡があって、これらの遺跡に南北に限られた区域が、中世においても物井集落の中心部であったことを物語る。なお、戦国期の史料では、千葉氏の家臣として妙見宮遷宮の従者として、臼井氏一門をはじめ、志津・栗山・山梨・中台・蕨（和良比）・小舟木（小名木）等の現四街道市南部の地名を家名とする諸領主が確認でき、遺跡分布の傾向と一致する。



第9図 周辺の遺跡分布図(奈良時代～中世)

物井地区の当財団による既刊報告書は、以下の注のとおりである³⁾。また、平成22年度には、当財団調査区の北側隣接区で、市道建設に伴う(財)印旛郡市文化財センターによる発掘調査が実施され、縄文時代早期・後期から晩期包含層と古墳時代堅穴住居跡1軒が検出され、遺構は伴わないが中世陶磁器類も出土している⁴⁾。

注1 第9図周辺の遺跡分布図は、主に下記文献を基に作成した。

- 千葉県教育委員会 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(2) - 東葛飾・印旛地区 - (改訂版)』
同 1999『千葉県埋蔵文化財分布地図(3) - 千葉市・市原市・長生地区 (改訂版) -』
- 2 高橋 誠 2004『権現堂遺跡 - 四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査(Ⅱ) -』
(財)印旛郡市文化財センター
- 3 渡邊修一ほか 1994『四街道市御山遺跡(1) - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ -』
岡田誠造 1999『四街道市出口・鍾塚遺跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ -』
古内 茂・田中 裕 2005『四街道市小屋ノ内遺跡(1) 旧石器時代編 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ -』
糸川道行・大内千年・岸本雅人ほか 2006『四街道市小屋ノ内遺跡(2) - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ -』
糸川道行ほか 2007『四街道市小屋ノ内遺跡(3) - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ -』
沼澤 豊 2008『四街道市郷道跡・中久喜遺跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ -』
糸川道行・岸本雅人ほか 2009『四街道市稲荷塚遺跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ -』
沼澤 豊 2009『四街道市清水遺跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ -』
糸川道行・小林信一ほか 2011『四街道市館ノ山遺跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ -』
沼澤 豊 2011『四街道市新久道跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ -』
落合章雄 2011『四街道市清水遺跡・新久道跡 旧石器時代編 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ -』
沼澤 豊 2012『四街道市出口遺跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ -』
鳴田浩司・黒沢 崇ほか 2013『四街道市北ノ作道跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅼ -』
野口行雄 2013『四街道市出口遺跡 旧石器時代編 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅽ -』
大岩桂子ほか 2013『四街道市館ノ山遺跡(2) - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅾ -』
沼澤 豊 2013『四街道市御山遺跡(2) - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅿ -』
- 4 川嶋裕毅 2011『千葉県四街道市鳴越遺跡(第2地点) - 物井2号線埋蔵文化財調査委託 -』
(財)印旛郡市文化財センター

第2章 遺構と遺物

第1節 概要

発掘調査は3期に分けて行われたが、その都度トレンチによる確認調査を実施し、遺構の有無、土層の状態などを確認した上で、本調査範囲を確定し、本調査に移行した。調査対象面積 14,592㎡に対し本調査面積は 7,560㎡であった。

調査対象範囲の中央部は台地上の平坦面にあたり、本来であれば最も多くの遺構が検出されるはずの立地であるが、近世以降、物井集落の住宅建設地となり、様々な造成工事で地盤も下げられたようで、堅穴住居跡は1軒も検出されなかった。造成工事をまぬがれた北側と南側の斜面部で合計35軒の住居跡が確認されたが、それらも壁上部を削られたものが多く、総じて遺存度は悪かった。本来は検出数の2倍前後の住居跡が営まれていたと考えて大きな誤りはないだろう。

堅穴住居跡35軒の内訳は縄文時代1軒、弥生時代2軒、古墳時代2軒、奈良・平安時代30軒である(第1表)。古墳時代以前の住居はすべて北東側斜面部にあり、縄文時代の1軒は斜面最上部に、弥生時代と古墳時代の住居跡は斜面中腹の発掘区の最北端部に検出された。

奈良・平安時代の住居跡も北東側斜面に24軒と多く所在し、南側斜面では6軒確認されたにすぎない。下総台地では南側斜面は急崖状を保ち、北側斜面は霜柱などで徐々に崩れ緩斜面を形成することが多い。嶋越遺跡のある台地も同様の様相を示しており、傾斜の緩い北東側斜面の方に、多くの堅穴住居が営まれることになったのであろう。南側斜面の6軒のうち3軒は斜面の最下部に位置する点が注目される。なお、各住居跡出土土器の観察所見については第2表に記載した。

堅穴住居跡以外の遺構は、南側斜面部の斜面上部から中腹にかけて、多くは地山整形に伴う形で検出された。3基の井戸以外の性格はほとんど不明だが、人骨の出土したSK-034及び円形土坑であるSK-018・019・052の4基は近世の土葬墓の可能性が高いと考えられる。また、ほとんどの遺構は時期不明であるが、中世遺物は少なく、江戸時代後期の肥前や瀬戸・美濃産の陶磁器、在地の内耳土器などの破片を伴うものがあることから、遺構の時期は江戸時代後期主体と推測できる。

第2節 堅穴住居跡

1 古墳時代

SI-016 (第10図、第1・2表、図版5)

位置 調査区北部、31S-76グリッド付近に位置する。

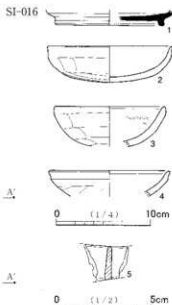
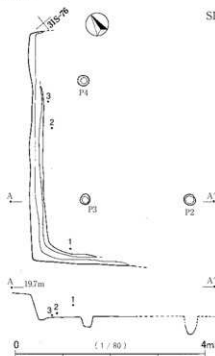
規模・形状 南東部分2/3程は、斜面に堆積した黒色土の地山に掘り込まれた壁及び床面部分が流失、または覆土との差異が不明確なため検出できなかったためか、西壁と南壁の一部のみの遺存である。他の多くの住居跡も同様な状況である。一辺4.96m、壁高20cm～51cmである。主軸方向はN-40°-Wである。

床面 硬化面は明確には確認できなかった。

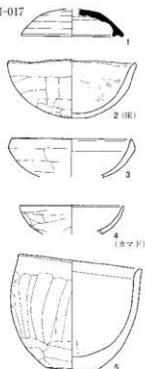
柱穴 3基検出された。径は20cm～25cm、深さは12cm～27cmと浅く、小規模なものである。

出土遺物 西壁付近に点在するが、図化できたのは4点のみである。1は湖西産須恵器の高台付き杯である。2～4は土師器の杯である。2・3は壁際の床面直上からの出土である。5は鉄製刀子の断片と思

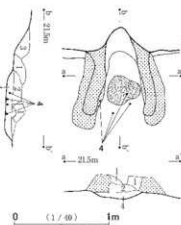
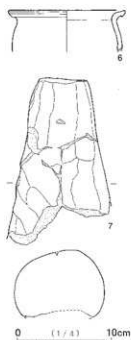
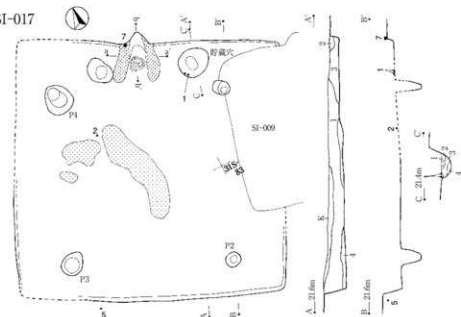
SI-016



SI-017



SI-017



SI-017

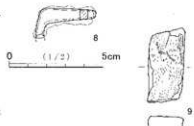
1. 暗褐色土 山砂やや多、焼土粒少、褐色土粒少
 2. 暗褐色土 山砂多、焼土ブロック少
 3. 褐色土 山砂多、山砂ブロック多、焼土ブロック多
 4. 暗褐色土 山砂少、焼土粒若干

貯蔵穴

1. 黒褐色土 黄褐色砂粒若干
 2. 褐色土 黄褐色砂粒多
 3. 褐色土 黄褐色砂粒多
 4. 褐色土 黄褐色砂粒若干

カマド

1. 黄白色土 山砂多、構築体崩落
 2. 暗褐色土 山砂多、焼土粒多、流込土
 3. 暗褐色土 焼土ブロック多、山砂ブロック多、流込土
 4. 褐色土 焼土ブロック多、山砂多、流込土



第10図 SI-016・017及び出土遺物

0 (1/2) 10cm

われる。土器類の年代は7世紀後半に推定される。

SI-017 (第10図, 第1・2表, 図版3・16・19)

位置 調査区北部西側, 31S-83グリッド付近に位置する。奈良・平安時代住居跡 SI-009 に切られる。

規模・形状 南東壁に拡張したと考えられる痕跡が見られる。長軸 5.5 m・短軸 5.4 m の長方形で、床面積約 20㎡、壁高 24cm～53cm である。主軸方向は N-32.0° -W である。

床面 平坦であるが硬化面は確認されない。西側に焼土が検出された。

柱穴 柱穴は4基が対角線上に検出された。深さは 17cm～68cm である。他にカマド両側にピットが2か所検出された。深さは 54cm・50cm と比較的深いものである。貯蔵穴の可能性が想定される。

カマド 北西寄りに位置する。袖は山砂を主体として構築される。カマド内覆土は袖の崩落による山砂と焼土ブロックを含む暗褐色土である。

覆土 暗褐色土が主体で山砂粒を多く含む。焼土ブロック・焼土粒も含む。

出土遺物 1は須恵器蓋である。カマドの東脇から出土した。2～4は土師器杯である。2は丸底で底部から内湾しながら立ち上がり口縁部でわずかに外反する。外面は横方向にヘラケズリを施し、内面はヘラミガキが施されている。3・4は小型の杯で外面にはヘラケズリが施される。器面の荒れが著しく、詳細は不明瞭である。4はカマド内からの出土である。5・6は小型の甕である。7の支脚はカマド袖の上部から出土した。土器類の年代は7世紀後半に推定される。8は直角に折れ曲がった鉄製品の断片で、鏝(かすがい)の可能性がある。9は砂岩製の砥石である。8・9は近世の遺物で、住居跡に伴うものではない。

2 奈良・平安時代

SI-008 (第11図, 第1・2表, 図版3・19)

位置 調査区北部 31S-87グリッド付近に位置する。

規模・形状 東側は、台地の縁付近にあることから、傾斜により流失または確認できずに失われている。南側は現代の道路が存在したため遺存しない。また、南側の一部床面を SI-018 が切る。壁高は 30cm～59cm、主軸方向は N-15.0° -E である。

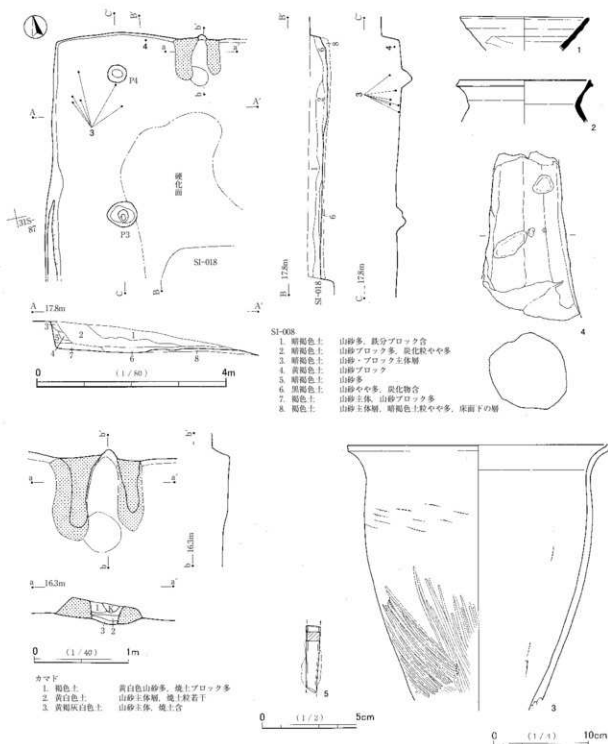
床面 住居中央部に硬化面が広がる。西壁の南側一部に壁溝が見られる。

柱穴 柱穴は2基確認された。対角線上に4本配置されたものと考えられる。深さは 22cm～31cm である。

カマド 北壁の中央に位置する。袖は山砂を主体として構築される。径 40cm 程度の円形の火床面が検出された。

覆土 山砂層を掘り込んで構築された住居のため、覆土には山砂が多く含まれる。

出土遺物 出土量は少なく、北西コーナー付近に集中して出土した。1は新治産の須恵器杯である。2は小型の甕の口縁部の一部のみの遺存であり、東海産と思われる。3は常陸型の甕である。床面直上からの出土である。土器類の年代は9世紀後半に推定される。4は土製支脚で、カマド西側の北壁近くの床面からやや浮いた状態で出土した。5は覆土の高い部位で出土した鉄製品で、鉄鎌の踵被部の破片ともみられるが、新しい時期の混入物の可能性もある。



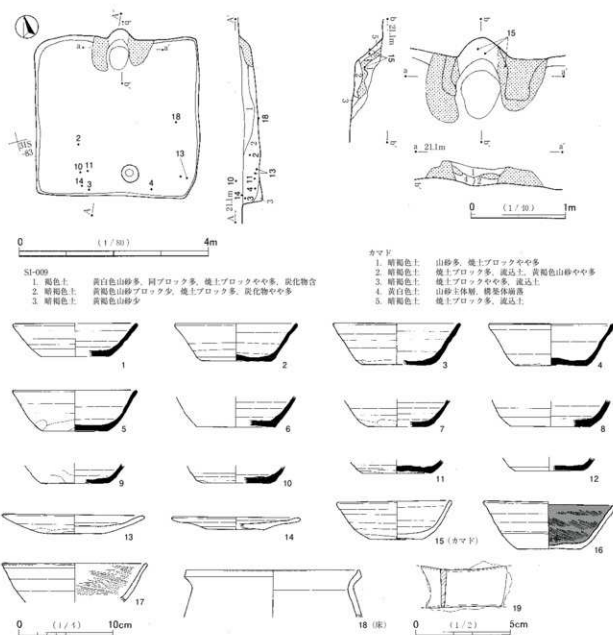
第11図 SI-008 及び出土遺物

SI-009 (第12図, 第1・2表, 図版3・15)

位置 調査区北部, 31S-83グリッド付近に位置する。

規模・形状 長軸3.4m・短軸3.3mの正方形で, 床面積約10.5㎡, 壁高12cm~29cmである。古墳時代
 竪穴住居跡 SI-017 を切る。主軸方向はN-165°-Eである。

床面 若干南側が下がるもののはほぼ平坦である。明確な硬化面は確認されなかった。



第12図 SI-009及び出土遺物

ビット 柱穴は検出されず、南壁はほぼ中央付近に入口に伴うビットが確認された。径36cm～41cm、深さ37cmの円形である。

カマド 北壁中央に位置する。両袖の遺存は比較的良い。構築材は下層が粘土の比率の高い山砂、上層は山砂である。カマド内覆土は構築体崩落土を含む焼土ブロックが多い山砂である。

覆土 焼土ブロック・炭化物を含む暗褐色土を主体とする。焼土ブロックが多く含まれているもの、自然堆積とみられ、焼失住居の可能性は考えられない。

出土遺物 住居南側に散在し、多くが床面又は床面直上から出土した。図化はできなかつたがカマド内から甕などの破片が出土している。1～12は須恵器の杯である。1～5・7・9～12は褐色系の須恵器で千葉産（現千葉市北東部の中原窯・宇津志野窯などで酸化炎焼成で生産されたもの）、6・8は長石粒を多く含む現茨城県新治産とみられる。13・14はロクロ土師器の皿である。13は切り離しの後底部全面に手持ちヘラケズリを施し、14は回転ヘラケズリが施される。15～17は土師器の杯である。16は内面に黒色処理が施されている。18は土師器の小型の甕である。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。19は幅22cm前後、現存長4.5cmの細長い鉄板状品で、両端が欠損している。鉄板の御縁に明確な刃部は認められず、用途不明の遺物である。

SI-010（第13図、第1・2表、図版3・15）

位置 調査区北部中央、31T-05グリッド付近に位置する。

規模・形状 一辺3.5m程度のほぼ正方形で、床面積約11.0㎡、壁高7cm～51cmである。斜面にかかるため南側の壁が流失または検出できなかった。主軸方向はN-71.5°-Wである。

床面 硬化面は確認されなかった。

柱穴・ピット 支柱穴が対角線上に4基検出された。深さは25cm～36cmである。東側の壁にテラス状の段が見られるが、入口に伴うものと考えられる。

カマド 西壁中央に構築されている。奥壁は緩やかに立ち上がる。火床部は径30cm～40cmの円形で、若干硬化している。

覆土 暗褐色土が主体で、山砂ブロックや焼土ブロックをやや多く含んでいる。

出土遺物 遺物の出土量は少ない。住居の中央に散在する。図化できたのは8点である。1～3は新治産の須恵器杯である。4は非ロクロの土師器杯である。口唇部ぎりぎりまで横方向のヘラケズリが施され、底部ヘラケズリにより平底を形成している。5は新治産の須恵器甕である。6・7は常陸甕の口縁部、8は常陸甕の底部である。6と8は同一個体の可能性がある。土器類の年代は8世紀後葉に推定される。

SI-011（第14図、第1・2表、図版4・15）

位置 調査区北部31T-17グリッド付近に位置する。SI-012を切る。

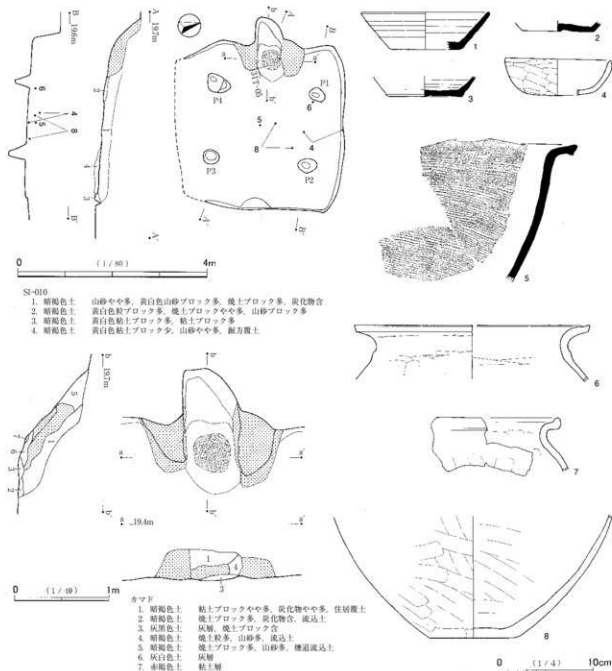
規模・形状 一辺約3.7mの正方形で、床面積は12.2㎡である。東側が斜面にかかるため、壁高は浅い位置で11cm、最深で68cmと差が大きい。主軸方向はN-89.0°-Wである。

床面 硬化面は確認されないがほぼ平坦である。

柱穴 対角線上に4基検出された。深さは24cm～46cmである。カマドの対面壁ほぼ中央付近に入口に伴うピットが検出された。径18cm×12cmの円形である。深さは16cmと浅い。

カマド 袖部は山砂を主体に構築されている。被熱により変色しており、袖部の遺存は悪い。火床部は奥まで広く広がる。

出土遺物 出土量は少なく、住居全体に散在する。1は千葉産の須恵器杯で、ヘラ切りの後全面回転ヘラケズリを施している。2・3は土師器杯である。4は新治産の甕で縦方向の平行タタキが施されている。カマド右脇の床面から出土している。6は口縁部付近のみの遺存であるが、武蔵型の甕である。土器類の年代は8世紀後葉に推定される。



第13図 SI-010及び出土遺物

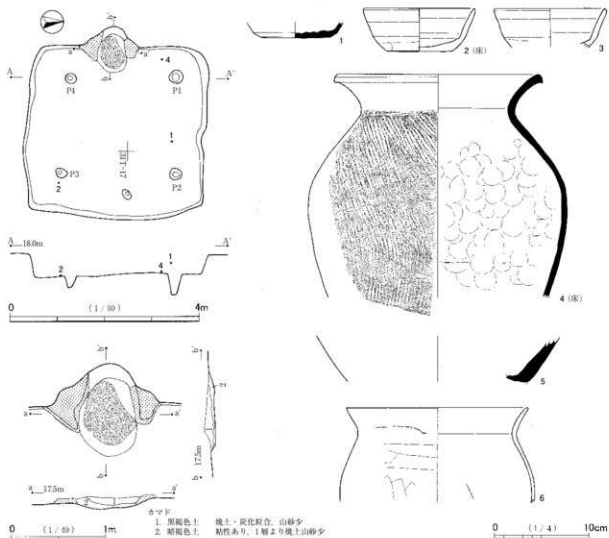
SI-012 (第15図, 第1・2表, 図版4)

位置 調査区北部, 31T-27グリッド付近に位置する。SI-011に切られる。

規模・形状 長軸5.3m・短軸5.0mのはほぼ正方形で、床面積約25.1㎡、壁高11.7cm～64.6cmである。南東側の壁は攪乱で削平されている。主軸方向はN-66.0°-Wである。

床面 硬化面は確認されていない。

柱穴 対角線上に4基検出された。深さは27cm～50cmで、比較的深いものが多い。



第14図 SI-011 及び出土遺物

カマド 北西壁の中央に位置する。袖の構築材は山砂が主体である。カマド内堆積は黒色土主体で焼土を含む。

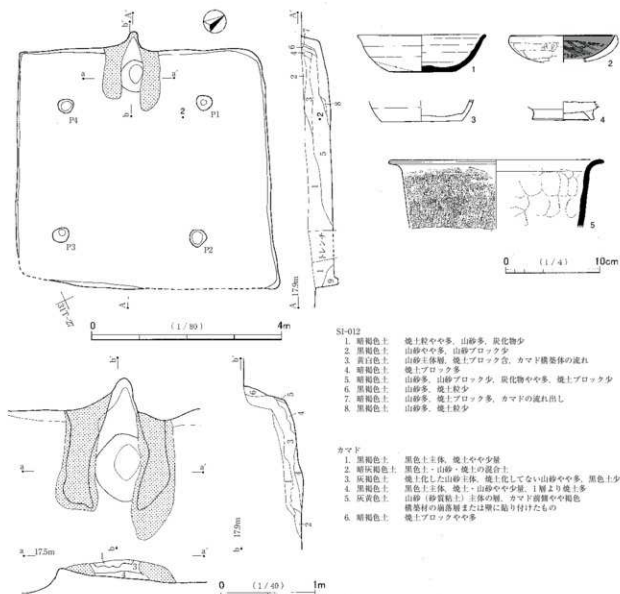
覆土 黒褐色土が主体で山砂粒を含んでいる。

出土遺物 出土遺物は少量である。図化できたのは5点である。カマド内からも出土したが、床面から浮いた状態の破片のみである。1は千葉産の須恵器杯である。ヘラ切りの後、底部全面に手持ちのヘラケズリを施している。2は非ロクロの土師器杯で、内面黒色処理が施されている。古墳時代7世紀代の土師器で流れ込みとみられる。3はロクロ土師器で底部は切り離しの後、全面回転ヘラケズリを施している。4は土師器の高台付き杯である。5は千葉産の甕又は瓶である。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。

SI-013 (第16図, 第1・2表, 図版4・15・18)

位置 調査区北側中央, 31T-24グリッド付近に位置する。

規模・形状 長軸4.1m・短軸3.5mのやや横方向に長い長方形で、床面積は11.1㎡、壁高5cm～26cmである。主軸方向はN-46.5°-Wである。



第15図 SI-012及び出土遺物

床面 ほぼ平坦であるが、硬化面は確認できなかった。

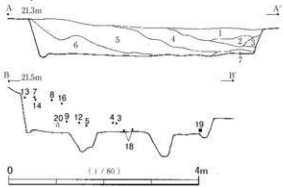
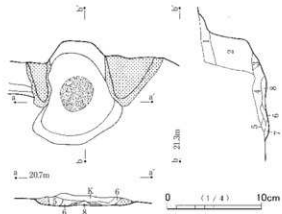
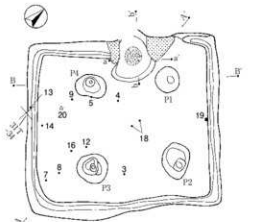
柱穴 対角線上に4基検出された。径は比較的大きく60cm前後を測り、深さも39cm～59cmと深い。

壁溝 壁溝が検出される住居の少ない中、全周する溝が検出された。幅は15cm、深さは13cmである。

カマド 北西壁のほぼ中央に位置する。両袖は遺存するものの残存状況は悪い。構築材は山砂を主体とし、火床部は焼土や炭化物などを含んでいる。

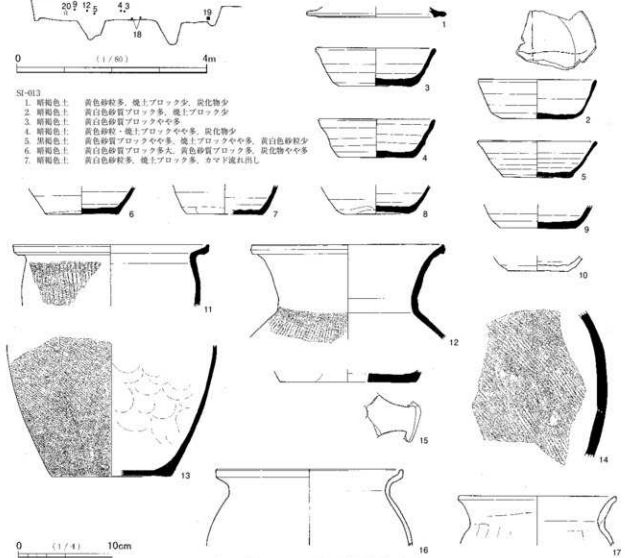
覆土 暗褐色土主体である。南西壁方向からの流入で、自然堆積と思われる。

出土遺物 出土位置は上層から中層にかけてで、周囲からの流入か廃棄されたものと考えられる。1は新治産須恵器の蓋である。口唇部のごく一部のみの遺存であるため詳細は不明である。2～9は須恵器の杯である。2の内面には、底部から体部下半にかけて焼成後に刻された十字状に交差する沈線が認められる。沈線は地肌が黒色に発色した部位をなぞるように引かれている。この黒色部は火だすきのように線状

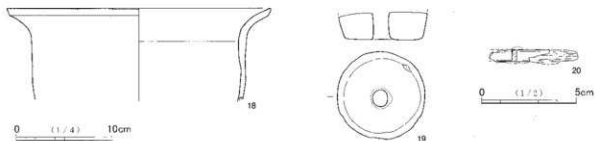


- ノマド
- | | | | |
|----------|-------------|---------|-----------|
| 1. 暗褐色土 | 黄白色砂粒多 | 砂質ブロック少 | 炭化物少 |
| 2. 暗褐色土 | 黄白色砂粒多 | 砂質ブロック少 | 炭化物少 |
| 3. 暗褐色土 | 黄白色砂粒多 | 焼土ブロック多 | 炭化物やや多 |
| 4. 暗赤褐色土 | 焼土粒・焼土ブロック多 | 暗褐色土粒多 | 天井部崩落 |
| 5. 暗褐色土 | 黄白色砂質ブロック多 | 焼土ブロック多 | |
| 6. 灰黒色土 | 焼土ブロック多 | 炭化物 | |
| 7. 暗褐色土 | 砂粒多 | 焼土粒多 | |
| 8. 灰褐色土 | 灰・粘土の混合層 | 炭化物少 | 焼土ブロックやや多 |

- SI-013
- | | | | |
|---------|-----------------|-----------|---------|
| 1. 暗褐色土 | 黄白色砂粒多 | 焼土ブロック少 | 炭化物少 |
| 2. 暗褐色土 | 黄白色砂質ブロック多 | 焼土ブロック少 | |
| 3. 暗褐色土 | 黄白色砂質ブロックやや多 | | |
| 4. 暗褐色土 | 黄白色砂粒・焼土ブロックやや多 | 炭化物少 | |
| 5. 黒褐色土 | 黄白色砂質ブロックやや多 | 焼土ブロックやや多 | 黄白色砂粒少 |
| 6. 暗褐色土 | 黄白色砂質ブロック多 | 炭化物やや多 | |
| 7. 暗褐色土 | 黄白色砂粒多 | 焼土ブロック多 | ノマド産れ出し |



第16図 SI-013 及び出土遺物 (1)



第17図 SI-013及び出土遺物(2)

に続き、外面の対応する部位にも認められる。3・11・13・15は千葉産の須恵器であるが、11は他の土器類より新しい様相であり、流れ込みとみられる。16は常陸型の甕、17は在地産の甕とみられる。18は在地の甕または甔で、床面からの出土である。土器類の年代は8世紀中葉に推定される。19は土製紡錘車で、北西壁溝近くの床面直上から検出された。上面が欠損したためか、全面的に磨かれ平滑に再調整されている。20は鉄製刀子の基部の破片で、木質が遺存する。

SI-014 (第18図, 第1・2表, 図版4・5・15)

位置 調査区北部中央, 31T-26グリッド付近に位置する。

規模・形状 東側は攪乱や斜面による流失または検出できなかったか、床面まで失われていた。壁高9cm～40cm, 主軸方向N-54.5°-Wである。

柱穴 柱穴は2か所で検出された。深さは30cm程度で比較的浅い。

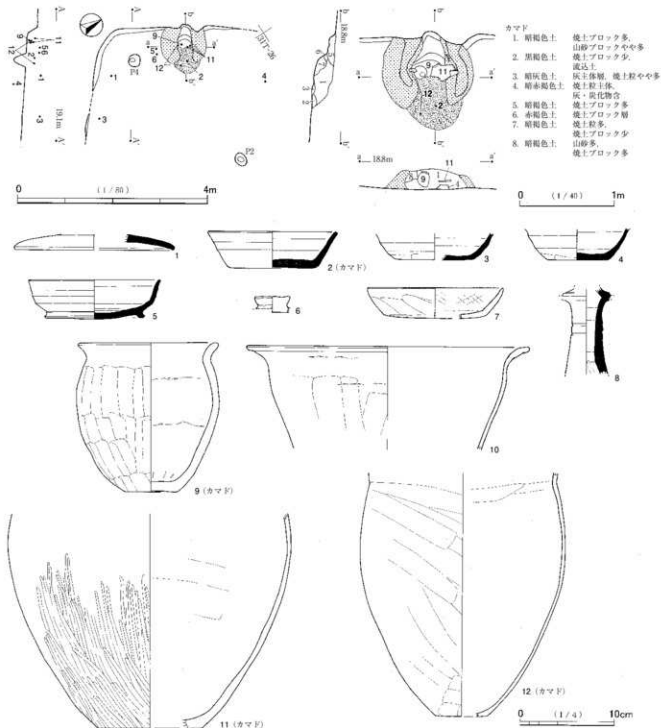
カマド 北西壁に位置する。おそらく壁のほぼ中央と考えられる。壁からの突出は小さい。袖の構築材は山砂が主体である。カマド内覆土は焼土ブロックを多く含んでいる。火床部は袖部前面に大きく広がっている。

出土遺物 遺物出土量は多い。図化できたのは12点である。カマド内からも複数点出土した。1は新治産の須恵器蓋の破片であるが、甕の可能性も考えられる。2は新治産の須恵器杯で、カマド内からの出土である。3・4は千葉産の須恵器杯、5は高台付きの須恵器杯で湖西産と思われる。7は上総型の杯で内面に斜格字状の暗文が施されている。8は灰釉浄瓶の頭部のみの遺存である。9は小型甕の完形品である。カマド内から倒位の状態で出土した。10は土師器の甕又は甔である。南側の壁に隣接する位置で3と接近して出土した。出土層位は上層である。11は常陸型の甕である。12は武蔵型の甕で、カマド内からの出土である。土器類の年代は8世紀前葉に推定される。なお、上総型杯(7)は下総国内での出土例は少なく、浄瓶(8)とともに特筆されるものである(「第3章まとめ」で後述)。

SI-015 (第19図, 第1・2表, 図版5・16)

位置 調査区北端, 31S-45グリッド付近に位置する。

規模・形状 西壁は調査区外にかかり、東側は傾斜面のための流失または検出できなかった。南壁は3.9mであるが、おそらくほぼ正方形に近い形状と推測される。壁高15cm～33cm, 主軸方向はN-29.0°-Wである。

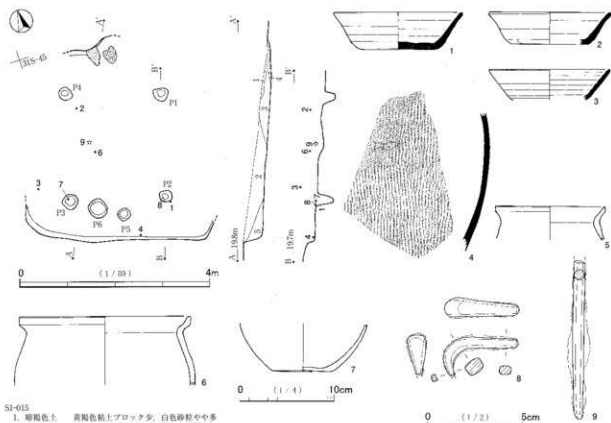


第18図 SI-014 及び出土遺物

床面 硬化面は確認できなかった。中央部分に凸凹が確認できる。

柱穴・ピット 柱穴は対角線上に4基確認され、南側の柱穴間に2か所ピットが検出された。中央のものは入口に伴うものと考えられる。

カマド 北壁ほぼ中央に構築されている。遺存状態は悪く、左袖のみ残り、右袖は欠損する。構築材は山砂主体である。カマド内覆土の下層は灰及び炭化粒・焼土を主体とした灰黒色土、上層はカマド内壁の



SI-015

1. 須臾色土 黄褐色粘土ブロック多、白色砂粒やや多
2. 須臾色土 黄褐色砂質ブロックやや多、炭化物含
3. 須臾色土 黄褐色粘土ブロック多、炭化物・焼土混含
4. 須臾色土 黄褐色砂質ブロックやや多
5. 須臾色土 黄褐色砂質ブロックやや多、炭化物・焼土ブロック含

第19図 SI-015 及び出土遺物

崩落が考えられる赤褐色土で構成される。

覆土 暗褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は比較的全体に散在する。図化できたのは9点である。1・2は新治産の須臾器杯である。4は須臾器大型甕の胴部破片、5は在地の小型甕の口縁部、6は常陸型の甕の口縁部付近、7は器壁の薄い小型甕の胴中位以下の破片である。土器類の年代は8世紀後葉に推定される。8は釣針状のカーブをもつ鉄製品、9は断面円形の鉄製棒状品で、ともに用途不明である。

SI-018 (第20図、第1・2表、図版5)

位置 調査区北側、31S-87グリッド付近に位置する。SI-008を切る。

規模・形状 東側は攪乱などのため確認できなかった。西壁は1辺3.5m、壁高16cm～21cmである。主軸方向はN-125°-Wである。

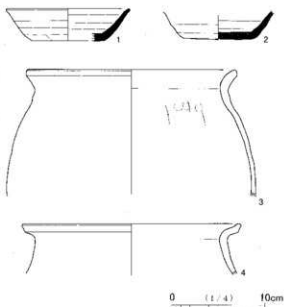
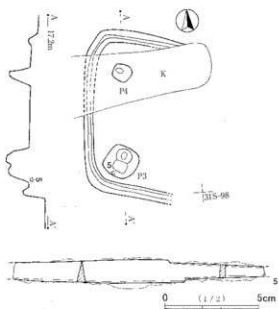
床面 硬化面は確認されなかったが、ほぼ平坦である。

柱穴 2か所で検出された。P3はP4に比べ規模が大きい。東側の柱穴が確認できないため詳細は不明である。

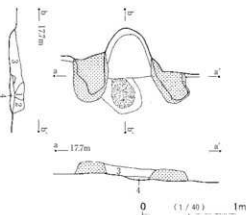
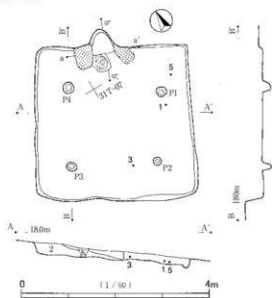
壁溝 壁の確認できた箇所では全体に検出された。幅16.0cm・深さ7.0cm程度である。

出土遺物 出土量は少なく南側に散在する。図化できたものは5点である。1・2は新治産の須臾器杯、3・4は常陸型の甕である。土器類の年代は8世紀末～9世紀初頭に推定される。5は鉄製の刀子で、身

SI-018



SI-019



SI-019

1. 暗褐色土 黄褐色山砂ブロック多、焼土ブロックやや多、炭化物含
2. 暗褐色土 山砂少、焼土ブロックやや多、炭化物含

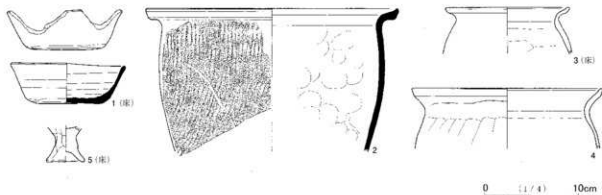
カマド

1. 暗白色土 山砂主体解、構築体崩落

2. 暗褐色土 焼土ブロックやや多、炭化物少、流石土

3. 暗褐色土 山砂多、焼土ブロック多、流石土

4. 暗赤褐色土 焼土較多、炭化物少



第 20 図 SI-018・019 及び出土遺物

の先端と茎の端部が欠けている。現存長13.4cm、身部の現存長は7.2cmである。背と刃の両側に関が作り出される。身幅は最大1.5cmである。

SI-019 (第20図, 第1・2表, 図版5・16)

位置 調査区北部, 31T-07グリッド付近に位置する。

規模・形状 長軸4.2m・短軸3.1mの長方形で、床面積10.3㎡、壁高6cm～17cmである。主軸方向はN-28.5°-Eである。

床面 明確な硬化面は確認できなかった。

柱穴 対角線上に4基検出された。17cm程度の深さで径も20cm程の小規模なものである。

カマド 北壁中央に位置する。両袖は遺存するが、特に右袖はかなり流失していると考えられる。構築材は山砂が主体である。焼土硬化面が検出されているが、カマドの奥の部分には確認されなかった。

覆土 山砂ブロック、焼土ブロックを含む暗褐色土が主体である。

出土遺物 遺物量は少なく散在する。床面又は直上からの出土が多い。1は千葉産の須恵器杯である。側面図に示すとおり2か所に欠損部があり、人為的なものである可能性がある。しかし出土状況からは祭祀に関連するかどうかは判断できない。2は千葉産須恵器の甕又は瓶である。3・4は在地産の土師器甕である。5は高杯状ミニチュア土器の脚部である。土器類の年代は8世紀末～9世紀初頭に推定される。

SI-020 (第21図, 第1・2表, 図版6・16・18)

位置 調査区北部中央, 31T-03グリッド付近に位置する。

規模・形状 長軸3.6m・短軸3.4mのはほぼ正方形であるが、南東側は攪乱等により消失している。床面積は約10.6㎡、壁高2cm～45cmである。主軸方向はN-91.0°-Wである。

床面 明確な硬化面の確認はできなかった。

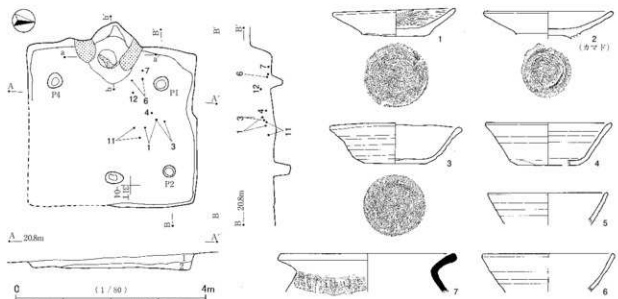
柱穴・ピット 柱穴は3基検出された。おそらく消失部分にも1基存在したものと推測される。深さは25cm～33cmである。カマド対面側の壁際中央部にピットが確認できた。径は長軸38cm・短軸24cmの楕円形、深さは14cmである。入口に伴うピットと考えられる。

カマド 西壁中央に構築されている。両袖が遺存し、構築材は山砂が主体である。遺物が多量に出土したためカマド内の土層の確認は困難であった。

覆土 暗褐色土が主体で、焼土ブロックなどを含んでいる。

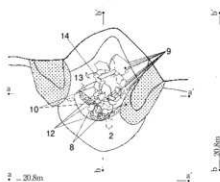
出土遺物 1・2は土師器の高台付き皿である。1は高台部分が欠落したものをそのまま使用したものと考えられる。底部は平滑になり高台部の痕跡はほとんどないものの、底部付近の調整などを観察すると二次的利用が考えられる。3～6は土師器杯である。7・8は須恵器の甕の口縁部片である。9～12は土師器の甕である。9～11は口クロ成形の可能性、12は台付甕の高台部分の可能性が考えられる。土器類の年代は9世紀後葉に推定される。

13は石製紡錘車である。緑色味を帯びた黒色の蛇紋岩製で、研磨されて光沢をもつ。上面に線刻によって不整な八角形が描かれ、軸孔から5つの角へ直線が引かれる。うち1方向のみ2重線が引かれている。14は滑石製の双孔円盤で、周囲が全面的に欠損しているが、意図的に打ち欠いて小さくしているように見える。15は鉄製刀子の関付近の断片である。2・8～10、12～14はカマド内からの出土である。特

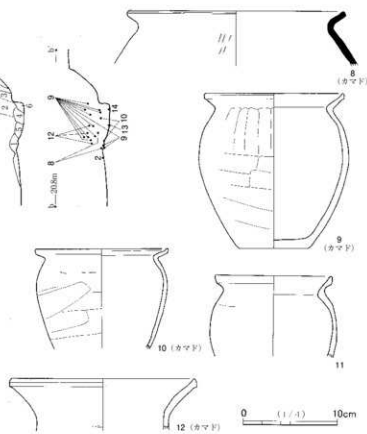
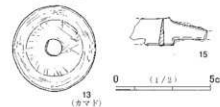
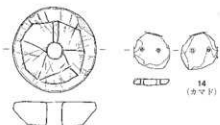
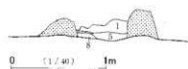


SI-020

1. 赭褐色土 焼土較多、焼土ブロック多、炭化物含
 2. 赭褐色土 焼土ブロック多、山砂多



2 - 20.8cm



カマド

1. 赭黄白色土 山砂主体層、積層体崩落
 2. 赭黄白色土 山砂多、赭褐色土少
 3. 黄白色土 山砂層、積層体崩落
 4. 黄白色土 山砂層、積層体崩落
 5. 赭黄白色土 山砂多、焼土ブロック多、炭化物含
 6. 灰白色土 山砂多、焼土ブロックやや多
 7. 赭褐色土 山砂多、焼土ブロック多、炭化物含
 8. 灰白色土 山砂ブロック-焼土ブロック多、炭含、カマド内堆積物

第 21 図 SI-020 及び出土遺物

に台付き皿(2)、紡錘車(13)や有孔円盤(14)は底面からの出土であることから、カマド祭祀に関連するものと考えられる。

SI-021 (第22図, 第1・2表, 図版6・16)

位置 調査区北部東端, 31T-18 グリッド付近に位置する。

規模・形状 長軸3.3m・短軸3.2mのほぼ正方形であるが、北東隅部分は調査区境のため不明である。床面積8.5㎡、壁高21cm～53cmである。主軸方向はN-195°-Eである。

床面 ほぼ平坦であるが、硬化面は確認できなかった。

柱穴 柱穴やその他のピットなどは検出されなかった。

カマド 北東コーナーに位置する。煙道もコーナー方向に向けて突出する。両袖が遺存するが右袖の遺存度が悪い。構築材は山砂主体である。

覆土 暗褐色土が主体で、山砂ブロックを含んでいる。

出土遺物 出土量は少ない。カマド内からも一括で出土したが、図化できたのは10点である。1は須恵器蓋である。2～5は新治産の須恵器杯、6は湖西産の須恵器高台付き杯である。7は胴部外面に横方向のタタキ目の施された須恵器甕である。8は在地産の土師器甕である。土器類の年代は8世紀中葉に推定される。9は中空の筒状品で、焼成後に強く火を受けており、外面は灰白色に、内面は桃色に変色している。輪の羽口の可能性もあるが、羽口にしては小さく、また図の下端から外方に広がる形態だったとみられるので、古墳時代中期～後期の高杯の脚部破片の可能性が考えられる。強く火を受けているので、何らかの送風装置に転用されたものであろう。10は盤状の杯1/5周ほどの破片で、体部外面は横方向に細かくヘラケズリ、内面は全体に丹念なナデ、底部外面は位置方向にヘラケズリされる。内外面とも赤彩される。11は鉄製刀子で、身の先端と茎の末端を欠く。現存長13.0cm、身幅は関の部分で1.4cmである。出土層位は2の杯を除き、覆土の中層から上層の出土で、周囲からの廃棄又は後の流れ込みと考えられる。

SI-022 (第23図, 第1・2表, 図版6・7・17)

位置 調査区北部東端, 31T-28 グリッド付近に位置する。

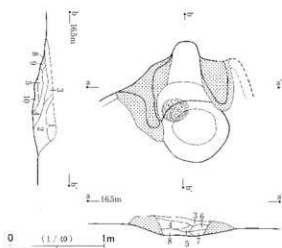
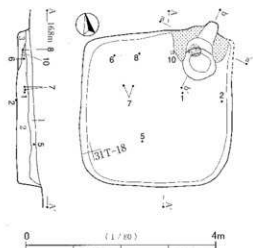
規模・形状 住居東部は傾斜面のため流失、または検出できなかった。遺存部分の西側は一辺3.3m、壁高は11cm～13cmである。主軸方向はN-20.5°-Wである。

床面 硬化面は確認されなかった。

柱穴 柱穴やその他のピットの検出はない。

カマド 北壁に構築されている。おそらくほぼ中央に位置するものと考えられる。袖の構築材は山砂が主体で、内側が赤変している。

出土遺物 出土量は少量であるが、カマドの右側の床面から1の須恵器の盤と3の甕が検出された。1は口縁部の1/6周(9.5cm)ほどが4回に分けて意図的に打ち欠かれているものと考えられる。カマドの左袖に立てかけられた状態で出土した。3の甕もその傍からの出土であり、底部が欠損している。これも故意に割られた可能性もある。カマド祭祀に関連した2点と考えられる。2は須恵器杯の微細な破片である。土器類の年代は8世紀中葉に推測される。

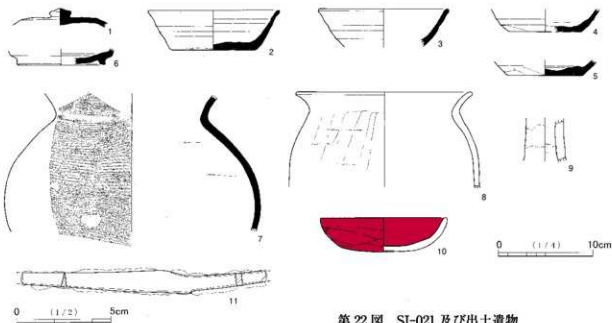


SI-021

1. 暗褐色土 山砂多、焼土ブロック少、炭化物少
2. 暗褐色土 山砂やや多、焼土ブロックやや多、炭化物やや多
3. 暗褐色土 山砂ブロックやや多、焼土ブロック少、炭化物少

カマド

1. 暗灰色土 黒色土主体、山砂やや多
2. 暗灰色土 黒色土主体、山砂少含、1層より色調暗
3. 暗褐色土 黒色土+山砂、1層より山砂多
4. 暗褐色土 黒色土+山砂+焼土
5. 褐色土 山砂多、焼土ブロックやや多
6. 暗褐色土 焼土ブロック多、焼土粒多
7. 暗褐色土 焼土ブロック多、炭含
8. 暗褐色土 焼土粒多
9. 暗褐色土 焼土ブロック少、焼土粒やや多
10. 暗褐色土 焼土ブロック少



第22図 SI-021及び出土遺物

SI-023 (第23図、第1・2表、図版7)

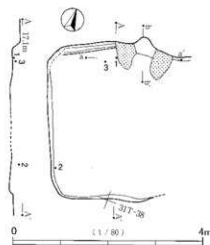
位置 調査区北部東側、31T-27グリッド付近に位置する。

規模・形状 東側は傾斜面などのため検出できなかった。カマドの位置する西側壁の一部のみの遺存であるため詳細は不明である。壁高は15cm～21cmである。

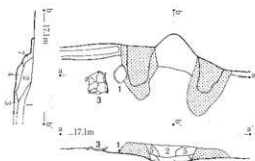
カマド 両袖が遺存する。構築材は山砂が主体である。火床面が内部に確認できた。

出土遺物 カマド内から甕と支脚が出土した。1の土師器甕は常陸型甕の胴部である。カマド内覆土の中層から検出された。2の支脚は底面からの検出である。両遺物ともに遺存状態が悪いことから、カマド祭祀に関連するものか否かは不明である。

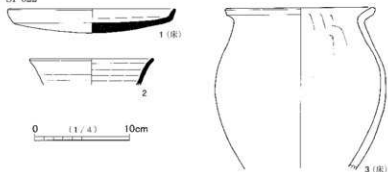
SI-022



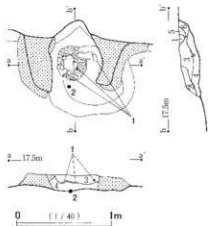
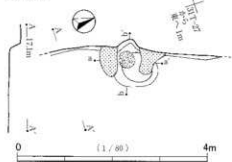
- カマド
1. 暗褐色土 山砂やや多
 2. 暗黄白色土 山砂主体、焼土粒多、横長体崩落
 3. 暗褐色土 焼土ブロックやや多、流込土
 4. 暗赤褐色土 焼土ブロック多
 5. 暗黄白色土 山砂主体、焼土粒やや多、横長体崩落
 6. 暗褐色土 焼土ブロック少、しまりやや多
 7. 褐色土 山砂多、焼土粒やや多、流込土



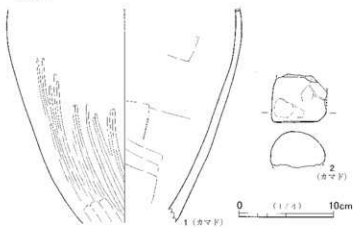
SI-022



SI-023



SI-023



- カマド
1. 暗褐色土 山砂多、焼土ブロック少、横長体崩落
 2. 暗褐色土 山砂少、焼土粒少
 3. 暗褐色土 山砂少、焼土粒やや多、炭化物少
 4. 灰黒色土 山砂少、焼土ブロックやや多、灰含
 5. 黒褐色土 山砂少
 6. 暗褐色土 山砂やや多、焼土粒やや多
 7. 暗赤褐色土 赤炭部

第 23 図 SI-022・023 及び出土遺物

SI-024 (第24図, 第1・2表, 図版7・17)

位置 調査区北部東側, 31T-37 グリッド付近に位置する。

規模・形状 東側は傾斜による流失または検出できず, 詳細は不明である。壁高は8cm～38cm, 主軸方向はN-61.0°-Wである。

柱穴 ビットは検出されなかった。

カマド 北西壁に位置する。両袖とも遺存し, 構築材は山砂が主体である。

出土遺物 カマド内とその周辺から出土した。1は須恵器杯, 2～4は土師器杯, 5は須恵器小型壺である。6は格子状のタタキ目が残る甕である。7は新治産須恵器甕である。8は土師器の小型甕で在産と思われる。8の甕に被せるように倒位で2・3の杯が出土した。5の須恵器小型壺も同様の位置で出土している。これらはカマド祭祀に関連する遺物と考えられる。土器類の年代は10世紀前葉に推定される。

SI-025 (第24図, 第1・2表, 図版7)

位置 調査区北部南東側, 31T-47 グリッド付近に位置する。

規模・形状 残るのは西側の一部で, 東側は傾斜面による流失または検出できなかった部分である。主軸方向はN-49°-Wである。

柱穴 3基検出された。深さは6cm～38cmである。

カマド 南西コーナー付近に位置する。煙道の突出は小規模である。袖の構築材は山砂が主体である。

出土遺物 カマド前の柱穴付近から出土している。図化できたのは7点である。1は千葉産の須恵器杯, 2は新治産須恵器杯である。3は千葉産の須恵器甕または甗で, 縦方向の平行タタキが施されている。4は小型の在産土師器甕である。5は常陸型甕の口縁部だけの破片である。6・7は須恵器甕の底部片である。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。

SI-027 (第25図, 第1・2表, 図版7・8・17)

位置 調査区中央東側, 31U-34 グリッド付近に位置する。

規模・形状 北方向は攪乱等により確認できず, 東壁の一部は木の根による攪乱で消失している。南壁は一辺2.9m, 壁高は23cm～38cm, 主軸方向はN-71.5°-Wである。

床面 硬化面は確認されなかった。

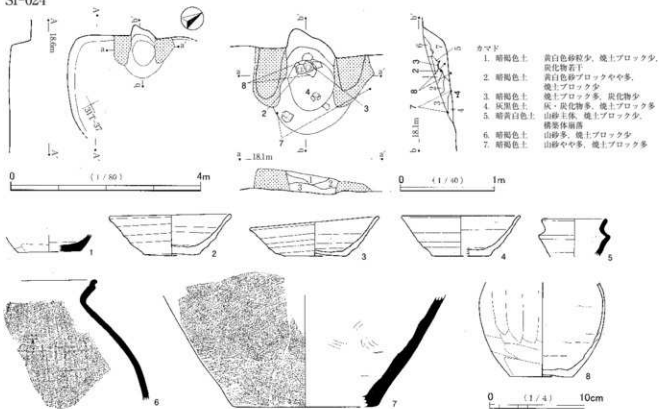
柱穴 柱穴やその他のビットは検出されなかった。

カマド 西壁に構築されている。煙道部が壁外へ長く突出している。両袖は遺存するが, 全体の遺存状況は不良である。構築材は山砂が主体で粘土を含んでいる。カマド内部に煙道部などの崩落による流れ込み土層が確認できた。カマド奥は深く窪んでいる。その上面には焼土ブロックが確認でき, 天井の崩落又は支脚代わりの粘土である可能性も考えられる。

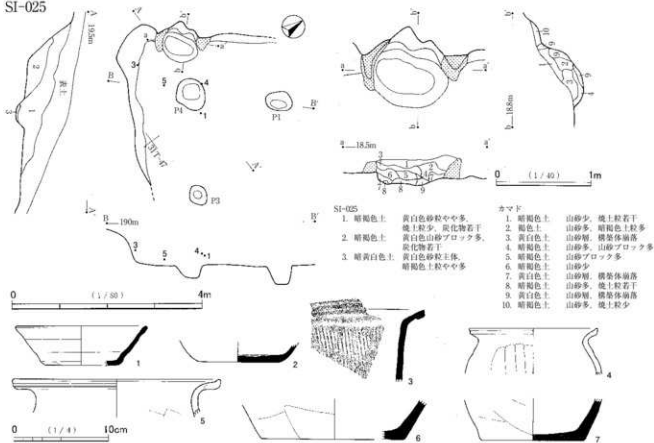
覆土 暗褐色土が主体で焼土ブロックを含んでいる。自然堆積と考えられる。

出土遺物 住居内に散在し, カマド内からも出土した。1～3は土師器杯である。5～7は在地の土師器甕である。8・9は甗の底部片である。8の内面には焼成後に加えられた沈線が見られるが, 土器が破砕した後に偶然に付いた傷と考えられる。9の外面には, 横線の上に縦二本線を交差させた焼成前の線刻が見られる。1・2・5・6はカマド内からの出土である。1は破損していたものの完形である。6は

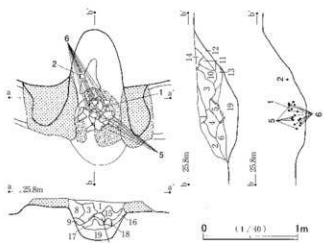
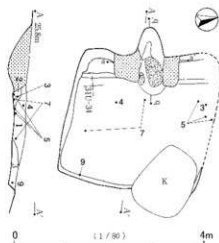
SI-024



SI-025



第 24 図 SI-024・025 及び出土遺物



SI-027

- 1. 赭褐色土 山砂ブロック少、焼土粒少
- 2. 赭褐色土 山砂やや多、焼土ブロックやや多
- 3. 褐色土 山砂少、焼土ブロック少

カマド

- 1. 赭褐色土 山砂ブロック少
- 2. 赭褐色土 山砂土俵層、赭褐色土やや多、天井崩落
- 3. 赭褐色土 山砂土俵層、天井崩落
- 4. 赭褐色土 山砂ブロックやや多、焼土ブロック少
- 5. 赭褐色土 山砂ブロック多
- 6. 赭褐色土 山砂ブロックやや多、焼土ブロックやや多、流込土
- 7. 赭褐色土 焼土ブロック多、山砂やや多、カマド内層積
- 8. 赭褐色土 山砂やや多、焼土粒やや多
- 9. 赭褐色土 焼土粒やや多

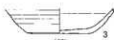
- 10. 赭赤褐色土 焼土粒多、山砂少
- 11. 赭黄白色土 山砂層、襖室体崩落
- 12. 褐色土 山砂やや多、焼土粒少、流込土
- 13. 赭褐色土 焼土粒やや多、流込土
- 14. 褐色土 焼土粒少
- 15. 赭赤褐色土 焼土ブロック多
- 16. 赭褐色土 山砂多、焼土粒多
- 17. 赤褐色土 焼土ブロック、支脚代わりの焼土
- 18. 褐色土 焼土ブロックやや多、焼土粒やや多
- 19. 褐色土 焼土ブロック、焼土粒多



1 (カマド)



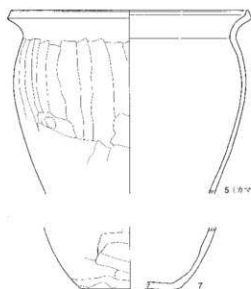
2 (カマド)



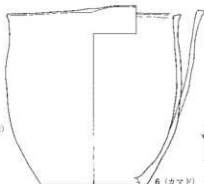
3 (カマド)



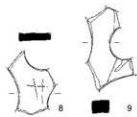
4



5 (カマド・床)



6 (カマド)



7

8

9

0 (1/4) 10cm

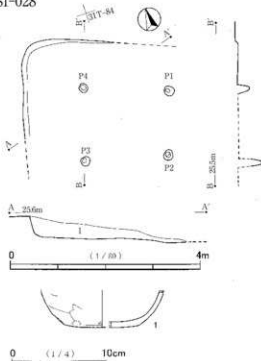
第25図 SI-027及び出土遺物

2/3ほどの遺存であるが、口縁部の一部が片口状に成形されている甕である。カマド祭祀に関係する遺物である可能性もあるが断定はできない。土器類の年代は9世紀後葉に推定される。

SI-028 (第26図, 第1・2表, 図版8)

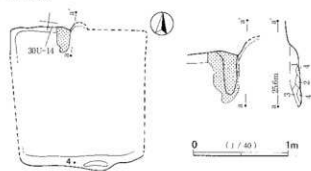
位置 調査区中央部, 31T-84グリッド付近に位置する。

SI-028



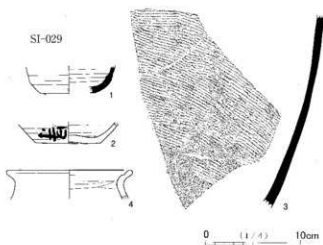
SI-028
1. 赭褐色土 黄白砂粒・ブロッコ少

SI-029

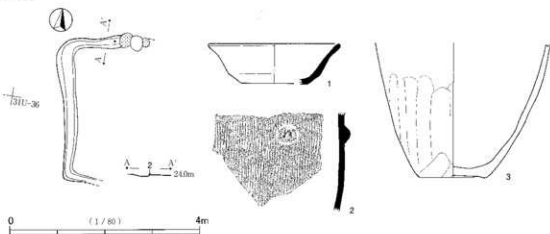


SI-029

1. 赭色土 山砂多、焼土粒多
2. 赭褐色土 テフラ粒多、山砂少
3. 暗黄褐色土 テフラブロッコ主体、山砂多
4. 暗褐色土 灰層、山砂多、炭化粒多



SI-030



第 26 図 SI-028・029・030 及び出土遺物

規模・形状 壁は、確認トレンチによって北コーナー付近の一部のみ検出された。主軸方向はN-11.5°-Eで、その他詳細は不明である。

柱穴 対角線上に4基検出された。深さは浅いもので8cm、深いもので32cmである。

カマド 北壁の一部で赤変した山砂が確認されたことから、その付近にカマドが構築されていたと考え

られる。

出土遺物 遺存する北コーナー付近に散在して、若干の遺物が出土したものの、図化できたのは1点のみである。1は土師器小型甕の底部付近の破片である。

SI-029 (第26図, 第1・2表, 図版8)

位置 調査区中央, 31U-14 グリッド付近に位置する。

規模・形状 確認トレンチにより一部滅失したため、詳細は不明瞭であるが、長軸約2.9m・短軸約2.6mである。カマドの対面の壁の中央部分がわずかに突出し、テラス状になる。入口施設に伴う整形の可能性が考えられる。

カマド 北壁の一部が検出された。右袖と煙道部の一部である。遺存状況は悪く、詳細は不明である。

出土遺物 図化できたのは4点である。1は新治産の須恵器蓋片である。2は土師器杯で、体部外面に横書きされた「尋」字の墨書が残る。偏の部分が見つわれているが、「得」字の傍の部分とみてよいだろう。この字の右(上)に文字がないのは確かだが、左(下)側は欠損しており、別の文字があったかどうか不明である。ちなみに他遺跡の事例では「得加」「得合」「得上」のように、「得」字の下に文字が続く事例が知られている。3は入口付近から出土した須恵器甕の細片で、横方向のタタキ目が残る。4は土師器甕の口縁部片である。土器類の年代は9世紀中葉に推定される。

SI-030 (第26図, 第1・2表, 図版8・17)

位置 調査区中央東側, 31U-36 グリッド付近に位置する。

規模・形状 西壁と北壁の一部のみの遺存である。東側は傾斜面のための土砂流失等により検出できなかった。西壁は一辺3.0m、壁高は14cm～40cmである。主軸方向はN-98°-Wである。

カマド 北壁に薄く山砂と焼土が確認され、カマドの構築された位置は判明したが、詳細は不明である。

壁溝 残存する壁に沿って溝が検出された。幅32cm・深さ10cmである。

出土遺物 1は須恵器杯であるが、産地不明である。2は把手付きの須恵器甕又は甗で、縦方向の平行タタキが施されている。3は在地の土師器甕である。土器類の年代は9世紀中葉に推定される。

SI-031 (第27図, 第1・2表, 図版8・17)

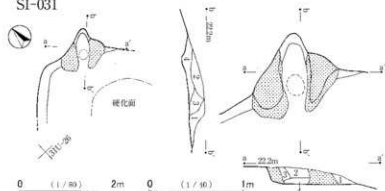
位置 調査区中央東端, 31U-16 グリッド付近に位置する。

規模・形状 東側は斜面部、西は木の根、南は攪乱等により削平され、北側のカマド付近のみの遺存である。主軸方向はN-49.5°-Eである。硬化面がカマド前面で確認できた。

カマド 北東コーナーに位置している。両袖が遺存するが右袖の残存状況が悪く、袖と火床部層の区別が難しい。火床部はやや硬化しているようではあるが判然としないため、破線で表した。赤変部は見られない。明瞭な掘り方や使用に伴う窪みは見られない。袖の構築材は山砂主体で焼土が混入する。

出土遺物 出土量は若干であり、図化できたのは須恵器杯の2点である。年代は9世紀後葉に推定される。

SI-031

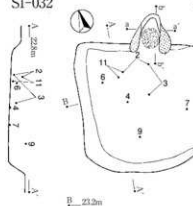


0 (1/4) 10cm

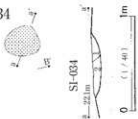
カマド

1. 暗褐色土 山砂+黒色土
2. 赤褐色土 焼土粒・ブロック主体、黒色土やや少
3. 黄褐色土 山砂主体、黒色土やや少
4. 暗褐色土 山砂やや多+黒色土、焼土粒・炭化粒若干

SI-032



SI-034



SI-032

1. 暗褐色土 黄褐色土較少、炭化粒少
2. 暗褐色土 山砂やや多、焼土ブロック少
3. 黒褐色土 山砂多、堅く締まる
4. 暗褐色土 山砂ブロック少、焼土粒やや多、堅く締まる
5. 暗褐色土 山砂ブロック少、焼土ブロック少、山砂少、堅く締まる

カマド

SI-034 カマド火床部

1. 暗褐色土 山砂に暗褐色土・焼土多
2. 暗褐色土 山砂少量

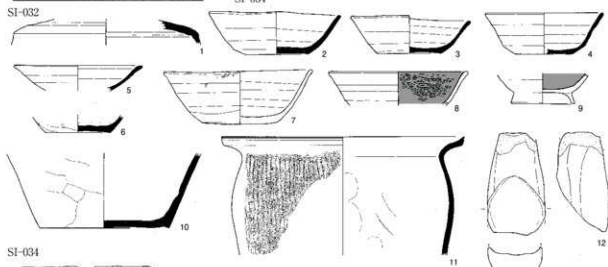
カマド

1. 暗褐色土 山砂に暗褐色土多、焼土少
2. 赤褐色土 焼土粒・ブロック主、山砂・暗褐色土若干
3. 暗褐色土 暗褐色土多、山砂・焼土多
4. 暗褐色土 暗褐色土多、山砂多、焼土少
5. 山砂 上部焼熱により赤褐色

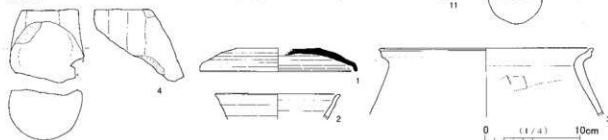
SI-033



SI-034



SI-034



0 (1/4) 10cm

第 27 図 SI-031・032・034 及び出土遺物

SI-032 (第27図, 第1・2表, 図版9・17・19)

位置 調査区中央, 31U-06グリッド付近に位置する。

規模・形状 SI-033を切っており, 東側は壁・床面や柱穴などが斜面部のため流失または検出できなかった。壁高は27cm～35cmである。

カマド 両袖が遺存し, 構築材は山砂主体で, 黒色土を若干含んでいる。左袖は内側と前面部がかなり流失しているようである。右袖の遺存も非常に悪い。火床部はやや硬化しているものの, 赤変部は見られない。

出土遺物 出土量は少なく, 散在する。1は須恵器の蓋である。2～6は須恵器杯, 7・8は土師器杯, 9は高台付き杯である。10・11は須恵器甕, 12は支脚である。2・5の杯は床面から, 3・4の杯は床面直上からの出土である。8・9の内面は黒色処理される。土器類の年代は9世紀中葉に推測される。支脚はカマド内奥からの出土である。支脚の下半部は斜めに削ぎ落とされ, 切断面は磨かれて平滑で, 横断面は図に見られるとおりの凹レンズ状に湾曲している。同様に加工された支脚はSI-034でも出土しているが, 加工の意図は不明である。

SI-033 (第28図, 第1・2表, 図版9・17)

位置 調査区中央, 31U-05グリッド付近に位置する。

規模・形状 長軸4.0m・短軸3.5mのほぼ正方形で, 床面積は11.6㎡, 壁高は9cm～28cmである。北東隅付近は斜面部による壁崩壊等のため確認できなかった。主軸方向はN-61.0°-Wである。SI-032に切られる。

床面 中央部がわずかに硬化していたものの, 図化できるほどではなかった。

柱穴 対角線上に4基確認できた。深さは14cm～43cmである。

カマド 北西壁中央に構築されている。両袖が遺存するものの, 崩落などで袖の確認が困難であった。構築材は山砂が主体で, 袖の内壁が崩れたことで焼土や黒色土が混入している部位もある。火床面は約半分程度が赤変していた。

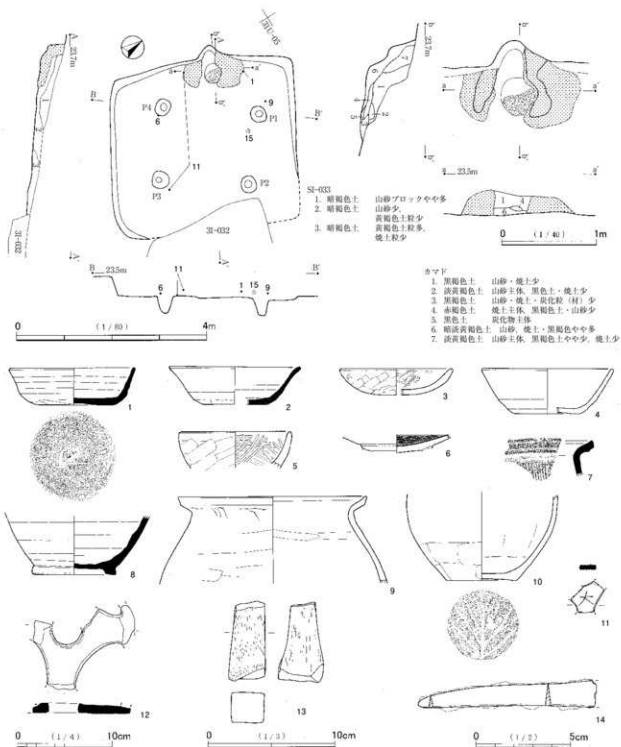
覆土 暗褐色土が主体で, 黄褐色土粒が含まれる。自然堆積と考えられる。

出土遺物 1・2は須恵器杯である。1の底面には焼成前に施された「×」字状のヘラ書きが見られる。3・6は非ロクロの土師器杯である。4はロクロ土師器である。6は内面黒色処理された台付き杯である。8は東海産の壺の底部付近の破片である。9は常陸型甕の口縁部付近である。10の土師器甕の底部には木炭痕が見られる。11・12は多孔の瓶の底部である。11の外面には焼成前にヘラ書きされた「大」字が残る。土器類の年代は, 1・3・5が8世紀中葉であるが, 2が9世紀中葉で後者が流れ込みとみられる。13は砥石である。14は鉄製刀子の身部で, 現存長9.3cm, 身の最大幅は1.5cmである。

SI-034 (第27図, 第1・2表, 図版9・17)

位置 調査区中央, 31U-06グリッド付近に位置する。SI-033の東側に位置するが, 焼土を含む山砂が検出されたことで, カマドの位置がかなり正確に確認できたととまる。

出土遺物 1は須恵器杯の蓋でツマミの部分が欠損している。2は土師器の杯であるが口縁部のごく一部のみの遺存である。3は常陸型甕の口縁部付近の破片である。土器類の年代は8世紀後葉に推定される。



第28図 SI-033及び出土遺物

4は土製支脚で、SI-032出土のものと同様、斜めに削ぎ落とされ、切断面が磨かれている。本遺構出土のものは中央が窪まず、横断面は平坦である。

SI-035 A・B (第29図, 第1・2表, 図版9・17～18)

位置 調査区南側, 29V-57グリッド付近に位置する。新旧2軒が切り合う。

規模・形状 古い住居跡(A)は東側の1/2程度のみで遺存であるため, 規模や形状は不明瞭である。カマドの位置する北東壁は1辺3.4mである。壁溝は南壁と北壁で確認でき, 幅16cm・深さ6cm程, 壁高は12cm～29cmである。主軸方向はN-58.0°-Eである。

新しい住居(B)は主軸方向をほぼ同じにして, 旧住居跡内に構築されている。規模は北東壁で1辺2.3m, 壁高は11cm～12cmである。

床面 硬化面は確認できなかった。新しい住居跡内からは炭化材が多く出土した。出土遺物もほとんどがその周辺からの出土で, 床面又は直上である。住居の廃棄とともに焼かれた可能性がある。

カマド 旧の住居跡は北東壁はほぼ中央に構築されている。袖はほとんど残らず遺存状態は悪い。煙道として機能していたと思われる掘り込みが残る。

出土遺物 1は須恵器の杯である。底部はヘラ切りの後に全面手持ちのヘラケズリが施されている。2・3・4は須恵器の甕, 5は土師器甕で在地産である。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。

SI-036 (第29図, 第1・2表, 図版9～10・18)

位置 調査区南部, 30V-87グリッド付近に位置する。

規模・形状 南東側は斜面による流失または検出できなかった。カマドの構築されている北西壁は1辺2.25m, 壁高は22cm～47cmである。主軸方向はN-43.8°-Wである。

カマド 北西壁の中央に構築されている。右袖がわずかに残るが, 遺存状態は非常に悪い。

出土遺物 1・2は土師器杯である。1は回転糸切りの後手持ちヘラケズリで調整されている。4は土師器の小型甕で胴部上位に最大径を有し, 口縁部は短く「く」の字状に外反する。口唇部は上方に積み上げられている。5は羽釜である。3・4とともにカマドの中から, 胴部中位から底部にかけての部分が出土した。口縁部はカマドの前面から出土した。底面または底面直上からの出土であることから, 故意に壊した後に廃棄したことが考えられる。土器類の年代は9世紀前葉に推定される。

SI-037 (第30・31図, 第1・2表, 図版10・18)

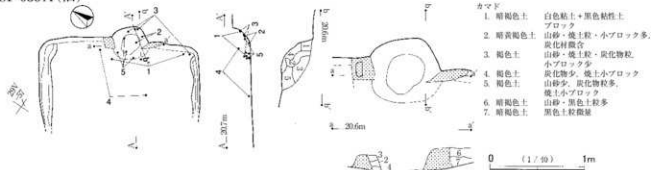
位置 調査区最南端, 29W-10グリッド付近に位置する。

規模・形状 住居の南側が斜面にかかるため流失または検出できなかった。また, 北側も攪乱等により壁を削平されていることから, 規模など詳細は不明である。ピットは3か所確認されたが, 東コーナーに位置する貯蔵穴とみられるピットの覆土からは炭化材の小破片が出土した。

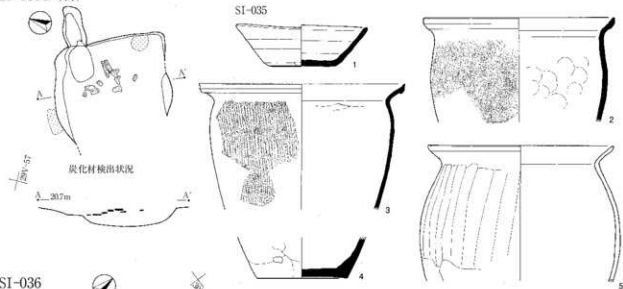
覆土 自然堆積と思われるが, 下層には焼土粒や炭化材が多く含まれていることから, 焼失住居の可能性が考えられる。

出土遺物 出土遺物量が多い。図化した遺物は25点である。1は千葉産とみられる須恵器杯, 2は高台付き皿, 3～9は土師器杯, 10は土師器高台付き杯, 11は高台付き椀, 12・13は土師器小型甕である。14～22は須恵器甕又は瓶, 23・24は土師器甕である。1は底部ヘラ切りの後手持ちヘラケズリを施している。土器類の年代は9世紀中葉に推定される。25は土製支脚の破片である。

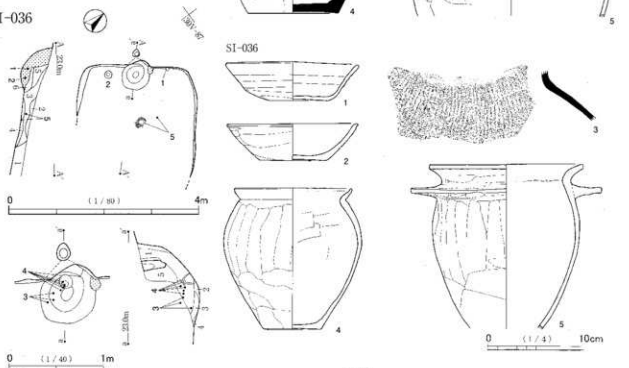
SI-035A (旧)



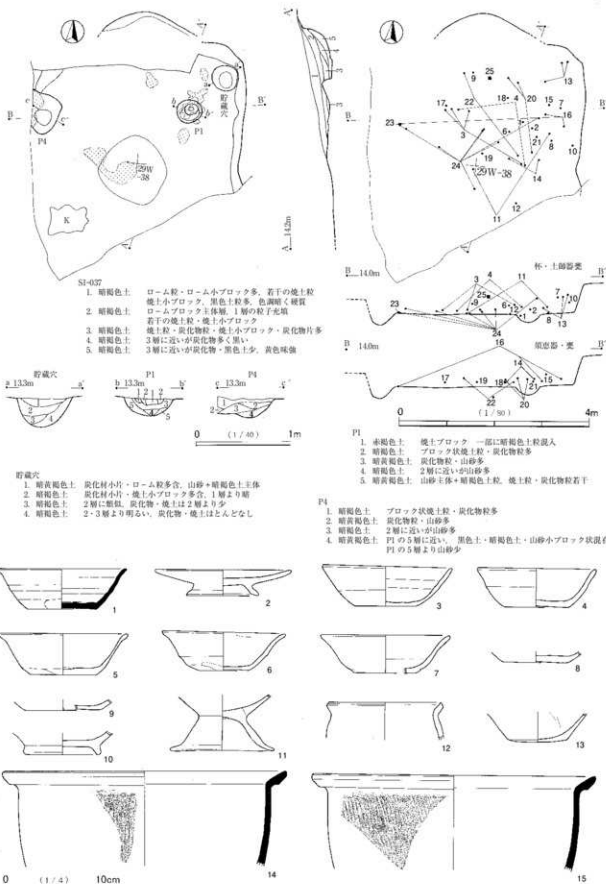
SI-035B (新)



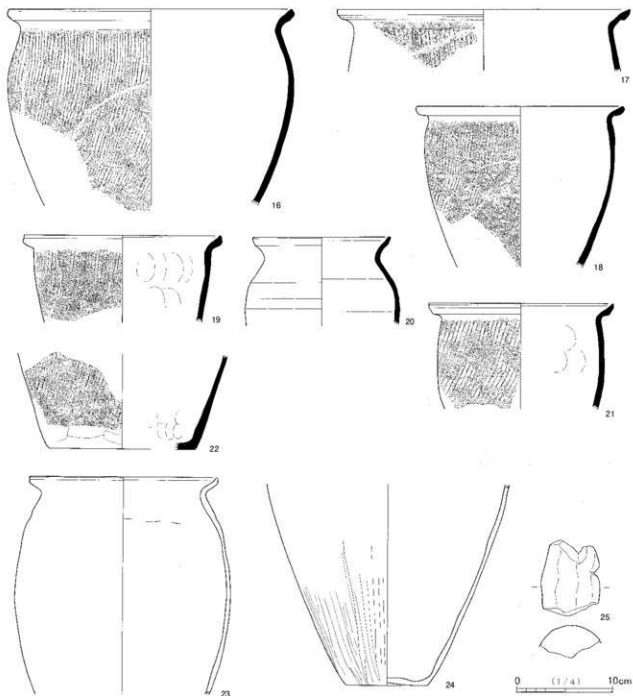
SI-036



第 29 図 SI-035・036 及び出土遺物



第30図 SI-037及び出土遺物(1)



第31図 SI-037及び出土遺物(2)

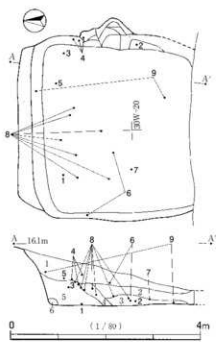
SI-038 (第32図, 第1・2表, 図版10・18)

位置 調査区最南端, 30W-10グリッド付近に位置する。

規模・形状 南側は斜面のための流失等により, 壁が確認できなかった。長軸3.9m・短軸約3.5m, 面積は10.6m²程度, 壁高は64cm~77cmである。主軸方向はN-91°-Eである。

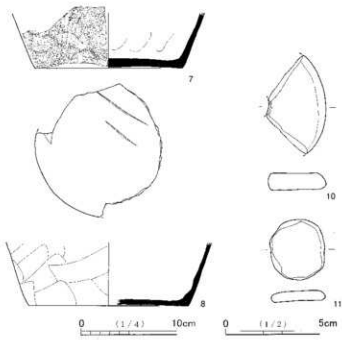
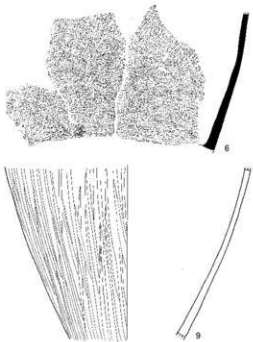
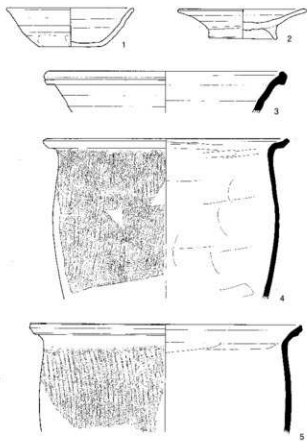
カマド 東壁のほぼ中央に位置する。煙道部は確認されたものの, 袖部は遺存せず詳細は不明である。

覆土 山砂ブロックを含む暗褐色土が主体で, 自然堆積の様相が確認できる。



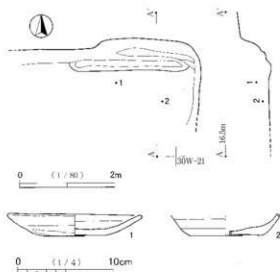
SI-038

1. 暗褐色粘性土 山砂ブロック・山砂・焼土粒多
2. 黒褐色粘性土 山砂小ブロック・焼土粒・炭化物粒・炭化物小片多
1層に近・が灰色味強い
3. 暗黄褐色粘性土 焼土小ブロック多・山砂・暗褐色土粒の混入上
4. 暗褐色粘性土 色調1に類似・炭化物小片多・山砂ブロック大
5. 黒褐色粘性土 2層に類似・色調若干明るい
山砂小ブロック・炭化物小片2層より少
6. 暗褐色粘性土 山砂主体層+少量の暗褐色土



第32図 SI-038及び出土遺物

出土遺物 1は土師器杯, 2は土師器高台付き皿, 3~7は須恵器甕で, 7の底面には平行する2本の直線が焼成前に刻まれる。8は土師器の常陸型の甕である。土器類の年代は9世紀中葉に推定される。10は土師器杯の底部を加工した紡錘車で, 周縁を磨き中央に穿孔を施す。11は土師器甕の胴部破片を加工



第33図 SI-039 及び出土遺物

した円盤状製品で、用途は不明である。

SI-039 (第33図, 第1・2表, 図版10・18)

位置 調査区最南端, 30W-11 グリッド付近に位置する。

規模・形状 北東コーナーの壁のみの遺存であるため、詳細は不明である。

出土遺物 1は土師器の皿, 2は同じく杯である。年代は9世紀中葉に推定される。

第3節 その他の遺構と遺物

1 掘立柱建物跡

SB-001 (第30図)

位置 調査区のほぼ中央, 台地平坦部の30U-75グリッド付近に位置する。トレンチ調査によって確認された。

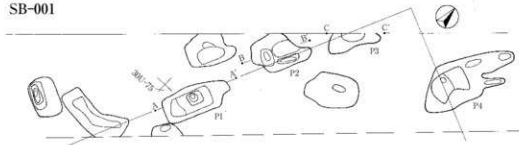
規模・形状 トレンチによる確認調査で、規模も形状も不規則なピット9基が確認された。覆土断面で柱痕跡が確認されたものがあり、掘立柱建物跡と判断された。P1～P3が南南西から北北東の方向にほぼ一直線で並び、直角に折れてP4に続いていたとみられる。P4は覆土断面では確認していないが、ピットの底の一段深い掘込みが柱痕跡と思われる。P1～P4の掘り方は長さ1m強、幅50cm前後の長方形プランを有し、深さは60cmである。柱の太さは径20cmほどで、柱周りの埋土には例外なく粘土ブロックが含まれていた。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。ほかに同程度の規模の土坑4基が確認されているが、建物の柱跡との確認はない。

SB-002 (第30図, 図版10)

位置 調査区北西部の31T-51グリッド付近, 台地平坦部から傾斜部に移行するあたりに位置する。

規模・形状 径30cm～40cmの不整円形のピット5基が確認され、その配列状況及び柱痕が確認されたことから掘立柱建物跡と捉えられた。P1～P3は北西から南東方向をとり、P1～P5はこれに直交する。確認されたのは2間×1間分で、南西側は後世の土地境界の急斜面にかかるため不明である。深さは30cm～60cm、柱痕跡の太さは20cm～40cmほどである。埋土には粘土が混じる。出土遺物はなく時期は不明である。

SB-001



SB-001

A-A'

1. 暗褐色土 暗褐色粘質土主体・緑白色粘土ブロック多
柱状、しまり弱
2. 暗褐色土 暗褐色粘質土主体、粘土ブロック少
3. 緑白色土 緑白色粘土ブロック主体
4. 暗褐色土 暗褐色粘質土と緑白色粘土の混合
5. 緑白色土 緑白色粘土ブロック主体
6. 暗褐色土 緑白色粘土ブロック多
7. 暗褐色土 粘土ブロック少
8. 緑白色土 緑白色粘土ブロック主体、暗褐色粘質土少



B-B'

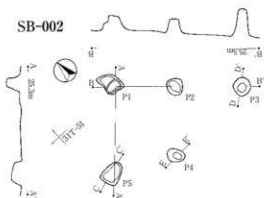
1. 暗褐色土 暗褐色粘質土主体・緑白色粘土ブロック少
柱状、しまり弱
2. 暗褐色土 緑白色粘土ブロック多
3. 暗褐色土 緑白色粘土ブロック少
4. 緑白色土 緑白色粘土ブロック主体、暗褐色粘質土少
5. 緑白色土 緑白色粘土ブロック主体
6. 緑白色土 緑白色粘土ブロック主体、暗褐色土少

C-C'

7. 暗褐色土 緑白色粘土ブロック多
8. 緑白色土 緑白色粘土ブロック主体、暗褐色土少
9. 緑白色土 緑白色粘土ブロック主体



SB-002



SB-002

C-C'

1. 灰褐色土 灰褐色砂質土主体、炭化物多
2. 黄白色土 白色粘土・黄色砂粒多
3. 暗褐色土 白色粘土・灰褐色砂粒多、黄色砂粒少

D-D'

1. 灰褐色土 灰褐色砂質土主体、白色粘土少
2. 黄白色土 白色粘土・黄色砂粒多
3. 灰褐色土 灰褐色粘質土主体、白色砂粒やや多
4. 灰白色土 灰白色砂質土主体、炭化物多、柱状

第34図 その他の遺構(1)

2 調査区北半部の遺構(第7図)

SK-001(第35図, 図版11)

位置 調査区北端部, 31S-85グリッド付近に位置する。

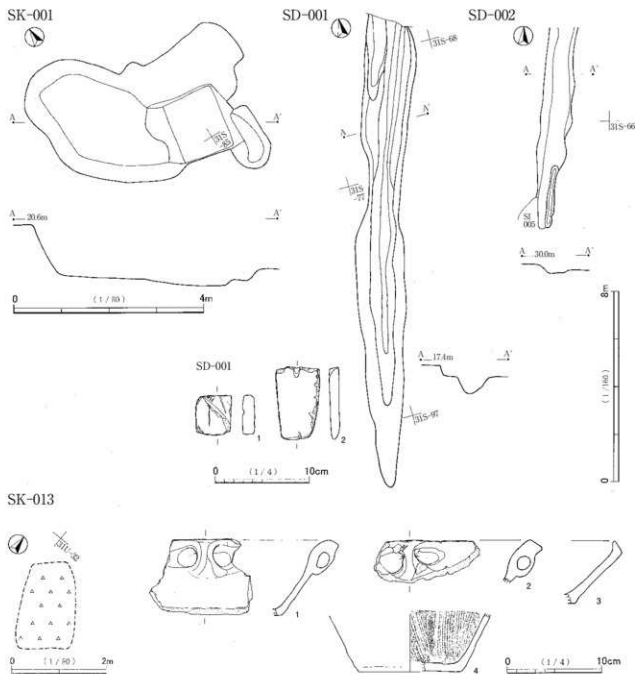
規模・形状 土坑底部の方形の形態から地下式坑かともみられるが、傾斜地という立地からみてその可能性は低い。時期・性格とも不明の土坑である。

出土遺物 中・近世の常滑焼とみられる甕の破片が出土した。

SK-013(第35図, 図版11)

位置 調査区のほぼ中央, 31U-42グリッド付近に位置する。

規模・形状 貝殻ブロックと縄文時代早期の条痕文系の土器片が若干出土した。縄文時代の地点貝塚の名残とみられるが、現場の所見では近世以降の攪乱によって移動した、二次的な堆積と考えられている。この貝層の周囲からかなりの量の近世陶磁器が出土しており、これらの遺物が攪乱の時期を示しているものと考えられる。



第35図 その他の遺構（2）及び出土遺物

出土遺物 1～4は在地産の中・近世土器である。1・2は内耳土器口縁部の破片、3も内耳土器と思われるが口縁部が内湾する特徴がある。1・3は焙烙ほどの器高の低さはなく、16世紀後半から17世紀代のもつと推測できる。内耳土器の破片はほかに16点ほど出土している。4は中世の在地産土製播鉢である。

上記の土器のほか陶磁器破片が15点出土している。陶器としては灰釉片口2点・腰鉗茶碗1点・ほぼ完形の鉄絵丸碗1点・播鉢2点があり、いずれも18世紀代の瀬戸・美濃産である。同時期の堺・明石系の播鉢破片2点も出土している。ほかに灰釉の筒形香炉があるが、近代に入るものであろう。磁器7点の中には肥前産の三角高台皿（17世紀末）・蜻唐草文蛇ノ目凹型高台皿（18世紀後半～19世紀初頭）がある。

総じて江戸時代後期主体であるが、中世末から近代までの遺物が出土した。

SD-001 (第35図, 図版11)

位置 調査区北端部, 31S-67～96グリッド付近に位置する。

規模・形状 北北東-南南西方向に延びる溝で、調査範囲の北側にさらに続いているとみられる。延長20m発掘され、31S-96グリッド付近で途切れる。最大幅2.1m、深さは最大で1m、覆土は自然堆積である。溝底に硬化面は認められない。

出土遺物 奈良・平安時代の土師器細片や近世の土器片が若干出土した。遺物の様相から、本溝は近世以降に掘られたものと推測される。ほかに近世の砥石2点(1・2)が出土している。

SD-002 (第35図, 図版11)

位置 調査区北端部, SD-001の西側10mほどの位置で平行している。

規模・形状 ほは南北方向に延びる溝で、これも調査範囲の北側まで続いているとみられる。最大幅は12m、最も深い箇所40cm程あり、延長8.5m遺存している。溝の南端部の底に幅30cm・長さ26m・深さ10cm程の細い溝が穿たれている。また、溝の南端部にSI-005が重複している。

出土遺物 奈良・平安時代の須恵器大型甕口縁部の破片2点(別個体)が出土しているが、混入したもので溝の時期を示すものではなく、近世以降の溝とみてよいと考えられる。

3 調査区南半部の遺構(第8図)

SK-004 (第36図, 図版11)

位置 調査区中央部の東端30U-88グリッド付近に位置し、SK-007に重複する。

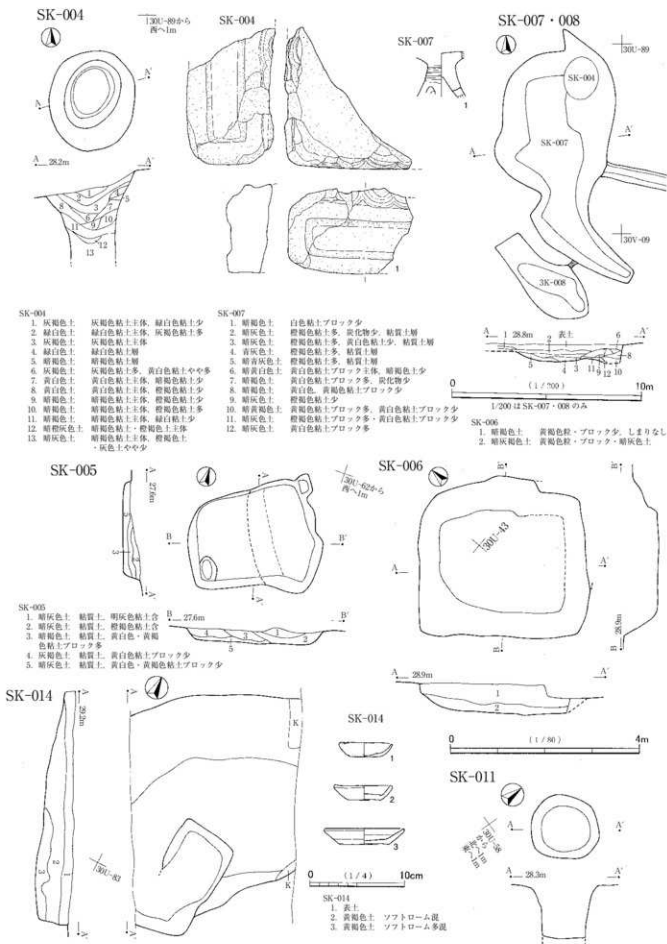
規模・形状 確認面での長径2.15m・短径1.75mの長円形である。確認面から1.95mまで精査したが底に達せず、水も湧き出して危険なため、完掘は断念されたものである。徐々に径が小さくなり、確認面から80cmほど下で1.5m×1.1m、発掘底面では0.95m×0.75mとなる。相当深く掘られていることから、中・近世以降の井戸と推測される。

出土遺物 1は宝篋印塔の基礎部分の破片である。側面に格狭間を刻み、上面には返花座の蓮弁の線刻が残る。薄赤色安山岩製である。精緻な加工とはいえ、中世の所産とみられる。ほかに近世陶器口縁部の微細片1点、縄文土器数片と土師器細片1点出土した。

SK-007・008 (第36図)

位置 調査区中央部の東端30U-89グリッド付近に位置し、井戸SK-004に重複して、その南側に広がる土坑である。

規模・形状 南北に細長い土坑で、南端が湾曲し、全体では「し」の字のようなプランをもつが、全体に不整形で、計画的に掘られたようには考えられない。最大幅6m、深さ50cm～70cm、横断面は鍋底形で、覆土は自然堆積の状況を示す。南北長13.5mである。土坑の北東端部に井戸SK-004が存在するので、井戸に関連した遺構と考えられる。坑底や周囲に柱穴は一切認められず、上屋などは設けられていなかったようである。



第36図 その他の遺構(3)及び出土遺物

東辺の中央付近から、幅 80cm・深さ 40cm～50cmの直線的な溝が東に向かって延びている。また、南に接する SK-008 との間の 40cmほどの土手にも、両土坑をつなげる幅 15cmほどの溝が掘られている。現場段階では、2条の溝は排水のために掘られたものと推測されたが、溝は坑底から 40cm～50cm高い位置にあることから排水機能を有するか否か不明であり、性格不明の溝といえる。

なお、SK-008 は最大幅 2.6 m・長さ 6 m・最大深さ 80cmほどの不整な長円形土坑で、出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

出土遺物 SK-007 では 40 個体ほどの陶磁器類が出土している。磁器は 16 点で、うち 11 点は飯碗である。磁器の碗類は肥前産で、二重網線文 1 点のほかは梅樹文を主体とする「くらわんか碗」(厚手碗) (18 世紀前半) で、ほかに蒔蒔印刺で笹葉と菊花を描く丸碗 (18 世紀後半) 1 点・筒茶碗 (18 世紀代) 1 点・広東碗 2 点 (18 世紀末～19 世紀初頭) などがある。このほか体部外面に飛び鉋文様をもつクロム青磁釉小碗 (19 世紀代) が 1 点ある。陶器としては、腰鎗茶碗 2 点・鉄絵丸碗 2 点・灰釉半球碗 1 点・鉄軸乗燭 1 点・灰釉耳皿 1 点・灰釉皿 1 点・灰釉片口鉢 2 点・灰釉徳利 1 点・鉄軸播鉢 2 点・三足の筒形香炉 2 点などがあり、18 世紀代を主体とする瀬戸・美濃産である。ほかに、灯火具としては志戸呂産の灯明受皿が 1 点ある。これ以外の 6 点は近代の所産とみられ、産地不明のものもある。土器としては、在地産の瓶口縁部 1 点・内耳土器の破片 4 点が出土している。江戸時代後期の遺物を中心に多くの陶磁器類が出土し、比較的遺存度の良好なものも多い。井戸周囲で使用されていたものも含まれているとすれば、井戸及び本土坑がこの時代に機能していた可能性は十分考えられる。

ほかに、古墳時代中・後期の土師器高杯の脚柱状部の破片 2 点、及び外面に横線の施された古墳時代前期の高杯脚柱状部の破片 (1) も出土している。脚の最上部に溝書き直線文が施され、その下に 3 孔が穿たれる。

SK-008 では、瀬戸・美濃産播鉢の口縁部細片 1 点・産地不明の灰釉皿口縁部細片 1 点・灰釉の上に内面のみ濃緑色の釉が斑状にかかる大型の水鉢の可能性のある細片 1 点などが採集されている。いずれも江戸時代後期以降のものであろう。

また、付近から 16 世紀中葉の瀬戸・美濃産鉄軸播鉢片が出土している。

SK-005 (第 36 図、図版 11)

位置 調査区中央部の東端 31U-61 グリッド付近に位置する。

規模・形状 確認面での長軸長 2.7 m・短軸長 2.0 m の不整な長方形の土坑である。深さは土坑の南辺で 40cm、それ以外の部分は 20cm 程である。覆土断面の観察から、2 基の土坑が重複したものと捉えられ、東側半分が後から掘り込まれた土坑と考えられる。この土坑は不整五角形状で、南北方向の長軸長 2.4 m、短軸長は 1.4 m 前後だったことになる。古い方の土坑は一辺 1.5 m 前後の隅丸方形が本来の形状と推測される。いずれも性格不明の土坑である。

出土遺物 近世陶磁器類が 13 個体出土している。図示しないが、ほぼ完形の鉄絵半球碗 1 点 (18 世紀後半～19 世紀初頭)・腰鎗茶碗 2 個体分の細片 (18 世紀代)・灰釉菊皿の細片 1 点 (17 世紀代)・2 合 7 勺ほど入る灰釉徳利 (18 世紀中葉) 1 点・播鉢口縁部細片 1 点 (18 世紀後半)・三足付き筒形香炉などは瀬戸・美濃産の陶器である。また肥前磁器の端反碗 2 個体分は 19 世紀前半である。ほかに、産地不明の甕細片 2 点、柿釉の土版も江戸時代後期とみられる。

SK-006 (第36図, 図版11)

位置 調査区中央部の西端 30U-43 グリッド付近に位置する。

規模・形状 長辺 3.5 m・短辺 2.5 m～3 mの比較的整った隅丸長方形プランである。深さは 40cm～50 cmで、壁の立ち上がりは緩い。坑底は白色粘土層に達している。遺存度の良好なものを含む近世陶磁器類が 10 点余り出土しているので、近世の遺構と考えられる。整ったプランを有する土坑なので、単なるゴミ穴ではないと思われるが、遺構の性格は不明である。

出土遺物 肥前産磁器は、くらわんか碗(厚手碗)(18世紀前半)が2個体あり、うち1個は口縁部をわずかに欠くほか完形である。瀬戸・美濃産陶器は、鉄軸の浅い小型鉢状で見込に重ね焼きされた三足の痕が残る完形品・灰釉三足筒形香炉・灰釉と鉛釉の鉢ないし片口鉢の破片である。柿軸の土瓶は産地不明である。在地産土器は、口縁部1/4周の内耳土器・1/3周ほどのカワラケ破片である。18世紀代主体の遺物群とみられる。

SK-011 (第36図, 図版11)

位置 調査区中央部の東寄り, 30U-48 グリッド付近に位置する。

規模・形状 検出面での径 1.35 m～1.40 m, 下部での径 0.9～1.0 mの比較的整った円形土坑である。検出面から 1.2 mまで掘り下げたが底に達せず、危険なためそれ以上発掘できなかった。さらに深く続いているのは確実で、井戸跡とみて間違いないと思われる。出土遺物はないが、近世以降に掘られたものであろう。

SK-014 (第36図, 図版12)

位置 調査区中央部のやや南寄り, 30U-73 グリッド付近に位置する。

規模・形状 トレンチ調査時に確認された土坑である。南北方向の幅約 4 m・深さ最大 70cmの落ち込みが確認され、東西方向に溝状に続くかとみられたが、その延長部分は調査していない。この溝ないし土坑の底面に幅 1.3 m・長さ 2 m強の土坑が確認されたが、相互の前後関係は不明である。須恵器や土師器の微細片が若干出土したのみで、遺構の時期・性格ともに不明である。

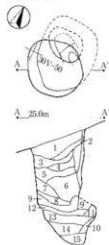
出土遺物 1～3はカワラケで、全体の 1/2～2/3が遺存した破片である。底部は回転糸切り無調整である。薄手で硬質であり、近世の所産である。このほかに、鉄軸天目茶碗の口縁部微細片1・挿鉢細片・灰釉鉢の口縁部細片2点(別個体)・鉄軸壺口縁部微細片1点などが出土している。いずれも 18世紀代主体の瀬戸・美濃産製品であろう。

SK-037 (第37図, 図版12)

位置 調査区南部斜面の上部 30V-50 グリッド付近に位置する。

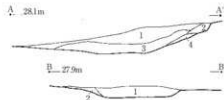
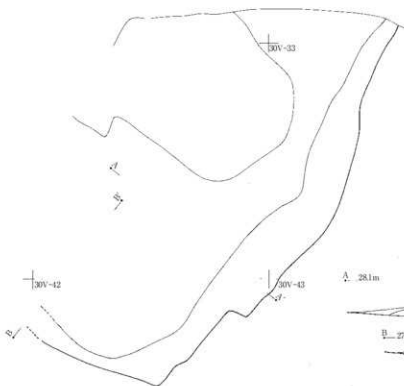
規模・形状 調査区南部の斜面部に存在する土坑は、複雑に切り合うものが多いが、本土坑は単独で存在する。長径 1.5 m・短径 1.2 mの南北方向に長い長円形プランをもつ。深さ 1.6 mまでほぼ垂直に掘り込まれ、その下 70cmほどは南方向に斜めに掘り込まれ、多少オーバーハングする。覆土にはロームブロック土や山砂などが多く含まれるので、人為的に埋め戻された可能性がある。かなり深い土坑であることから、井戸として掘り始められたが、湧水がないなどの事情から途中で放棄された可能性が考えられる。

SK-037



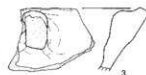
0 (1/80) 4m

SX-013



SX-013

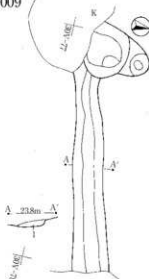
1. 暗褐色土 ローム粒・小ロームブロック含、焼土粒若干
2. 暗黄褐色土 ローム粒主体・粘土粒若干
3. 黒褐色土 若下の暗褐色土が塊状に混
4. 黄褐色土 ローム粒・ローム小ブロック主体



0 (1/4) 10cm

第37図 その他の遺構(4)及び出土遺物

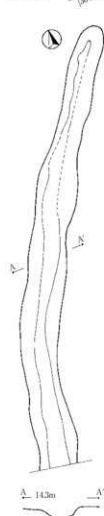
SD-009



SD-009

1. 暗褐色土 白色粘土粒・小ブロック多、炭化物粒含

SD-007



出土遺物はない。

SD-007 (第37図, 図版12)

位置 調査区最南端の斜面下部30W-34グリッド付近に位置する。

規模・形状 幅60cm～80cm・深さ10cm～20cmの溝で、長さ9m程を調査した。斜面に直交する方向に延びており、排水目的というより台地の上下を結ぶ道の一部ではないかと考えられる。出土遺物はなく、宝永火山灰なども確認されていないので、遺構の時期は不明である。

SD-009 (第37図, 図版12)

位置 調査区南端部斜面の上部30V-77グリッド付近に位置する。

規模・形状 幅45cm～75cm・深さ20cm～30cmの東西方向に延びる溝で、長さ4.5mほど調査された。西端部には性格不明の土坑が重複している。出土遺物はなく時期不明である。台地の縁に沿うような方向に延びているので、畑と山林を隔てる境界溝の可能性が考えられる。

SX-013 (第37図, 図版12)

位置 調査区南半部の台地平坦部から斜面にかかるあたりの30V-32グリッド付近に位置する。

規模・形状 南面する台地の縁辺という好立地にもかかわらず遺構がきわめて希薄な場所で確認された。おそらく中・近世以降の何らかの造成工事によって、奈良・平安時代の堅穴住居跡などそれ以前の遺構が破壊された痕跡と推測される。現存する東辺長9m、南辺は2.6mまで残るが、西と北辺は削られている。各辺の壁は緩やかに立ち上がり、深さは最大で60cmである。壁の立ち上がりも緩く、各辺のラインも不規則であり、明確な意図をもって掘り込まれた遺構かどうか不確定である。

出土遺物 1は2/3周ほど遺存する小型のカワラケで、近世の所産である。2は深い鉢状の土器で、内面の口縁部下3.5cmの位置に体部との境となる稜が作り出されている。胎土その他は内耳土器に類似しており、実際に耳が付いていたか否かは不明であるが、器高があることから中世内耳土器(土鍋)であろう。3は内耳土器の破片で、ほかに内耳土器の細片が6点出土しており、中世内耳土器か近世焙烙の判別は困難である。また、瀬戸・美濃産の近世灯明受皿細片1・磁器碗2(中国産の可能性ある清朝丸碗、肥前の近代磁器碗か)・キセルの雁首細片なども採集されている。

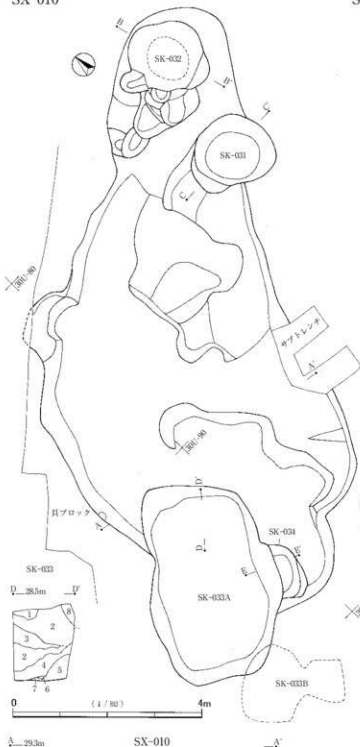
SX-010 (第38図, 図版12)

位置 調査区南半部の台地平坦部の西側30U-80グリッド付近に位置する。

規模・形状 SX-010は北北東から南南西方向に長い、浅く不整形な土坑であり、これに幾つかの土坑が重複している。SX-010は長さ12.8m、幅は南半部で最大となり5.8mほどとなる。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い鍋底形である。全体にSX-013に類似した形状と立地を示しているといえる。また、遺構の北端部には井戸SK-032が重複しているので、同じく井戸であるSK-004と、井戸に関連した遺構とみられるSK-007との関係に非常に類似していることが注意される。なお、若干の貝殻ブロックと獣骨が西壁部で出土している。

出土遺物 径8cm・器高2.3cmほどのカワラケ(1)や内耳土器(2)が出土した。カワラケは本遺跡

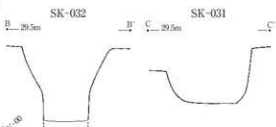
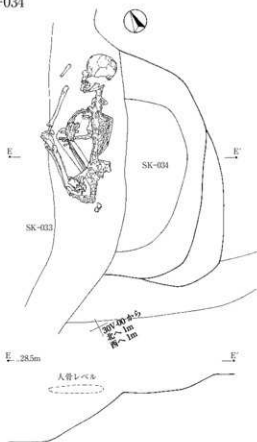
SX-010



SX-010

1. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒多
2. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック極多
3. 暗褐色土 ロームブロック・黄白色粘土粒多
4. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック極多、黄白色粘土粒少
5. 暗褐色土 4に類似
6. 暗黄褐色土 ハードロームブロックに暗褐色土混
7. 暗黄褐色土 焼土粒・焼土小ブロック多

SK-034



SK-033

1. 暗褐色土 ブロック状の軟質土と黄褐色土の混合
2. 黄褐色土 大ハードロームブロック主体
3. 暗黄褐色土 2に類似するがハードロームブロックが小型
4. 暗褐色土 黒色土粒主体、ハードロームブロック少
5. 暗黄褐色土 ローム粒・ローム塊多
6. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック・粘土ブロック主体 + ブロック状の黒色土
7. 暗褐色土 粘土粒若干
8. 黒褐色土 黒色土主体、ハードロームブロック多



0 (1/4) 10cm

第38図 その他の遺構(5)及び出土遺物

出土の他のものに比べやや器内が厚いことから中世（16世紀後半）の所産の可能性があり、内耳土器は耳部なので中世か近世かは不明である。他に、江戸時代後期の肥前産磁器のくらわんか碗（厚手碗）（18世紀前半）の1/2周ほどの破片及び体部外面に飛び匏文様をもつクロム青磁小碗（19世紀）の破片が出土している。遺物は中世末から近代まであり、遺構の時期は新しいが、古いものが混入した可能性が高い。

SK-031（第38図、図版12）

位置 SX-010の北端部に重複し、SK-032の南側に近接する。

規模・形状 1.7m×1.5mのほぼ円形である。深さは1.2mで、底面は平らに仕上げられている。形状は井戸そのものといえるが、浅いことから、未完成の井戸の可能性もある。本遺構の西側には、高さ10cm程度の階段状の掘込みがあり、井戸への出入りのために設けられたものと考えられる。

出土遺物 覆土中から奈良・平安時代の土師器細片18点が出土したが、遺構の時期を示すものではないであろう。

SK-032（第38図、図版12）

位置 SX-010の北端部に重複する。

規模・形状 検出面では径1.5mの円形で、上部が漏斗状になり途中で90cm前後の径となる。深さ1.5mまで精査し、それ以上は危険なため調査できなかったが、井戸であることは確実である。本土坑の西側にも階段状の掘り込みがある。

出土遺物 近世陶磁器類の破片や土師器・須恵器の微細片などが出土したが、遺構の時期は不明である。

SK-033（第38図、図版13）

位置 SX-010の南端部に重複する。

規模・形状 長軸4.1m・短軸2.7m、深さは最大で60cmの比較的整った隅丸長方形の土坑である。覆土中から縄文土器を主体とする多量の土器片が出土した。本土坑の南東隅の壁下部に横穴が確認され、南側に地下式坑状の土坑が掘り込まれていることが推測された。その部分の地山をバックホウで削ったところ、ローム粒を含む暗褐色土の面が確認された（図の破線部分）。安全対策上、それ以上の精査をせずに埋戻したが、大小2つの方形土坑が重複している状況が確認された。暗褐色土層はかなりしみがよく、中には縄文土器片を多く含んでいたとのことである。SK-033と一体の遺構なのか、偶然の重複か、未掘のため不明である。

出土遺物 1は径7cm・器高2cm前後のカワラケである。器厚が薄いことから近世とみられる。

SK-034（第38図、図版13）

位置 SK-033の東辺に重複する。

規模・形状 長軸1.15m・現存部幅40cm・深さ30cm程の、本来は円形だったとみられる土坑である。西半分は、SX-010の覆土内に掘り込まれていたため把握されていない。土坑の西側で屈葬状態の人骨が出土した。頭を土坑北壁に付け、上体は右半身を下にして、西向きに寝かされる。脚は正座の状態である。土坑底が鍋底状なので、樽状の棺桶は使用していないと考えられるので、当初から横臥の状態で埋葬され

たのであろう。副葬品はなかった。

副葬品その他の共伴遺物がないため時期不明であるが、近世の井戸に伴う遺構 SX-010 の覆土を切り込んでいること、周囲に貝殻が全くないにもかかわらず良好に遺存していたことなどから、近代以降の遺体の可能性が高いとみられる。本土坑の南西 8 m ～ 10 m 程の位置に、規模・形態が類似した SK-022・026・029 やこれらより多少小規模の土坑が群集している。これらも墓坑であると仮定すると、この地区に墓地があったということになるが、ほかに人骨は出土していないので、明確なことはいえない。

SX-011 (第 39 図, 図版 13)

位置 調査区南端斜面の上部, 29V-19 グリッド付近に位置する。

規模・形状 台地平坦面から南西斜面部に移行するあたりに土坑・ピットが密集して掘り込まれている。台地の縁辺に沿って、地山を 40cm ほど掘り下げる台地整形が行われ、その下端線に併行して 15 基の土坑・ピットがほぼ 2 列になる様に並んでいた。これらから南に多少離れた位置に SK-030 が存する。台地整形とこれらの土坑を総称して SX-011 の遺構名が付されている。

土坑群の中では群の北西部にある SK-026 が最大で、1.7 m × 1.3 m の長円形、SK-022・SK-027 がこれに次ぐ規模をもつ。この 3 基以外は規模が小さくなり、またより細長い長円形プランをもつ。検出面からの深さはどれも 20cm ～ 30cm と、それほど深くない。

土坑群のある一帯は、縄文時代後・晩期の土器片がおびただしく散布しており、土坑周囲からも多量の土器が出土しているが、土坑との関連は不明である。土坑はほぼ列状に並んでいるが配置は不規則で、浅いこともあり櫛列とは認められない。SK-022・026・027 など北西部のやや大型の土坑は、SK-034 のような墓坑の可能性はあるが、確証はない。すべて時期、性格とも不明であるが、南側斜面部で検出された SK-020 等の土坑群同様、台地整形された斜面下の平場内の土坑群であることから、中・近世の遺構の可能性が高いと考えられる。

SK-030 (第 39 図)

位置 調査区南端部の斜面上部, 30V-10 グリッド付近, SX-011 の南東部に位置する。

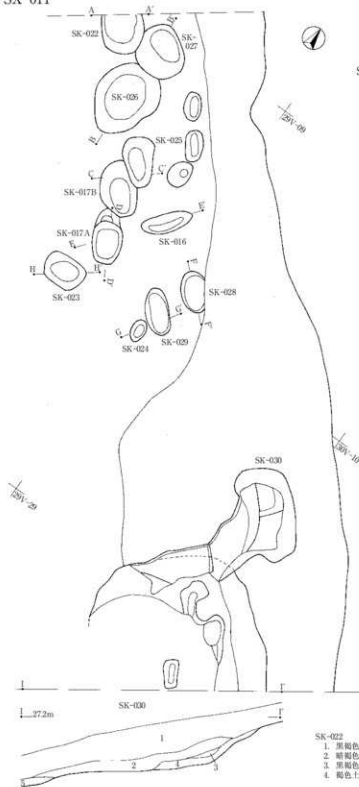
規模・形状 斜面の下側に一辺 3 m 以上、北側での深さ 0.9 m ～ 1 m の不整な隅丸方形の土坑があり、底面は比較的平坦であるが、壁際に幾つか不整形な掘り込みが見られる。底面は白色粘土層を掘り込んでいること、土坑の周囲は縄文時代後・晩期の遺物包含層となっており、当該期の粘土採掘坑の可能性も考えられる。この遺構の北側に、軸長 2 m × 1 m 程の隅丸長方形の土坑があり、その南から下側の土坑との間をつなぐような掘り込みが張り出している。上下 2 基の土坑の関係は不明である。

SK-021-038 ほか (第 39 図, 図版 13)

位置 調査区南端部の斜面の中腹, 29V-68 グリッド付近に位置する。

規模・形状 遺跡南端部の斜面中腹で、土坑群が斜面に直交する南北方向に列状に並んでいた。南北 10.4 m の間に 14 基の土坑が並び、互いに重複していた。斜面上方には径 1.5 m × 1.2 m、深さ 50cm の不整円形土坑である SK-038A、幅 1 m × 深さ 20cm × 長さ 2.7 m の細長い SK-038C があり、その間をつなぐ深さ 10cm ほどの SK-038B がある。SK-038 の南側には、幅 0.5 m 程度 × 長さ 1.0 m の南北方向に長い隅丸方

SX-011



SK-030

1. 暗褐色土 表土、ローム粒・焼土とローム小ブロック多、しまりあり
2. 黒褐色土 1に類似、粘土粒・粘土小ブロック含
3. 乳白褐色土 白色粘土・黄色粘土粒主体
4. 暗褐色土 粘土粒・粘土小ブロック多、炭化物含
5. 明褐色土 粘性土、礫山、両ナックラックが入り4が流入

SK-022



B_27.3m



SK-017B SK-025



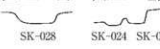
E_26.9m



SK-017A



F_27.0m



SK-023



G_26.8m



29V-68

29V-78

A_20.2m A'



SK-022

1. 黒褐色土 ローム粒若干
2. 暗褐色土 ローム粒多
黄色土粒多
3. 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒
4. 褐色土 暗褐色土・ローム粒
・小ハードロームブロック極多

SK-017B SK-025

1. 暗褐色土 ローム粒少
2. 暗褐色土 ローム粒多、1より明
3. 褐色土 ローム粒少、しまりあり
4. 暗褐色土 ローム粒+褐色土粒

第39図 その他の遺構(6)及び出土遺物

0 (1/80) 4m

形プランの土坑がほぼ2列になって並んでいる(SK-021A～I, SK-049)。深さはいずれも30cm前後である。覆土中から多少の縄文土器片が出土しているが、周囲の斜面部は大量の縄文土器片の散布地であることから、混入したもので、中・近世以降の遺構の可能性が考えられる。

これらの土坑列の、北方向の延長線上に、SK-022ほかの土坑群 SX-011 が位置している。両土坑群もほぼ2列に並んでいたことから、両遺構群の関連も推測できるが、その中間の土坑は検出されていないので、両者が本来一連のものだったかどうかは不明である。

SX-012 (第40図, 図版13)

位置 調査区南端斜面の西半部, 29V-37 グリッド付近に位置する。

規模・形状 ほぼ南北方向に連なる土坑列であり、斜面に対しては斜め方向に伸びる。長さ15.2mが調査された。規模・形状とも不規則な土坑あるいはピットが互いに重複し、おおむね2列に並んでいる。不整な長円形プランのものが多く、長軸を列の方向(南北方向)に向けるのが基本の様である。幅50cm程度・長さ1m内外のものが多く、深さも不規則で、20cm～30cm平均であるが、規模の大きい円形プランのものに80cmほどの深いものも認められる。植栽痕跡列の可能性も考えられる。中ほどで西側に寄った位置にある土坑(29V-36グリッド周辺)は1.7m×1.4mと大きく、深さも80cm以上あり、形状的には土坑墓に近く、他の一連の土坑・ピット群とは性格の異なる遺構の可能性もあろう。

出土遺物 内耳土器の体部1/3周ほどの破片が出土している。ほかに奈良・平安時代の土器が見られ、全体の60%ほどが遺存した土師器杯の破片1点・須恵器杯の細片2点・土師器皿の細片1点、甕はいずれも口縁部の微細片で、土師器2点・須恵器1点が出土している。ほかに縄文土器片も採集されている。ほかにSX-012の西端部にあったSK-047で奈良・平安時代の土師器杯3/4周ほどの破片が出土している。また、SK-041では奈良・平安時代の須恵器甕口縁部破片、SK-040では須恵器甕の底部微細片などが出土しているが、いずれも混入品であろう。

SK-018・019・052 (第40図, 図版14)

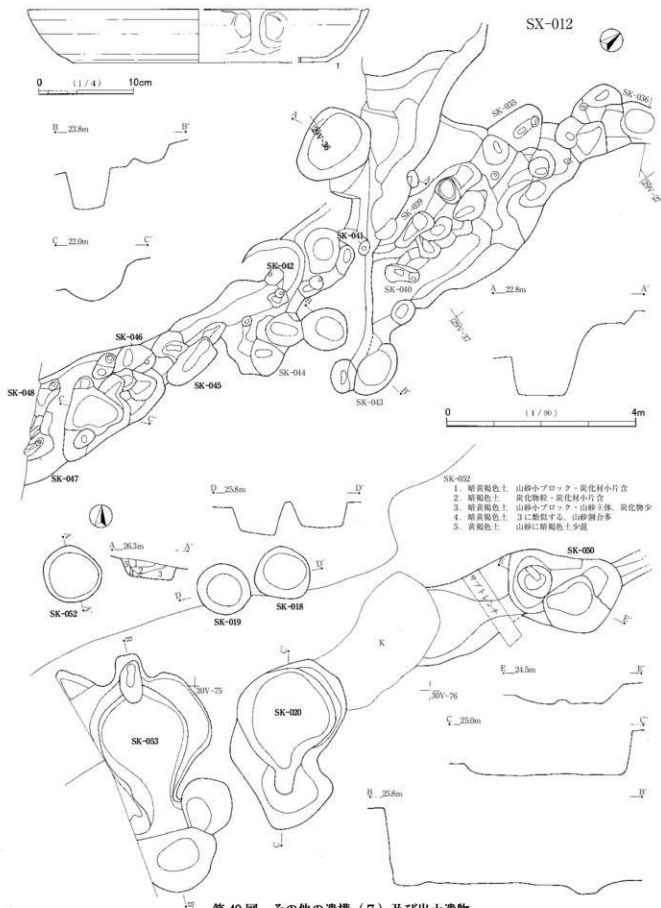
位置 調査区南端斜面の東半部, 30V-75グリッド付近に位置する。台地の平坦部から南側斜面に移行する地点で、台地縁辺に沿う様に並んで検出された土坑群である。

規模・形状 径1.1m～1.2mの整った円形プランで、深さが40cm～70cmを測る。六道銭など出土していないが、形状・規模などから近世の墓坑ではないかと推測される。物井地区の御山遺跡では近世(18～19世紀)の土葬墓10数基が確認されているが、これと形状・規模が類似しているため、土葬墓の可能性は高いと考えられる。

SK-020・050・053 (第40図, 図版14)

位置 調査区南端斜面の東半部, 30V-75グリッド付近に位置する。上記SK-018などより一段低い面に掘り込まれている。

規模・形状 SK-020とSK-053は、瓢箪形の平面プランをもち、長軸を南北方向にとる。この2基は東西に並んでおり、規模・形状とも類似している。主体となる土坑は径2.2m～2.5mの円形で、深さは北側で1m～1.5mある。南(谷)側に向かって壁は低くなっていき、南側は40cm～50cmの幅で開口する。



第40図 その他の遺構(7)及び出土遺物

開口部の南に径1.5m前後、深さ30cm～40cmの土坑が穿たれる。この2基が同じ目的で掘られたことは確実だが、その目的は不明である。土坑内からの出土遺物はなく、時期も不明である。

SK-050は複数の土坑が重複したようなプランをもつ。当初、西側の円形部分で木炭が出土したので炭窯の前底部の可能性が考えられたが、炭の量は少なく、結局炭窯本体部も見出されなかった。性格不明の土坑である。

出土遺物 SK-050では瀬戸・美濃産錆釉の灯明受皿（近世）の完形品が出土している。SK-053では陶器の汁注の蓋が出土している。上面に錆釉がかけられているもので、近代の製品の可能性もある。

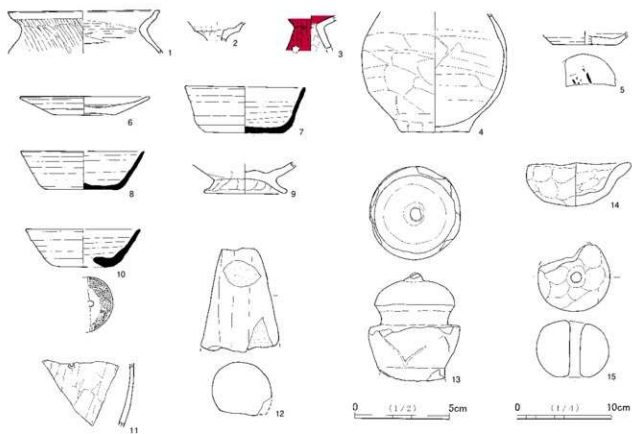
4 遺構に伴わない遺物（第41図）

確認調査段階のトレンチ調査、本調査時の表土除去・遺構検出作業などで、遺構に伴うものと判断できない段階で採集した遺物について報告する。縄文土器以外では、量的にはほとんど奈良・平安時代の土師器・須恵器の細片である。

土器 1～4は古墳時代前期の土器である。1はいわゆるS字状口縁甕形土器の口頸部1/6周ほどの破片である。S字の屈曲は弱く、口唇端部は平坦に仕上げられる。口縁部横ナデ、頸部から肩部にかけて外面には斜め方向の刷毛目のみ、頸部内面には横方向の刷毛目が残る。器表は黄灰色で、胎土には橙色のスコリアを含み、明らかに在地の土ではない。伊勢湾沿岸地域からの搬入品であろう（31S-83グリッド出土）。2・3は小型器台で、2は杯部底部の細片（31U-15グリッド出土）、3は杯部底部から脚柱上部の破片、脚には3孔が空けられる。外面全体と杯部内面が赤彩される（31T-02グリッド出土）。器台2点の胎土はいずれも在地のものである。4は甕形土器で、底部全周、胴下半部1/2～1/3周の破片である。器壁は薄い。胴部に刷毛目は全く認められず、内外面ともヘラケズリの後ナデ調整が施されている（31T-14グリッド出土）。

5～11は奈良・平安時代の土器である。5は土師器杯底部片で、底面に2本の直線状の墨書が認められる（31U-22グリッド出土）。6～9は確認調査段階で、北部のトレンチ3（SI-013の西側）から一括出土した土器である。同一時期の遺物で、遺存度も良好なのでおそらく堅穴住居跡内に存在していたものであろう。トレンチ調査地点ではカマドは確認されておらず、床面も把握されていないが、斜面部に位置するので、他の堅穴住居跡同様、堅穴の掘り込みが厚く堆積した黒色土内にとどまっていたために確認できなかったものと思われる。6は土師器皿で、底面は一方方向の手持ちヘラケズリ、体部下端部も手持ちヘラケズリで調整される。7は須恵器杯で、底面とその周囲は回転ヘラケズリされる。8は内外面とも黒色で、特に内面の黒みが強い。底部外面は灰色である。底面は一方方向のヘラケズリ、その周囲も手持ちで横方向にヘラケズリされる。9は台付甕の台部から胴下端部の破片で、台部は完存している。台は粗雑な作りで、裾部は横ナデされるが全体に波打っている。台内面には指頭による押さえ付け痕が幾つかの凹みとして残る。胴部内底面では逆に瘤状の影らみとして残る。胴部外面は縦方向にヘラケズリされる。11は土師器甕の胴部破片で、焼成後の穿孔が1個認められる。穿孔は両面から行われているが、その意図は不明である（31U-03グリッド出土）。10は須恵器杯の1/3周ほどの破片で、底部中央付近に穿孔が認められる。底部は回転糸切り無調整、体部下端のみ回転ヘラケズリされる。これも穿孔の意図は不明である（31U-13グリッド出土）。

土製品その他 12は土製支脚の上半分ほどの破片で、よく焼けている（31U-14グリッド出土）。14は



第41図 遺構外出土遺物

手捏ねのミニチュア土器で、碗状の体部をもち、口縁部が一か所ですまみ状に引き出される（31U-33グリッド出土）。15は白玉状の土玉で、全体の1/4ほどを欠く（31U-24グリッド出土）。

13は石塔で、おそらく中世宝篋印塔の相輪頂部の宝珠部分の破片で、黒色多孔質安山岩製である。SI-039の直上で出土したが、もちろん住居跡に伴う遺物ではない。SK-004出土の宝篋印塔基礎部分の破片も安山岩製であるが、材質が異なるものである。

第1表 嶋越遺跡竪穴住居跡一覧表

* 竪穴規模は長軸×短軸 ** 壁溝は幅×深さ

遺構番号	位置	主軸方向	竪穴規模(m)	壁高(cm)	壁溝(cm)	柱穴深さ(cm)	貯蔵穴	出入口ビット	カマド	時期	備考
SI-008	3IS-87	N-15.0°-E		30～58		P1 22 P2 31			○	奈・平	東から南辺欠
SI-009	3IS-83	N-16.5°-E	3.4×3.3	12～29				○	○	奈・平	
SI-010	3IT-05	N-71.5°-W	3.48×-	7～51		P1 29 P2 36 P3 26 P4 36		○	○	奈・平	南辺欠
SI-011	3IT-17	N-89.0°-W	3.79×3.65	11～68		P1 46 P2 25 P3 28 P4 24		○	○	奈・平	SI-012を切る
SI-012	3IT-16	N-66.0°-W	5.3×5.0	12～65		P1 50 P2 27 P3 42 P4 41			○	奈・平	北辺欠。SI-011に切られる。
SI-013	3IT-24	N-46.5°-W	4.1×3.5	5～26	15×13	P1 50 P2 54 P3 59 P4 40			○	奈・平	
SI-014	3IT-26	N-54.5°-W		9～40		P1 30 P2 28			○	奈・平	北・東・南辺欠。伊敷・上能整杯出土。
SI-015	3IS-45	N-29.0°-W	3.9×-	15～33		P1 22 P2 38		○	○	奈・平	西・東辺欠
SI-016	3IS-76	N-40.0°-W	4.96×-	20～51	18×4	P1 15 P2 12 P3 27				古墳	北・東・南辺欠
SI-017	3IS-83	N-32.0°-W	5.5×5.7	24～53		P1 55 P2 50 P3 17 P4 68	○		○	古墳	西辺欠
SI-018	3IS-87	N-12.5°-W	3.5×-	16～21	16×7	P1 42 P2 29				奈・平	東辺欠
SI-019	3IT-07	N-28.5°-W	3.42×3.31	6～17		P1 13 P2 17 P3 17 P4 18			○	奈・平	
SI-020	3IT-03	N-91.0°-W	3.58×3.4	2～45		P1 25 P2 33 P3 25		○	○	奈・平	南東辺欠
SI-021	3IT-18	N-91.1°-W	3.58×3.5	2～45		P1 25 P2 33 P3 25			○	奈・平	カマド竪穴隣に設置
SI-022	3IT-28	N-91.2°-W	3.58×3.6	2～45		P1 25 P2 33 P3 25			○	奈・平	東辺欠
SI-023	3IT-27	N-65.0°-W		16～21					○	奈・平	カマドのみ遺存
SI-024	3IT-37	N-61.0°-W		8～38					○	奈・平	北・東辺欠
SI-025	3IT-47	N-49.0°-W		36～41					○	奈・平	北・東辺欠
SI-027	3IU-34	N-71.5°-W	2.85×-	23～37					○	奈・平	北辺欠
SI-028	3IT-84	N-11.5°-E		4～33		P1 8 P2 10 P3 32 P4 23				奈・平	東・南・西辺欠
SI-029	3IU-14	N-8.5°-W	2.9×2.6	58～74					○	奈・平	東西辺欠
SI-030	3IU-36	N-9.8°-W	3.04×-	14～40	32×10				○	奈・平	東辺欠
SI-031	3IU-16	N-49.5°-E		13～24					○	奈・平	カマド周辺のみ遺存
SI-032	3IU-06	N-17.2°-E	2.77×-	27～35					○	奈・平	東辺欠。SI-033を切る。
SI-033	3IU-05	N-61.0°-W	3.54×3.94	9～28		P1 28 P2 14 P3 43 P4 34			○	奈・平	SI-032に切られる
SI-034	3IU-06								○	奈・平	カマドのみ遺存
SI-035	29V-57	N-58.0°-E	3.4×- 2.3×-	12～29 11～12					○	奈・平	新田2期の竪穴。西辺欠。
SI-036	30V-87	N-43.8°-W	2.54×-	20～47					○	奈・平	東・西辺欠
SI-037	29W-38	N-7.8°-W					○			奈・平	西・南辺欠
SI-038	30W-10	N-91.0°-E	3.84×3.48	64～77					○	奈・平	南辺欠
SI-039	30W-11	N-96.0°-E		16～57						奈・平	南辺欠

第2表 嶋越遺跡六住居跡出土土器観察表 *口径・底径の()内数値は測定径、器高の[]内数値は現存高、単位はcm

遺跡番号	検出層号	器種	器形	遺物No.	口径	底径	器高	現存高(%)	土質	内面装飾	外面装飾	底面装飾	備考
51-000	第11層-1	磨き器	杯	1	(13.5)	-	(3.6)	10	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ		
51-000	第11層-2	磨き器	羹	1	(13.8)	-	(4.7)	5	灰	ナデ	ナデ		
51-000	第11層-3	土師器	羹	1-34-5 7-8	(27.4)	-	(33.2)	40	灰	ナデ、ヘラタズリ	ナデ、ヘラタズリ→ミギキ		
51-000	第12層-1	磨き器	杯	1	(13.0)	(7.2)	3.5	15	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ	
51-000	第12層-2	磨き器	杯	1-6	12.7	7.4	4.1	40	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ→手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-3	磨き器	杯	11	(13.2)	(7.4)	4.4	30	赤黒	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-4	磨き器	杯	1-13	(12.9)	7.4	4.45	60	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ	
51-000	第12層-5	磨き器	杯	1	(12.9)	(6.8)	4.35	30	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-6	磨き器	杯	1	-	(8.4)	(3.3)	5	灰	ナデ	ナデ	手持ちヘラタズリ	
51-000	第12層-7	磨き器	杯	1	-	(6.4)	(3.0)	20	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ	
51-000	第12層-8	磨き器	杯	1	-	(8.4)	(2.8)	10	灰白	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ	
51-000	第12層-9	磨き器	杯	1	-	(7.2)	(2.1)	20	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ→手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-10	磨き器	杯	9	-	(7.0)	(1.9)	20	灰黒	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ	
51-000	第12層-11	磨き器	杯	1-12	-	(7.2)	(1.3)	30	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ→手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-12	磨き器	杯	1	-	(7.2)	(1.3)	10	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-13	土師器	瓶	1-14-15	14.6	6.2	2.1	80	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-14	土師器	瓶	1-16	(13.0)	6.1	1.3	40	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-15	土師器	瓶	1-30-31 36-37	12.6	5.6	4.35	80	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-000	第12層-16	土師器	杯	1-15	13.8	7.9	5.1	90	灰緑	ナデ→ミギキ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	内面黒色施
51-000	第12層-17	土師器	瓶	1431-02-1	(15.1)	-	(4.1)	5	赤黒	ナデ→ミギキ	ナデ		
51-000	第12層-18	土師器	羹	20	(18.1)	-	(5.1)	5	灰黒	ヨコナデ	ヨコナデ		
51-010	第13層-1	磨き器	杯	1	(13.4)	(7.4)	4.9	20	灰	ナデ	ナデ	手持ちヘラタズリ	軸上に長石・漆母
51-010	第13層-2	磨き器	杯	1	-	(7.4)	(1.2)	15	灰	ナデ	ヘラタズリ	回転ヘラタズリ→手持ちヘラタズリ	軸上に長石
51-010	第13層-3	磨き器	杯	1	-	(7.2)	(2.2)	10	灰黒	ナデ	ナデ→底部に回転ヘラタズリ	回転ヘラタズリ	軸上に長石・漆母
51-010	第13層-4	土師器	杯	1	11.1	-	4.9	70	灰	ナデ	ナデ→ヘラタズリ	ナデ	軸上に長石・漆母
51-010	第13層-5	磨き器	羹	1-11	-	-	-	10	灰	ナデ	ナデ→ミギキ		軸上に長石
51-010	第13層-6	土師器	羹	2	(24.8)	-	(15.7)	5	灰黒	ヨコナデ→ヘラタズリ→ヘラナデ			
51-010	第13層-7	土師器	羹	1	-	5.2	(6.9)	5	灰	ヘラナデ→ミギキ			軸上に長石・漆母
51-010	第13層-8	土師器	瓶	1-10-10	-	(19.4)	(13.0)	10	灰黒	ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ→ヘラナデ	ヘラナデ→ヘラナデ	軸上にスクリヤ
51-011	第14層-1	磨き器	杯	8	-	7.4	(7.2)	25	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ	
51-011	第14層-2	土師器	杯	10	(11.6)	(7.0)	4.6	40	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-011	第14層-3	土師器	瓶	1431-02-1	(11.6)	-	(4.2)	30	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ		
51-011	第14層-4	磨き器	羹	2	(18.4)	-	(10.4)	20	灰	ナデ	ナデ→ミギキ		軸上に漆母
51-011	第14層-5	磨き器	羹	1431-02-1	-	-	(4.9)	5	灰	ナデ	ナデ、ヘラナデ		軸上に漆母
51-011	第14層-6	土師器	羹	1	(19.0)	-	(10.0)	5	灰	ヨコナデ→ヘラナデ	ヨコナデ→ヘラナデ→ヘラナデ		
51-012	第15層-1	磨き器	杯	1	(13.7)	7.0	4.9	40	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-012	第15層-2	土師器	杯	3	(11.2)	-	(2.8)	20	灰	ナデ→ミギキ			赤土ナリ、内面黒色施
51-012	第15層-3	土師器	杯	5	-	(8.3)	(2.2)	20	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ、ヘラナデ	軸上にスクリヤ
51-012	第15層-4	土師器	高台付杯	1	-	6.1	(1.9)	20	灰黒	ナデ	高台の取り付後ナデ		漆母残跡あり
51-012	第15層-5	磨き器	羹	1	(22.0)	-	(7.3)	5	灰黒	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ→ミギキ		
51-013	第16層-1	磨き器	羹	1	(12.3)	-	(1.3)	5	灰	ナデ	ナデ		軸上に長石
51-013	第16層-2	磨き器	杯	1	(12.3)	7.5	4.2	30	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ	軸面上内面黒質[?]・火跡
51-013	第16層-3	磨き器	杯	14	12.4	7.7	4.1	70	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ	
51-013	第16層-4	磨き器	杯	32	12.1	7.8	4.1	60	灰緑	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ	
51-013	第16層-5	磨き器	杯	32	(12.4)	7.1	3.9	40	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ→手持ちヘラタズリ(全面)	
51-013	第16層-6	磨き器	杯	1	-	(7.8)	(3.6)	20	灰	ナデ	ナデ	手持ちヘラタズリ	軸上に長石・漆母
51-013	第16層-7	磨き器	杯	19	-	(8.0)	(3.2)	10	灰黒	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ	外面に火跡
51-013	第16層-8	磨き器	杯	20	-	(8.8)	(3.1)	20	灰黒	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	
51-013	第16層-9	磨き器	杯	29	-	(8.0)	(2.5)	20	灰黒	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ	外面に火跡
51-013	第16層-10	土師器	杯	1	-	(6.3)	(1.7)	10	灰黒	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	回転ヘラタズリ→手持ちヘラタズリ	
51-013	第16層-11	磨き器	羹	1	(20.4)	-	(6.5)	5	灰黒	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ→ミギキ		
51-013	第16層-12	磨き器	羹	22	10.2	-	(10.1)	20	灰	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ→ミギキ		軸上に黒色粒
51-013	第16層-13	磨き器	羹	1-26	-	(12.4)	(14.0)	20	灰黒	ナデ	ナデ→ミギキ		
51-013	第16層-14	磨き器	羹	25	-	-	-	5	灰	ナデ	ナデ		軸上に長石
51-013	第16層-15	磨き器	杯	1	-	(14.4)	(1.3)	5	灰黒	ナデ	ヘラナデ	無装飾	
51-013	第16層-16	土師器	羹	1-21	19.9	-	(8.2)	20	灰黒	ヨコナデ→ヘラナデ	ナデ		内外黒質残跡しく真砂不明確、軸上に長石・漆母
51-013	第16層-17	土師器	羹	1	(16.4)	-	(15.2)	5	赤黒	ヨコナデ→ヘラナデ			
51-013	第17層-18	土師器	瓶	1-9-10	(27.7)	-	(9.8)	20	赤黒	ヨコナデ→ヘラナデ			
51-014	第18層-1	磨き器	羹	1	(16.4)	-	(1.6)	10	灰	ナデ	ナデ→回転ヘラタズリ		軸上に漆母 軸間付痕
51-014	第18層-2	磨き器	杯	2-21	(13.4)	9.0	3.9	60	灰	ナデ	ナデ→底部に足手回りヘラタズリ	手持ちヘラタズリ(全面)	軸上に長石・漆母

品番 番号	種別番号	銘柄	銘柄	規格No.	口径	規格	高さ	高さ (%)	色調	内装調整	外装調整	取組調整	備 考
51-014	第18回-3	調整器	杯	19	-	(18.2)	(3.1)	10	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ	
51-014	第18回-4	調整器	杯	15	-	6.3	(3.3)	30	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ(全額)	
51-014	第18回-5	調整器	高台付杯	7	(13.4)	(10.0)	4.3	25	黒	ナデ	ナデ	別紙ヘラタテリ→高台付 付け直しコナデ	
51-014	第18回-6	調整器	蓋	1	-	-	-	5	黒銅				
51-014	第18回-7	調整器	杯	1	(14.3)	(10.9)	3.2	30	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ	床面内面に短ス、上段 調整
51-014	第18回-8	調整器	淨板	1					黒銅	ロロ調整	ロロ調整		調整
51-014	第18回-9	調整器	小型蓋	1	(14.4)	5.4	15.8	100	赤銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラナデ	手持ちヘラタテリ	
51-014	第18回-10	調整器	蓋	1	(29.6)	-	(19.5)	10	赤銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラナデ		靴上に磨く(白色粉)
51-014	第18回-11	調整器	蓋	9-11-14-24	-	(11.0)	(26.7)	20	黒銅	ナデ、ヘラナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	ヘラタテリ	靴上に磨く
51-014	第18回-12	調整器	蓋	2-2-24	-	5.4	(26.8)	30	黒	ナデ、ヘラナデ	ヘラタテリ→ヘラナデ		調整をためて置く
51-015	第19回-1	調整器	杯	11	(13.3)	8.3	4.0	30	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	別紙ヘラタテリ(全額)	
51-015	第19回-2	調整器	杯	1-22	(12.6)	(8.2)	3.4	20	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ	靴上に磨く(白色粉)
51-015	第19回-3	調整器	杯	16	(12.6)	-	(3.1)	10	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ	
51-015	第19回-4	調整器	蓋	7	-	-	-	5	黒	ナデ	ナデ		
51-015	第19回-5	調整器	小型蓋	1	(11.5)	-	(18.6)	5	黒銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラナデ		
51-015	第19回-6	調整器	蓋	14	(17.7)	-	(7.3)	5	黒	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラナデ		内側面調整し(調整 不明確、靴上に磨く、 調整)
51-015	第19回-7	調整器	蓋	1	-	6.5	(5.1)	20	黒銅	ナデ	ヘラナデ	ヘラタテリ	内側面調整し(調整 不明確、蓋調整)
51-016	第19回-1	調整器	高台付杯	17	-	(11.2)	(1.7)	5	黒銅	ナデ	ナデ	別紙ヘラタテリ→高台付 付け直しコナデ	
51-016	第19回-2	調整器	杯	2	(13.1)	-	3.8	40	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ		黒ロコ
51-016	第19回-3	調整器	杯	4	(11.3)	-	(4.2)	20	黒銅	ナデ、ミギキ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ		黒ロコ
51-016	第19回-4	調整器	杯	1	(12.6)	-	(2.7)	5	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ		黒ロコ
51-017	第19回-1	調整器	蓋	1-14-15	10.4	-	(2.9)	60	黒銅	ナデ	ナデ→別紙ヘラタテリ		
51-017	第19回-2	調整器	杯	1-13	13.2	-	6.2	90	黒	ナデ、ミギキ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ		黒ロコ
51-017	第19回-3	調整器	杯	1	(12.5)	-	(4.1)	20	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ		黒ロコ
51-017	第19回-4	調整器	杯	7-8-9	(10.8)	-	(3.1)	30	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ		黒ロコ
51-017	第19回-5	調整器	小型蓋	16	12.7	5.8	12.3	70	黒銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラナデ	手持ちヘラタテリ	
51-017	第19回-6	調整器	小型蓋	1	(12.3)	-	(4.4)	5	赤銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデ、ヘラナデ		
51-018	第20回-1	調整器	杯	1	(12.9)	(7.6)	3.4	5	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ	靴上に磨く
51-018	第20回-2	調整器	杯	1	-	(7.4)	(2.6)	10	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	別紙ヘラタテリ(全額)	靴上に磨く、黒石
51-018	第20回-3	調整器	蓋	1	(22.0)	-	(13.1)	20	黒	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラナデ		靴上に磨く
51-018	第20回-4	調整器	蓋	1	(22.0)	-	(5.5)	5	黒	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデ		靴上に磨く、黒石
51-019	第20回-1	調整器	杯	10	11.8	7.7	4.5	80	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ(全額)	口調整(丸先)
51-019	第20回-2	調整器	蓋	12	(22.6)	-	(15.3)	10	黒銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデ→ナデ		
51-019	第20回-3	調整器	小型蓋	5	(13.0)	-	(4.9)	20	黒銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデ		外側面調整し(調整不 明確)
51-019	第20回-4	調整器	蓋	4-6	(20.2)	-	(6.4)	10	黒	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラナデ		
51-019	第20回-5	調整器	高付杯	1	-	4.0	(4.1)	?	黒銅	別紙ナデ			ミニチュア調整
51-020	第21回-1	調整器	蓋	12-15	(12.8)	7.2	2.8	40	黒銅	ナデ→ミギキ ナデ		別紙表回り→ナデ	
51-020	第21回-2	調整器	高台付杯	59	(13.4)	-	(2.9)	25	黒銅	ナデ	ナデ	別紙表回り→高台付 付け直しコナデ	
51-020	第21回-3	調整器	杯	1-15-16	14.0	6.6	4.2	100	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	別紙表回り→別紙ヘラタ テリ(全額)	
51-020	第21回-4	調整器	杯	14	(13.2)	16.4)	4.5	20	黒銅	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ	
51-020	第21回-5	調整器	杯	1	(12.6)	-	(3.4)	10	黒銅	ナデ	ナデ		
51-020	第21回-6	調整器	杯	18-19	(13.8)	-	(4.0)	40	黒銅	ナデ	ナデ		
51-020	第21回-7	調整器	蓋	20	(18.3)	-	(4.1)	10	黒銅	ヨコナデ	ヨコナデ→ナデ		
51-020	第21回-8	調整器	蓋	42-43	(22.6)	-	(5.6)	5	赤銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデ→ナデ→ナ デ		
51-020	第21回-9	調整器	小型蓋	30-32-33- 34-35-37- 38-39-46- 60-61	(14.5)	7.4	16.4	70	黒銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ	ヘラナデ	ロロ成形の可能性
51-020	第21回-10	調整器	小型蓋	40-51-57	14.0	-	(10.5)	30	赤銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラナデ		ロロ成形の可能性
51-020	第21回-11	調整器	小型蓋	1-9-11	(12.2)	-	(8.5)	20	黒銅	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ナデ		ロロ成形の可能性
51-020	第21回-12	調整器	蓋	17-27-28- 48	(19.4)	-	(5.3)	5	黒	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデ		高台成分の可能性
51-021	第22回-1	調整器	蓋	1-7	-	-	(1.8)	5	黒	ナデ	ナデ→別紙ヘラタテリ		靴上に磨く少量
51-021	第22回-2	調整器	杯	5	(13.8)	9.0	4.2	60	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	別紙ヘラタテリ→手持ちヘ ラタテリ(全額)	靴上に磨く
51-021	第22回-3	調整器	杯	1	(13.6)	-	(4.0)	30	黒銅	ナデ	ナデ		靴上に磨く
51-021	第22回-4	調整器	杯	1	-	(7.4)	(2.5)	10	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	別紙ヘラタテリ→手持ちヘ ラタテリ	
51-021	第22回-5	調整器	杯	1-11	-	7.8	(1.6)	20	黒	ナデ	ナデ→床面下段手持ちヘラタテリ	手持ちヘラタテリ(全額)	靴上に磨く
51-021	第22回-6	調整器	高台付杯	2	-	(9.2)	(1.7)	5	黒	ナデ	ナデ	別紙ヘラタテリ→高台付 付け直しコナデ	
51-021	第22回-7	調整器	蓋	4-8-9	-	-	(14.4)	10	黒	ナデ	ナデ→ナデ		
51-021	第22回-8	調整器	蓋	1-3	(18.4)	-	(10.0)	10	赤銅	ヨコナデヘラ タテ	ヨコナデヘラタテリ→ヘラ ナデ		
51-021	第22回-9	調整器	高付杯	1	-	-	(5.8)	5	黒銅	ナデ	ナデ		高付調整部取付部利用 可能?

品番 番号	種別番号	品名	規格	規格 番号	口径	口径 規格	長さ (mm)	外径 (mm)	色調	内装調整	外装調整	取組調整	備 考
51-021	第23期-10	土曜器	杯	1-14	(13.2)	-	3.6	20	黒	ナデ	ヘラナデ→ナデ		内装黒塗装
51-022	第23期-1	取組器	盤	2	17.6	-	2.7	95	灰	ナデ	ナデ		軸上に磨く必要
51-023	第23期-2	取組器	杯	5	(13.0)	-	(2.8)	10	灰	ナデ	ナデ		
51-024	第23期-3	土曜器	蓋	4	15.5	-	(36.9)	85	黒	ココナデ→ヘラナデ	ココナデ→ヘラナデ		外面青黒色→黒 塗装、軸上に磨く、裏石
51-025	第23期-1	土曜器	蓋	2-5-8-9-11	-	(18.5)	(28.2)	30	黒	ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ→ナデ	ヘラナデ	
51-026	第24期-1	土曜器	杯	1	-	(16.6)	(3.8)	5	灰	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	手付ヘラナデ	
51-027	第24期-2	土曜器	杯	6	12.7	5.9	8.0	80	黒	ナデ	ナデ		黒塗表面、取組器
51-028	第24期-3	土曜器	杯	5	(13.5)	6.5	3.5	70	赤	ナデ	ナデ		
51-029	第24期-4	土曜器	杯	18	(12.4)	(16.0)	4.3	20	赤	ナデ	ナデ		黒塗表面、取組器
51-030	第24期-5	取組器	小型盤	1	(16.4)	-	(4.0)	5	灰	ナデ	ナデ		
51-031	第24期-6	取組器	蓋	1-18	-	-	-	5	黒	ココナデ→ナデ	ココナデ→ナデ		
51-032	第24期-7	取組器	蓋	3-31	-	(15.3)	(18.8)	5	灰	ナデ	ナデ→ヘラナデ	無調整	軸上に磨く、裏石
51-033	第24期-8	土曜器	小型盤	6-10	-	6.6	(16.0)	20	黒	ナデ	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	黒塗表面→ナデ
51-034	第24期-9	取組器	杯	1-5	(13.8)	(7.8)	4.1	20	黒	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	手付ヘラナデ	
51-035	第24期-1	取組器	杯	1	-	8.4	(2.1)	20	黒	ナデ	ナデ		黒塗ヘラナデ
51-036	第24期-3	取組器	蓋	3	-	-	-	5	黒	ココナデ→ヘラナデ	ココナデ→ナデ		
51-037	第24期-4	土曜器	小型盤	6	(11.6)	-	(4.8)	5	黒	ココナデ→ナデ	ココナデ→ヘラナデ		
51-038	第24期-5	取組器	蓋	4	(21.7)	-	(3.4)	5	黒	ココナデ			軸上に磨く、裏石
51-039	第24期-6	取組器	蓋	1	-	(15.2)	(4.0)	5	黒	ヘラナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	無調整	
51-040	第24期-7	取組器	蓋	1	-	(11.0)	(4.5)	5	黒	ヘラナデ	ヘラナデ	無調整	
51-041	第25期-1	土曜器	杯	36	13.6	6.5	4.6	100	黒	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	黒塗表面→黒塗ヘラナデ	
51-042	第25期-2	土曜器	杯	24	(13.1)	-	(2.2)	10	黒	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ		
51-043	第25期-3	土曜器	杯	4	-	(7.0)	(2.7)	10	黒	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	黒塗表面→黒塗ヘラナデ	
51-044	第25期-4	取組器	蓋	9	-	-	-	5	灰	ナデ			大型調整器、外装に 黒塗調整文
51-045	第25期-5	土曜器	蓋	2-3-5-28 29-31-35- 40	(24.9)	-	(19.2)	50	黒	ココナデ→ヘラナデ	ココナデ→ヘラナデ		
51-046	第25期-6	土曜器	蓋	23-26-30 32-33-34- 35-37-39- 40-41-42- 44	(18.2)	(11.2)	18.9	50	赤	ココナデ→ヘラナデ	ココナデ→ヘラナデ	手付ヘラナデ	口縁磨削口拭
51-047	第25期-7	土曜器	蓋	1-18-18	-	(10.2)	(6.8)	10	黒	ナデ	ヘラナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	
51-048	第25期-8	取組器	杯	1	-	-	-	5	黒	ナデ		無調整	表面青黒→黒
51-049	第25期-9	取組器	杯	16	-	-	-	5	黒	ナデ		無調整	表面内黒塗装
51-050	第26期-1	土曜器	蓋	1	-	-	-	5	黒	ナデ			
51-051	第26期-1	取組器	杯	1	-	-	(2.0)	5	灰	ナデ	ナデ		軸上に磨く
51-052	第26期-2	土曜器	杯	160-1	-	(7.0)	(2.2)	20	黒	ナデ	ナデ	黒塗表面→黒塗ヘラナデ	表面内黒塗装(取組器) の必要
51-053	第26期-3	取組器	蓋	2	-	-	-	5	灰	ナデ	ナデ→ヘラナデ		軸上に磨く、裏石
51-054	第26期-4	土曜器	小型盤	1	(11.0)	-	(3.0)	5	黒	ココナデ→ヘラナデ	ココナデ		
51-055	第26期-1	取組器	杯	1	(12.2)	(7.0)	4.2	20	黒	ナデ	ナデ		ヘラナデ
51-056	第26期-2	取組器	杯	1	-	-	-	5	黒	ヘラナデ	ナデ		軸上(取組器のキヤ ン)に磨く付
51-057	第26期-3	取組器	蓋	2	-	7.0	(4.4)	20	黒	ヘラナデ	ヘラナデ		上げ、軸上に磨く
51-058	第27期-1	取組器	杯	2-3	(11.6)	(6.3)	4.4	30	黒	ナデ	ナデ		黒塗ヘラナデ
51-059	第27期-2	取組器	杯	1	(12.4)	-	(2.8)	5	黒	ナデ	ナデ		
51-060	第27期-1	取組器	蓋	1	-	-	(2.7)	5	灰	ナデ	ナデ		軸上に白色調整、蓋の 可動性
51-061	第27期-2	取組器	杯	5-7	13.6	6.5	4.6	70	赤	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	黒塗ヘラナデ→ナデ	軸上に磨く、裏石
51-062	第27期-3	取組器	杯	1-7-8	12.4	6.7	4.0	90	黒	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	手付ヘラナデ(全面)	
51-063	第27期-4	取組器	杯	1-9	(12.2)	(6.0)	4.3	20	灰	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	黒塗ヘラナデ(全面)	
51-064	第27期-5	取組器	杯	1	(13.1)	-	(2.6)	10	黒	ナデ	ナデ		
51-065	第27期-6	取組器	杯	3	-	6.8	(3.9)	20	黒	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	黒塗ヘラナデ→手付ヘラ ナデ(全面)	
51-066	第27期-7	土曜器	杯	1-11	15.2	8.0	5.7	60	赤	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	手付ヘラナデ(全面)	口縁内内黒調整付
51-067	第27期-8	土曜器	杯	1	(14.2)	-	(3.6)	10	黒	ナデ→ナデ	ナデ→ナデ		内装黒色調整
51-068	第27期-9	土曜器	高台付杯	1-10	-	6.5	(3.3)	20	赤	ナデ	ナデ→ナデ		高台付、内装黒色調整
51-069	第27期-10	取組器	蓋	1	-	(13.8)	(7.5)	10	赤	ナデ	ヘラナデ→ヘラナデ	手付ヘラナデ	
51-070	第27期-11	取組器	蓋	5-6	(26.4)	-	(12.5)	10	黒	ココナデ→ヘラナデ	ココナデ→ナデ		
51-071	第28期-1	取組器	杯	2	11.1	8.3	4.0	95	灰	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	黒塗ヘラナデ→手付ヘラ ナデ(全面)	軸上に磨く
51-072	第28期-2	取組器	杯	1	(13.7)	(6.8)	4.0	20	黒	ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	黒塗ヘラナデ	
51-073	第28期-3	取組器	杯	1	(11.6)	-	2.8	25	黒	ナデ→ナデ	ナデ→ナデ		黒塗表面
51-074	第28期-4	土曜器	杯	1	(13.7)	(7.0)	(4.8)	25	黒	ナデ	ナデ		
51-075	第28期-5	土曜器	杯	8	(11.8)	-	(3.8)	25	赤	ナデ	ナデ→ナデ	ナデ→黒塗下取手付ヘラナデ	手付ヘラナデ→高台付 付付付ココナデ
51-076	第28期-6	土曜器	高台付蓋	1	-	(3.9)	20	黒	ナデ→ナデ	ナデ			内装黒色調整
51-077	第28期-7	取組器	蓋	1	-	-	-	5	黒	ココナデ→ヘラナデ	ココナデ→ナデ		
51-078	第28期-8	取組器	蓋	1	-	(8.7)	(6.2)	10	灰	ナデ	ヘラナデ→ナデ	手付ヘラナデ→高台付 付付付ココナデ	高台付、表面内装 黒色調整
51-079	第28期-9	土曜器	蓋	4	(13.8)	-	(2.2)	10	赤	ココナデ→ヘラナデ	ココナデ→ヘラナデ		軸上の磨く、裏石

品番 番号	種別番号	銘柄	銘柄	規格No.	口径	規格	高さ	高さ (%)	色調	内容調整	外面調整	底面調整	備 考
51-033	第29期-10	土曜器	小型器	10	-	7.5	9.4	30	黒鉛	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ→ヘラナデ	無調整	底面木製組
51-032	第29期-11	雑器器	瓶	1	-	-	-	5	凡	ナデ		無調整	底面外面黒「丸」
51-033	第29期-12	雑器器	瓶	1	-	-	-	5	赤鉛	ナデ		無調整	
51-034	第27期-1	雑器器	器	5	(16.2)	-	(2.5)	50	凡	ナデ	ナデ→回転ヘラナデ		
51-034	第27期-2	土曜器	杯	1	(12.8)	-	(2.7)	5	赤鉛	ナデ			
51-034	第27期-3	土曜器	器	1	(22.3)	-	(7.2)	5	赤鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ヘラ ナデ		軸上に黒石・黒母
51-035	第29期-1	雑器器	杯	63-66-81	13.3	7.0	4.3	90	凡	ナデ	ナデ→底面下段半球ヘラナデ	半球ヘラナデ	全面
51-035	第29期-2	雑器器	器	84-86	(20.0)	-	(2.0)	10	黒鉛	ココナデ→ナデ	ココナデ→ナデ		軸上に黒色粒
51-035	第29期-3	雑器器	器	65-80-87	(21.6)	-	(13.2)	10	赤鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ナデ		
51-035	第29期-4	土曜器	器	23-25-30	-	(9.5)	-	10	凡	ナデ	ヘラナデ→ヘラナデ	無調整	
51-035	第29期-5	土曜器	器	40-50-53- 54-77-80	(19.3)	-	(14.2)	20	黒鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ヘラナデ→ヘラナデ		
51-036	第29期-1	土曜器	杯	4	(3.6	7.3	4.1	60	凡	ナデ	ナデ→底面下段回転ヘラナデ	回転赤母り→回転ヘラナ デ	
51-036	第29期-2	土曜器	杯	1	(3.3	7.0	4.95	100	黒鉛	ナデ	ナデ→半球ヘラナデ	半球ヘラナデ	全面
51-036	第29期-3	雑器器	器	9-10-11-18	-	-	-	5	赤鉛	ココナデ→ナデ	ココナデ→ナデ		
51-036	第29期-4	土曜器	小型器	2-9-11-12- 13-15-16- 17	(12.2)	6.2	35.0	80	凡	ココナデ→ナデ	ココナデ→ヘラナデ→ヘラナデ		半球ヘラナデ
51-036	第29期-5	土曜器	酒器	5-6-8	16.0	-	(17.4)	30	凡	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ヘラナデ→ナデ		
51-037	第30期-1	雑器器	杯	190-197	(13.6)	7.2	4.3	60	黒鉛	ナデ	ナデ→底面下段半球ヘラナデ	半球ヘラナデ	全面
51-037	第30期-2	土曜器	高台付瓶	130	14.2	7.6	2.6	60	凡	ナデ	ナデ		内面黒色
51-037	第30期-3	土曜器	杯	91-93	13.6	6.8	4.2	60	黒鉛	ナデ	ナデ		半球ヘラナデ
51-037	第30期-4	土曜器	杯	146	(12.4)	6.1	4.1	70	黒鉛	ナデ	ナデ		全面
51-037	第30期-5	土曜器	杯	138	13.6	6.8	4.4	60	黒鉛	ナデ	ナデ→底面下段半球ヘラナデ	半球ヘラナデ	全面
51-037	第30期-6	土曜器	杯	106-145	12.9	5.3	4.3	80	黒鉛	ナデ	ナデ→底面下段半球ヘラナデ	半球ヘラナデ	全面
51-037	第30期-7	土曜器	杯	20	(13.4)	(6.6)	4.0	10	黒鉛	ナデ	ナデ→底面下段半球ヘラナデ	ヘラナデ	
51-037	第30期-8	土曜器	杯	153	-	6.8	(1.2)	10	黒鉛	ナデ	不明	不明	内外面黒色調しく調整 不明
51-037	第30期-9	土曜器	杯	107	-	(8.9)	(1.3)	5	赤鉛	不明	不明	不明	内外面黒色調しく調整 不明
51-037	第30期-10	土曜器	高台付瓶	154	-	7.8	(2.5)	10	凡	ナデ	ナデ		底面黒母り付ナデ
51-037	第30期-11	土曜器	台付瓶	48-139	-	11.1	(5.7)	30	赤鉛	ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ→ココナデ		
51-037	第30期-12	土曜器	小型器	148	(12.0)	-	(4.0)	5	赤鉛	不明	不明		内外面黒色調しく調整 不明
51-037	第30期-13	雑器器	小型器	1-17	-	6.2	(3.3)	5	黒鉛	ヘラナデ	ヘラナデ		
51-037	第30期-14	雑器器	器	72-89	(26.0)	-	(8.1)	5	黒鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ナデ		
51-037	第30期-15	雑器器	器	151	(30.0)	-	(20.0)	5	凡	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ナデ		軸上にスコリア
51-037	第31期-16	雑器器	器	137	(30.0)	-	(20.7)	10	赤鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ナデ		
51-037	第31期-17	雑器器	器	96-119	(21.0)	-	(6.5)	5	黒鉛	ココナデ→ナデ	ココナデ→ナデ		
51-037	第31期-18	雑器器	器	143	(21.8)	-	(17.0)	5	黒鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ナデ		
51-037	第31期-19	雑器器	器	141	(20.8)	-	(19.2)	5	黒鉛	ココナデ→ナデ	ココナデ→ナデ		
51-037	第31期-20	雑器器	器	56-63-64- 114-131- 133-139	11.4	-	(9.4)	15	凡	ココナデ→ナデ	ココナデ→ナデ		
51-037	第31期-21	雑器器	器	109-110- 149	(19.6)	-	(14.0)	15	凡	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ナデ		
51-037	第31期-22	雑器器	器	73-106-108	-	(15.4)	(10.0)	5	黒鉛	ナデ	ナデ→ヘラナデ	無調整	
51-037	第31期-23	土曜器	器	131	19.6	-	(22.9)	30	黒鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ヘラナデ		軸上に黒石・黒母
51-037	第31期-24	土曜器	器	18-27-31- 79-106- 114-131- 133-139- 142-153- 177	-	8.5	(21.2)	60	凡	ナデ	ヘラナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	軸上に黒石・黒母
51-038	第32期-1	土曜器	杯	77-93	13.3	6.8	4.2	95	黒鉛	ナデ	ナデ→底面下段半球ヘラナデ	半球ヘラナデ	全面
51-038	第32期-2	土曜器	高台付瓶	471-6	13.6	7.0	3.3	70	黒鉛	ナデ	ナデ		底面黒母り付ナデ
51-038	第32期-3	雑器器	器	84	(25.0)	-	-	5	赤鉛	ココナデ	ココナデ		
51-038	第32期-4	雑器器	器	477-9-1-5	(26.0)	-	(16.9)	20	赤鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ナデ		
51-038	第32期-5	雑器器	器	74	(28.4)	-	(11.4)	10	黒鉛	ココナデ→ヘラ ナデ	ココナデ→ナデ		
51-038	第32期-6	雑器器	器	43-62	-	-	-	10	赤鉛	ナデ	ナデ→ヘラナデ		
51-038	第32期-7	雑器器	器	59-63-65	-	(11.5)	(3.8)	10	黒鉛	ナデ	ナデ→ヘラナデ		底面内面へ凸
51-038	第32期-8	雑器器	器	27-52	-	(16.5)	(6.6)	10	凡	ナデ	ヘラナデ		ヘラナデ
51-038	第32期-9	土曜器	器	78-80	-	-	-	5	赤鉛	ヘラナデ	ヘラナデ→ヘラナデ		軸上に黒石・黒母
51-039	第33期-1	土曜器	器	8	13.75	6.4	2.45	60	赤鉛	ナデ	ナデ→底面下段半球ヘラナデ	半球ヘラナデ	全面
51-039	第33期-2	土曜器	杯	6	-	(7.6)	(2.2)	10	黒鉛	ナデ	ナデ→底面下段半球ヘラナデ	ヘラナデ	内外面黒色調しく調整 不明

第3章 まとめ

第1節 調査成果の概要 (第42図)

鶴越遺跡における3か年の調査によって、計14,592㎡を発掘調査し、奈良・平安時代を中心とする集落の存在が明らかとなった。ただ、近世から現代に至るまでの集落と重なっていたため、個々の遺構の遺存度は総じて悪く、近世以降の諸種の造成工事などによって完全に失われた遺構もかなりあったものと推測される。それでも、かろうじて壁下部と床面だけが残るような遺存度の悪い住居跡なども確認し、古墳時代後・終末期～奈良・平安時代にかけて営まれた住居跡30軒あまりの調査を完了した。

弥生時代以前の遺構及び遺物は別に報告されるので、古墳時代以降についてのみ概観すると、古墳時代前期から中期の遺構は確認されなかった。ただ、トレンチ調査などで古墳時代前期の遺物が若干検出されているので、既に失われたのか、それとも発掘区外に存在するのか不明であるが、前期の住居跡も少数ながらも営まれていたことは確実と思われる。微細な破片であるがS字状口縁甕形土器C類の口縁部、柱状部に飾描き直線文の施された高杯の破片が検出されたことは特筆される。ともに東海地方の西部、伊勢湾沿岸地域の特徴をもち、特にS字状口縁土器の胎土は在地のものとはみえないので、搬入された遺物の可能性が考えられる。古墳時代成立期における文物の交流を示す貴重な資料といえるだろう。

古墳時代後・終末期の住居跡は調査区北端の台地平坦部にあり、それ以降の住居跡が斜面部を中心に分布しているのとは対照をみせる。調査区の北に広がる台地平坦部、現在の物井集落の中心部にかけて同時期の集落が展開している可能性が考えられる。

奈良・平安時代の集落は、調査区北側と南側の斜面部でのみ確認された。発掘区中央部の台地平坦部では1軒も検出されなかったが、この区域が近世から現代までの集落に重なり、たび重なる各種造成工事によって遺構が失われた結果であろう。集落の立地として最も好適な場所に堅穴住居が全く営まれなかったというようなことは、物井地区の他の集落遺跡の状況からみてあり得ないことといえよう。斜面部のかなり下部まで住居跡が営まれているのは、小屋ノ内遺跡や稲荷塚遺跡などには見られない状況である。鶴越遺跡は鹿島川が形成した沖積低地に直接面するという好立地を有しているため、そこを生産基盤とする農民の住宅需要が大きかったことが、このような斜面に堅穴住居を建てさせる要因になったものと想像できる。個々の堅穴住居跡は遺存度の悪いものも多く、斜面に立地するため谷間の床面が把握されていないものなどもあって、全容が判明するものは少ないが、この時期の住居跡として通有の形状・規模を有し、付属施設などを含め特記すべきものはあまりない。

堅穴住居の時期については、土器類の推定年代¹⁾から、次の様な変遷が考えられる。

7世紀後葉：SI-016・017 (北部)

8世紀前葉：SI-014 (北部)

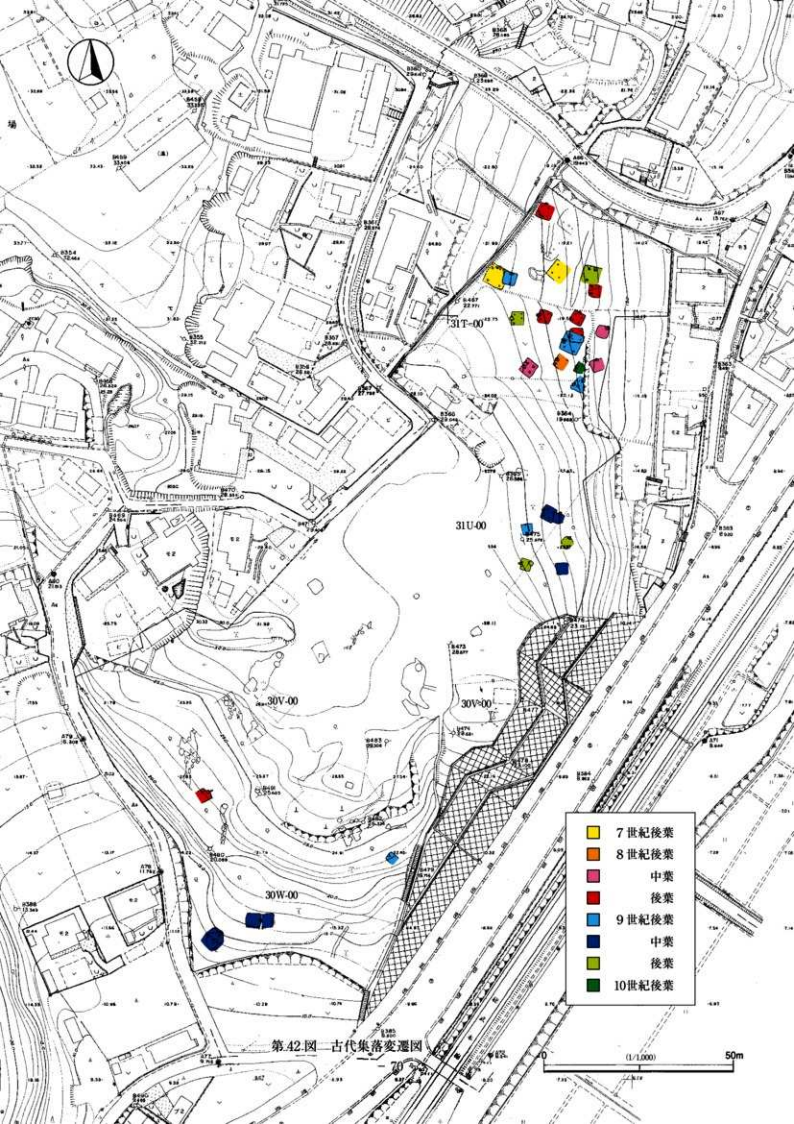
8世紀中葉：SI-013・021・022 (北部)

8世紀後葉：SI-010・011・015 (北部)・035 (南部)

8世紀末～9世紀初頭：SI-018・019 (北部)

9世紀前葉：SI-009・012・025 (北部)・029 (中央部)・036 (南部)

9世紀中葉：SI-030・032・033 (中央部)・037・038・039 (南部)



第42圖—古代集落變遷圖

0 10 20 30 40 50m
(1/1,000)

9世紀後葉：SI-008・020（北部）・027・031（中央部）

10世紀前葉：SI-024（北部）

これによると、台地上の集落は削平等により様相が不明であり、出土遺物が少なく時期不明の住居跡もあるが、斜面部については、8世紀前葉（SI-014）と10世紀前葉（SI-024）の各1軒を除いて、北部では7世紀後葉～10世紀前葉まで、中央部では9世紀前葉～後葉、南部では8世紀後葉～9世紀中葉に、いずれの地区も各時期で2～3軒ずつの小集落として存続したことが想像できる。なお、8世紀末～9世紀初頭とみられるSI-018・019は、古代集落変遷図（第42図）では時期の均等区分上、8世紀後葉に含めている。基本的に1世紀を3期に区分したが、前後の時期にまたがる可能性のものを無理に該当させているので、当時の実態には合わないであろうが、集落変遷の傾向としては明らかとなったと考えられる。

中世以降については、遺物の時期は15世紀後半～19世紀後半までほとんど途切れることなく連続する²⁾。全体的傾向としては、中世遺物は極めて少ないが、15世紀後半の内耳土鍋（SX-013）、16世紀代の土製挿鉢（SK-013）16世紀中葉の瀬戸・美濃産挿鉢（SK-008付近）、16世紀後半のカワラケ（SX-010）がある。近世については、土器は17世紀代主体のカワラケや内耳土器、磁器は18世紀前半の肥前産、陶器は18世紀後半の瀬戸・美濃産が主体で、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器は微量であり、全体では18世紀代が主体である。性格不明の土坑や溝が多く検出されたが、中世の遺構と断定できるものはなく、ほとんどが江戸時代以降から現代にかけて、住居建設や農作業などに伴って掘り込まれたものと思われる。台地上は平安時代後期～中世前期までの痕跡がなく、15世紀以降徐々に開発され、江戸時代後期以降には物井集落の一部として現代まで継続されたことが想像される。

第2節 灰釉浄瓶および上総型土師器杯について

住居跡からの出土遺物は、土師器・須恵器・土製支脚・鉄製刀子・紡錘車といった通常の遺物には限られるが、SI-014で灰釉浄瓶（第18図8）と上総型土師器杯（第118図7）の破片が出土している点は注目される。

浄瓶は僧侶の持物とされ、県内での類例を見ても、上総・下総両国分寺や山武市真行寺廃寺跡などの寺院跡で出土している。このほか、「草刈於寺坏」の墨書土器が出土した市原市草刈遺跡K区、「寺塔」「寺」「佛」墨書の同市萩ノ原遺跡、「大寺」「佛」墨書の八千代市白幡前遺跡、「寺」「仏」「法」の大網白里市砂田中台遺跡など、寺の存在をうかがわせる墨書土器や鉄鉢形土器等仏教関係遺物や仏堂とみられる掘立柱建物跡が検出された遺跡で出土している。

SI-014で出土した浄瓶は、頭部だけの破片であり、出土状況から、破損後に廃棄され混入したものとみられる。この浄瓶が本来集落内のどこで使用されていたか不明であるが、他遺跡の事例からみて、本遺跡にも掘立柱建物の仏堂、いわゆる村落内寺院が存在した可能性は高く、仏事に用いられていたと推測される。今回の調査では掘立柱建物跡2棟が検出されたが、半分以上失われて全容が不明である。柱の配置は整然としておらず、廂の存在も不明で、仏堂の跡とは認められない。ほかに仏教関係の遺物は出土していないものの、集落内のどこかに掘立柱建物の仏堂があった可能性は十分考えられる。

上総型杯は、口縁部から底部のごく一部が遺存するのみであるが、内面に上総型杯の特徴である斜格子暗文が認められる。また、体部外面には上総型杯に通用な、口縁部ヨコナデ後の横方向のヘラケズリ調整が施されている。上総型杯は底部にやや丸みを残した平底を呈するという特徴を有するが、おそらくこれ

も同様の形状であるものと考えられる。

7世紀末から8世紀初頭にかけて、畿内の律令的土器様式の影響を受けて、東国各地で新形式の杯が出現するが、当該期の房総半島では上総型杯がこれに該当する。上総型杯の特徴の一つである斜格子暗文は、畿内産土師器の影響下に成立したとされているものの、畿内産土師器の暗文には斜格子は皆無であり、その系譜の原点は解明されておらず、上総型杯が有するであろう特殊な性格についても不明な点が多い³⁾。

斜格子暗文杯の分布状況は、ほとんどが房総半島に集中しており、他県の出土例はごく僅かで、旧上総国北部に集中している。千葉県内約80遺跡の出土例のうち、安房国が1遺跡、下総国では7遺跡で、その他は上総国からの出土である。下総国における分布は、7遺跡中4遺跡が上総国との国境沿いに集中している⁴⁾。共存遺物として畿内産土師器が多数出土する例や、国替えの儀式が執り行われたのではないかと考察されている遺跡からの出土が特筆される。本遺跡の場合も先述の浄瓶がある。

SI-014の時期は8世紀前葉であり、本遺跡で検出された該期の住居跡はこの1軒のみである。その後、周囲の北部斜面部では10世紀前葉にかけて存続し、中央部斜面や南部斜面では主に9世紀代に集落が開拓する。つまり、灰軸浄瓶と上総型土師器斜格子暗文杯が出土したSI-014が本遺跡の奈良・平安時代の集落では草分け的な住居であることが想像でき、これらの遺物が有する畿内や僧侶との関係と併せて注目されるものであろう。

注1 糸川道行 2006「第7章まとめ」『四街道市小屋ノ内遺跡(2) - 物本地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ -』

(財)千葉県教育振興財団 ほかを参考とした。

- 2 堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年の考察」『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ 発表要旨資料集』江戸陶磁土器研究グループ / 水本和美 1998「陶磁器・土器分類・計測基準」『伝中・土富士前Ⅱ』豊島区遺跡調査会 / 野上建紀 2000「(肥前)磁器の編年」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会などを参考とした。
- 3 佐久間豊 1993「斜格子暗文を有する土師器杯について」『史館』15 史館同人
- 4 大岩桂子 2012「房総における斜格子暗文杯の分布 - 斜格子暗文杯の特殊性について -」『研究連絡誌』第73号(財)千葉県教育振興財団 / 同 2013「上総型斜格子暗文杯の再検討」『考古学の諸相Ⅲ 坂詰秀一先生喜寿記念論文集』立正大学考古学会

写 真 图 版



0000道路



調査前遠景
(南東から)



調査区中央部建物
敷地部分 (北から)



調査区中央部
(南から)



SI-008



SI-008 カマド



SI-008 遺物出土状況



SI-009・017



SI-009 カマド



SI-017 カマド



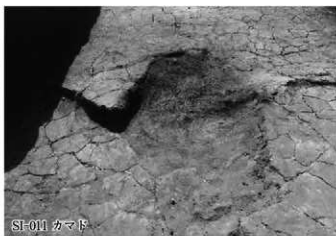
SI-010



SI-010 カマド



SI-011



SI-011 カマド



SI-012



SI-012 カマド



SI-013



SI-013 遺物出土状況



SI-013 カマド



SI-014





SI-020



SI-020 カマド内遺物出土状況



SI-020 カマド



SI-021



SI-021 遺物出土状況



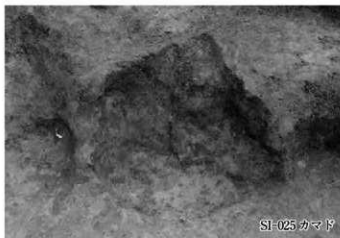
SI-021 カマド



SI-022



SI-022 遺物出土状況





SI-027 遺物出土状況



SI-027 カマド



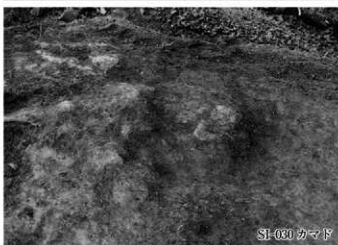
SI-028



SI-029 カマド



SI-030



SI-030 カマド



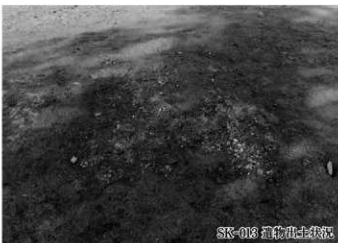
SI-031



SI-031 カマド











SK-033



SK-034



SK-034 人骨出土状況



SK-011



SK-038

SK-021

SK-021 北東・SK-038



SK-038



SK-038

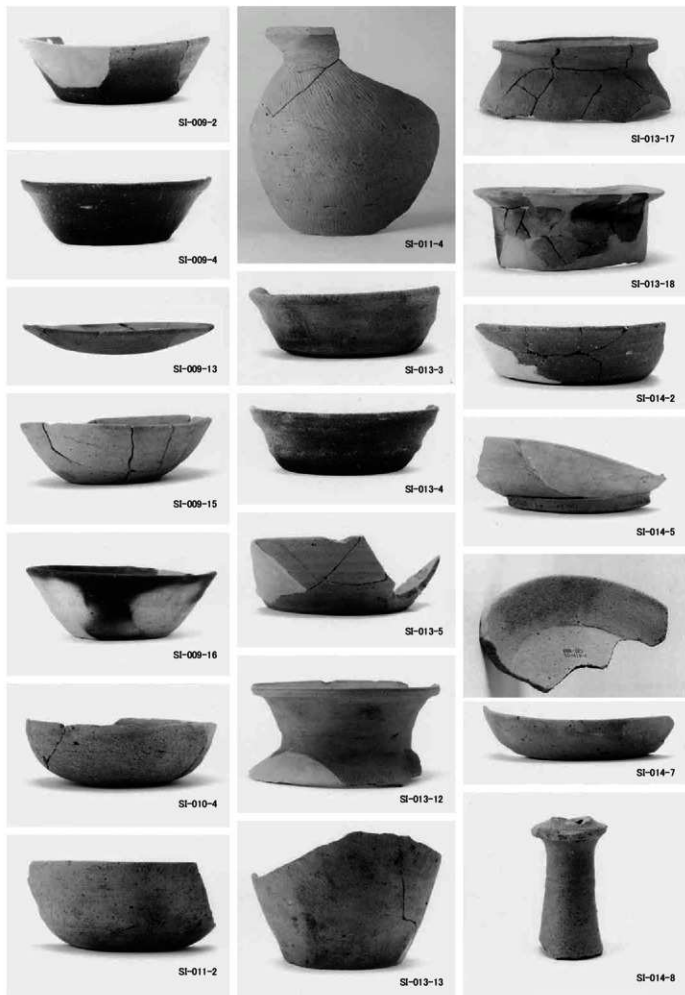
SK-021

SK-021・038



SK-012

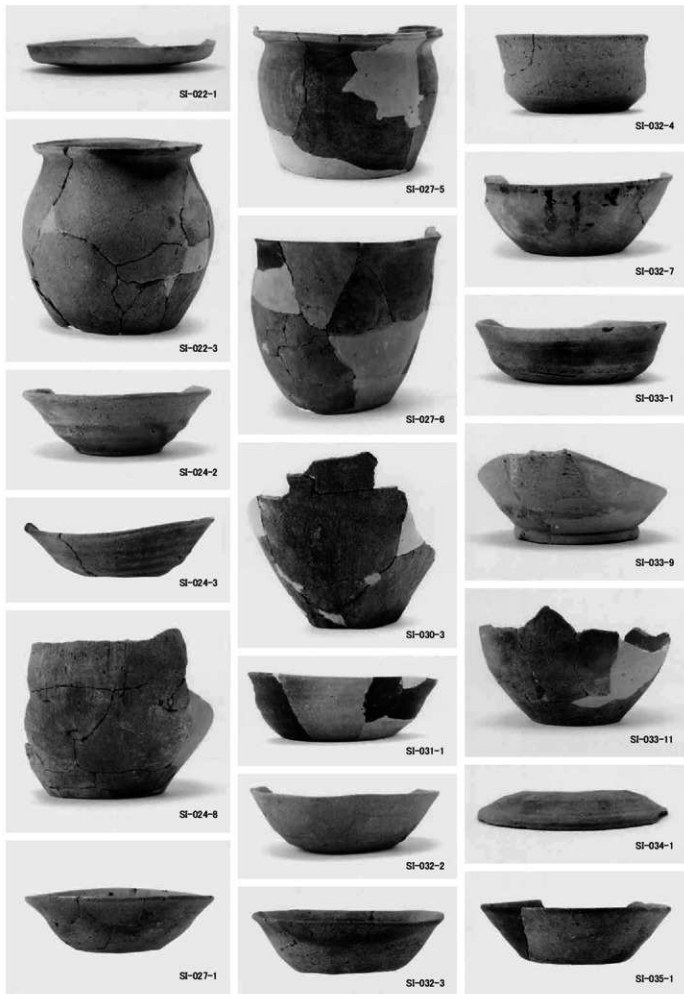




住居跡出土遺物 (1)



住居跡出土遺物 (2)



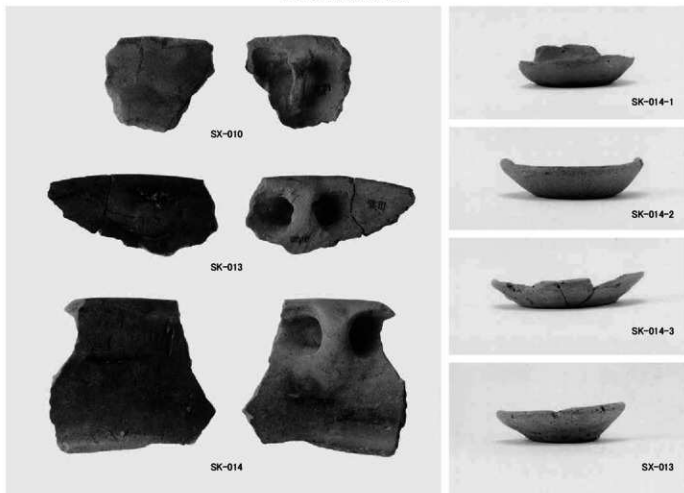
住居跡出土遺物 (3)



住居跡出土遺物 (4)



住居跡出土遺物 (5)



その他の遺構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	よつかいどうししまこしいせき (1) こふんじだいいこうへん							
書名	四街道市嶋越遺跡(1) 古墳時代以降編							
副書名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XVII							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第732集							
編著者名	大岩桂子							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦 2014年 9月 12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
嶋越遺跡	よつかいどうししまこしいせき 四街道市物井 字嶋越464ほか	228	023	35度 41分 06秒	140度 11分 55秒	20090216 ~ 20090325 20090406 ~ 20090520 20090701 ~ 20100226 20100701 ~ 20100730 20100831 ~ 20101208	1,652㎡ 990㎡ 5,850㎡ 6,100㎡	土地区画整理 事業に伴う埋 蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
嶋越遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 2軒		土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品		奈良・平安時代では、灰釉浄瓶・上総型斜格子暗土師器杯の出土や集落変遷が注目される。	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡 30軒		土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品			
	集落跡 墓地	中・近世	台地整形区画 井戸 2基 土坑墓 4基 土坑 42基 ピット 30基 溝状遺構 6条		陶磁器、土器、石製品			
要約	緩斜面から7世紀後葉～10世紀前葉の集落が検出された。中・近世は、台地整形区画内に土坑群が展開する。台地上の古代集落は、近世以降の集落や造成によって損壊を受けたことが推測できる。							

千葉県教育振興財団調査報告第732集

四街道市嶋越遺跡(1)

古墳時代以降編

—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XVII—

平成26年9月12日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団
発 行	独立行政法人	都市再生機構 首都圏ニュータウン本部 東京都新宿区西新宿6-5-1
	公益財団法人	千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株 式 会 社	エリート情報社[印刷出版局] 成田市東和田415-10
